
風の声が聞こえる

椿屋カヲル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の声が聞こえる

【Nコード】

N5389M

【作者名】

椿屋カヲル

【あらすじ】

京の都を影で守護してきた、<霞夜叉>の名を引き継いだ沙羅姫は、新米官吏・朝春となる。

一話完結の短編物語が続きます。
各話は延長上にあることもありますが、基本的にどこからも読めます。

霞夜叉

その国では戦が止むことはなかった。むしろ、資源が乏しくなったことで、持つものと持たざるものの距離がひろまり、まるで何かのふるいにかけられているかのように、弱いものが死に、強きものがさらに至高を目指す世の中であった。

幾度となく内戦や隣国と争いを繰り返していたが、王には古き時代より代々の御世を影より支える一族がいた。その当主は、戦になるとふらりと現れ、軍師として活躍した。剣も弓も、武術においては、王をも凌ぐ力量と一つの時代も語り告げられたが、他国に恐れられたのは、「戦わずして」勝利をおさめるという、彼の知略であった。

決して歴史の表舞台には出ず、鬼神のごとく冴えた頭脳と、容赦なく敵を追い詰める戦術で相手をひねり潰す様は、王家に近い一族にしかその存在は知られていなかった。

——彼らは、いつの時代もその者を「霞夜叉」と呼んだ。

「戦場からの報告です。状況が逆転し、我が軍が敵国に勝利しました。もうすぐ、騎馬隊が帰還します。これから戦後処理で忙しくなります。ここからが文官の出番です。」

伝令を受け取った軍事防衛を一括担当する兵部省の人間が、上司の兵部大輔に報告した。彼は、歴代最年少で省の長官である兵部卿のすぐ下の位である大輔についた秀才だった。

高遠は耳を疑った。戦況がひっくり返っただと。

「どうしてだ。」

負け戦になるはずだったものを、なんとか負けずに調停に持ち込もうと画策していたのだ。一度負ければ、傷がつくが、相手に悟ら

れず「負けずにその状況を回避する」ことさえ成功すれば、良い。戦争は人殺しではなく、外交手段の一部なのだから。

自分は何も指示していない。なのに、敗北必須の条件から回復した。

伝令を受け取った部下は、机に座って、筆をとり書類の処理を始めた。兵部の日常業務は日が昇ってから暮れるまで尽きることはない。

「そうそう、出兵した友人が私個人にも手紙を送ってくれましたね。彼の大將が、前夜に奇妙な夢を見たそうなのです。なにやら赤い鬼のような仮面を被った者が枕元に現れて、喋ったそうで、そのとおりにしたら、敵の親玉の首が取れてしまったそうなのです。」奇怪なこともあるものですね、と朗らかに部下は笑った。

「その話は、真か。」

「手紙、読みます？」

いや、いい、と高遠は何かいらいらしながら扇を開いたり閉じたりした。

（霞夜叉が現れた。）

彼の親族も以前兵部大輔を司っていたことから、伝説として聞いたことはあった。

御伽噺の類だと思って聞いていたが、最近、このように土壇場で状況が覆されることが起こった。戦況の報告は、自分の元に届けられるが、その奇怪さに気がついた時、いつも「不思議なもの」の話が出てきた。

今回のように仮面を被って夢にあらわれたというのはわかりやすいが、いつも戦況を覆すものは不思議な揭示を受ける。暗号文が送られて、それを解読したとたんに良策を思いついたり、戦場で食料としてけものを追っている最中に、隠し通路を発見して敵陣に踏み込むことが可能になったり、様々な「不思議なこと」が起こった。

奇怪だ。しかし、味方であることは間違いないらしい。

その時、部下が書類を持ってやって来た。

「できたつと。高遠様、こちらに決済のハンコお願いできますか。できますよね。」

朝春は、官吏だが、位をもらう前から朝廷で雑用をしていたらしく仕事が速い。日常の所作を観察すると、それなりに格式の高い家に生まれたらしいが、彼の言うところによると貧乏らしい。その為今年の春から、兵部に配属されて十分な禄がもらえるようになったはずなのにも関わらず、新米官吏たちの遊びにもかかわっていないようだ。

ただ、季節を愛でるのは好きらしく、兵部の庭先に植えられた木や花を眺めながら、歌を詠んでいるのを何度か見かけた。先月など帰ったと思ったら兵部室に戻ってきて、捕まえてきた籠の中の蛍を見せて、まだ残っている官吏たちに向かってこう言った。

「新米の私は、仕事ができないから、徹夜しても体を崩すだけですけど、蛍はとれます。」

兵部官吏が仕事続きで、なかなか家にも戻れないことを感じていたらしい。だったら、仕事早く覚えんか、と怒られながらもその晩兵部室でおこなわれた蛍祭にいた官吏たちも含めて、朝春の素直な性格を邪険に思う者はいなかった。

季節は蝉がやかましくなったが、日没が遅くなるのに比例して、朝春は官吏としての能力を磨きつつあるようだった。

「ああ、夜でも暑いですね。虫刺されに気をつけてお休みください。」

高遠は朝春の書類に眼を通しながら、判子を押す手を止めた。

「なあ、朝春、ここに書かれていることはお前が調べてまとめたのか。」

そこには、戦争の始終の考察が書かれてあった。

「この書類を読むと、最近の戦のいくつかはしなくても良い戦だったように思えるのだが。」

「そうですね。今回の戦も表は相手国の一部経済封鎖だったのですが、本当は、こちらの規定破りで勃発したようですよ。」

おそらく、朝廷の高級官僚が黒いことをやらかして、それをうやむやにするためにしかけたものだ。分かりやすく言えば。

「今上帝は、まだ即位して間もないので、本来なら脇で支えるべきものたちが好き勝手しているのでは。よう。」

「しかし、読んでいると証拠がないように思えるぞ。それでも上へ報告するつもりか。」

「そうですね。上に行くまでもみ消されたらそれまでですが。」
でも、試してみない理由もない。

「なあ、朝春。お前は、霞夜叉の話をしているか。」

「なんですか、そのなんとか夜叉というのは。賊ですか。」

高遠は、最近起こった奇妙な出来事を話した。

「不思議ですけど、良いじゃないですか。」

「まあ、問題はないが。」

「きつと、その伝説の軍師さんは平和主義なんですね。」

「違いないな。」

「その軍師が、本当に実在するなら、ぜひお会いして一緒に月見でもしたいですね。」

朝春は立ち上がって、判子をもらった書類を提出するために室を出ようとした。

「ありがとうございます。高遠様。あなたのような方が、兵部大輔で私は嬉しいです。秋は、みなさんと一緒に月を見ましょかね。」

そのころには、私も、もう少し仕事ができるように成長できるように精進します、と一礼して退出した。

数日後、高位の官吏数人が、暗殺されて都は一時、騒然となった。そして、彼らの悪事が知れ渡ると、巷の騒ぎは収束した。

しかし、その中には、兵部省の長官、つまり高遠と朝春の上司である兵部卿宮も含まれていたのので、兵部は朝廷から厳しい視線を浴

びせられた。

ようやく平穩が戻ってきた頃、朝廷の賛同を受けて、高遠は兵部卿に昇格したのであった。

朝春もちよっぴり出世して、秋の兵部室はにぎやかな宴会が開催された。その日の朧月は、大変美しかったと、数週間は兵部室の話題に引き出されたとのことだ。

櫻降る里

その国では、双子は家に不吉をもたらすと言って、忌み嫌われていた。

特に、男女の双子と言うのは、前世で添い遂げられなかった者の生まれ変わりとなれ、より嫌われたのだが、ある高貴な貴族の奥方の元に、男女の双子が生まれたのだった。

産婆も出産後の奥方に、心労を与えたくないと双子が生まれたことを隠そうとしたが、後々、衝撃が大きくなってしまふことを恐れて、夫は妻に真実を告げることにした。

奥方は、双子を見るなり、口を開いた。

「まあ、可愛い。」

そうして、双子は、穏やかな母と、彼女を妻に選んだ父の元で、健やかに育ったのだった。

双子の姉弟には、他にも長兄と長姉がいた。家族に見守られてすくすく育った兄妹の存在を、都の誰一人としてしらなかった。生まれてから都で暮らしたことは一度もない双子だったが、何も不自由はなかった。

しかし、姉弟が成長した数年後、姉が病であっけなく逝き、双子の弟も病にかかって、床に伏した。療養の為に、都を離れて別邸で療養することになった。

「僕は死ぬのかしら。」

「弱気になっちゃだめよ、お外は桜がこんなにきれいに咲いているのに。」

母親は、桜の枝を適当な大きさにそろえて、花瓶にさした。

「ほら、早く元気にならなくちゃだめよ。」

それから数日たつても、弟の体調は良くならなかった。庭先や、周辺の野山の桜木の群生は、次第に満開になっていった。

床にふしたまままでも、桜が舞い散る様子をずっと観察すること

ができた。花びらは、くるくる回って時々、枕元までやってきた。

「やあ、そろそろ元気になってきたかい。」

兄が、見舞いにやってきてくれた。彼は、都でも一、二を争う公達で、高貴な姫君のお婿さん候補に名を連ねているに違いなかった。優秀だけれど、嫌味な所はなく、たまにしか会えない兄を弟は大好きだった。

梅より桜が好き、というちょっと変わった趣味もあった。都では梅を愛でることが風流人みたいなのところがあつたからだ。なので、朝廷では「桜木の少将」と呼ばれてることを、教えてくれた。

「桜を見に、一緒にいくかい。」

兄はそう誘ってくれたけど、弟は首を横にふった。

本当は、今日はとても気分がよくて、朝餉もしっかり食べられたし、別に床に伏している理由もなかったけど、筋肉がずいぶん衰えてしまったせいか、横にいるほうが楽なのだ。

いや。

兄が気立ての良い人物であることは知っている。しかし、自分といくつも変わらない兄は朝廷に出仕しているのに、自分は別邸でひっそりと暮らし、あぐく病に煩わされている様をねたんでいるのかもしれないと気がついた。

「そうか、残念だな。」

兄は、ちよつぴり寂しそうにして、弟の前を去った。

その夜、弟の住む別邸が焼かれた。暖かくなると、賊が出現するようになる。朝廷で近衛をつとめる兄は、腕に覚えがあつたし、警護をする家人も多くいたが、夜中だった為、火の氣に気がつくのが遅れたのである。

騒ぎに飛び起きた弟は、紅蓮の中を抜け出す際に、煙にまかれて骸となった者を越えて行かなければ行けなかった。

最後に、今までの骸よりとりわけ美しい衣を着た骸が転がって

た。

すぐに、兄だとわかった。

弟は、兄の衣を急いで脱がせて持ち去った。なぜ、そのようなことをしたのかわからないまま。

満月の光が降る中、桜の花びらが敷き詰める山を駆け下りた。途中で、雷が起こり、大粒の雨が降り始めた。桶をひっくりかえしたように地上に叩きつけられる雨粒は、弟の背後で、全てを焼き尽くした後の凶悪な炎を収束させていた。

真夜中、駆け抜けて、朝日がうつすら差し込んだ頃、都の門兵が、驚いた顔で彼の有様をみた。

「おや、桜木の少将ではないですか。そのような格好でどうされたのです。弟宮のお見舞いに行かれたのではないですか。」

「急に、朝一番で朝廷での用事を思い出してね。夜中に出発したけれど、雷に驚いて馬が暴れて、恥ずかしながら落馬してしまった。でも、君たちだけに見られるだけですみそうでしたよ。」

泥まみれの顔で、照れ笑いをしながら、都に入った。

「君たちも、春嵐には気をつけた方がいい。」

——ぐつしより濡れた体には、無数の桜の花びらがくつついていた。

或る冬のこと

——風花の散らつく季節だったと思う。

一面、銀世界の森を、ぶつくさ言いながら踏みしめる若者がいた。
「ああ貧乏、やだやだ。早く雑用じゃなくて正式に朝廷に出仕できるようになって。安心できる暮らしが欲しいよ。」

背中に弓矢を、胸に温石を携えた朝春は、時々、雪の重みに耐えられなくなった葉から滑り落ちる雪を払いながら、道に迷わないように慎重に進んだ。すると、狙ったとおり、雪兎がぴよこん、と茂みから飛び出してきた。

（ごめんね、うさちゃん。姉様がおなかをすかせて待ってるのよ。）
胸の中で百万回ゴメン、と言いながら弓矢を引いた。しかし、手が凍えていたので、狙いをずらしてしまった。驚いた兎は、大急ぎで森の奥へ逃げ込む。

「ああ、しまった！ちょっと待ってよ、うさぎちゃん！」

一度、危機を覚えたら、獣は聡いので、再挑戦の望みはないだろうが、とりあえず、森の奥へ入ってみる。大樹がうつそうと生きるこの森は、人の侵入を拒んでいるようだった。実際、朝春くらいしかこの森には入らないだろう。そして、朝春も、いつもはこんなに奥まで来たことはなかった。

ここより奥は、太古の昔、鎮守の森と呼ばれていた区域に入る。実家の所有する山は、このような聖域に隣接していることを知ってはいたが、入ったことはなかった。

雪化粧をした深いもりは、神秘的で、神や精霊を信じたことがないものでも、その存在を感じることができないに違いないほど、荘厳な空気に包まれていた。

「こんな場所があったんだね。」

ひととき大きな樹木、それは、幹だけで人が数十人輪にならない

と囲めないような太さで、高さはまるで天にむかつてそびえ立つ塔のようだった。

その幹は、蔓性の植物に覆われていたが、その中に、雪よりも白く輝く「何か」がいた。

「人間かい。」

その何かは、獣だった。体毛は、淡い金色の狐だが、大柄の狼ほどもある大きさ。普通の獣と違っているところは、目が真紅だという点だ。

「狐が喋った？」

「絡め取られているこの蔓を切って、私を解放できるか、やってみてくれないかな。」

なんで、命令されなくてはならんのか理解できなかったが、とりあえず、もっていた剣で切ってやった。

「恩に着るよ。」

蔓から逃れた狐は、先ほどは葉に覆われてわからなかったが、尻尾が九本もあった。身動き取れなかった体を震わせると、狐は突然、人間の姿になった。眼は少し切れながで、ぬけるように肌が白い。背中を流れているのは、ねばたまのような長髪。長身だがやせたからだ。整った顔立ちで、まつげが長い。まるで、天女のように美しかった。白に紅梅の重ねをした衣が、非常に似合っていた。

しかし、その人物の性別はわからなかった。ただ、幻想的というか、得体が知れない雰囲気をもっていた。

驚きのあまり、硬直した朝春の肩をぽんぽん、と叩き、続けた。

「硬直しちゃっているようだね。適当に自己紹介しておく、瑞獣の類で、名を千代羅というよ。よろしくしてくれたまえ。」
と、申されても。

「せ、聖獣？妖怪ではなくて？」

「九尾の狐には妖怪にもいるけど、女に化けるものが多いよ。私は違う。吉兆の象徴。良かったね。」

「じゃあ、とりあえず、私にとって危ない存在ではないんだね・・

・・・？」

「そうなるね。僕を解放できたと言うことは、陰陽師か巫女の末裔なんですか？人間以外の何かに会ったからって、深く考えないでいいよ。に会えるとは、君は運がいいですね。」

見覚えがないのに、当たり籤を引いたことになってて、「幸運者だなっ！」と言われた気分だ。よくわからない上に、そんなに嬉しくない。

「とりあえず、森をでることにしようか。私は、早く白酒が飲みたいし。」

千代羅は、朝春の手を取ったと思うと、宙に浮いた。当然、朝春も同じようになる。

「ち、ちよつと！なんで、空に浮いてるの？」

「狐の姿で、上に乗ってもらって運んでもいいけど、こっちのほうが早くふもにつくからね。狩りは今日はあきらめたほうがいいよ。この森で殺生をすれば祟られるからね。」

千代羅は、風を起こして、宙に舞った。

「今日の夕餉は、米と汁物で我慢しないといけないなんて……。」

千代羅に手をひっぱられながら、空を飛ぶ最中で、朝春はうなだれた。

「ところで、どうして、男の格好なんかしてるの、君。」

——彼の言葉に、朝春は凍りついた。

朝春が、遅くなった夕餉を食べているそばで、縁側で扇を優雅に扇を仰ぎながら星を見ている者がいる。そばに酒の瓶がいくつも転がっていた。また、飲んだのか。

「ちよつと、うちの家計のこと考えてよ。君が水を飲むみたいにながば酒を飲むから今月もきつと赤字だよ。あーあ。」

「大丈夫。一応加減はしているよ。」

「信じてないからいいよ。姉様はもう寝たの？」

「寝たよ。昼間は、雪かきにおわれていたらしいね。」

異母姉である由羅姫は、もうお嫁に行ってもおかしくない年頃だ。むしろ、行き遅れている。両親は亡くなったが、後見人に誰でも随一の貴人である叔父がいるので、本当ならすぐにでも結婚できるはずだった。実家が、こんなに落ちぶれていなければ。

と、いうのは叔父の息子、つまり姉のいとこの一人が、えらく彼女を気に入っている為、援助を受けたが最後、結婚させられるに違いないので、姉が叔父の親切な援助心もろともに完全拒否しているのだった。

「あの若には、そろそろ気がつかれた？」

「気がつかれたらこまるよ、千代羅。」

「違う、朝春君が本当は、女子だというところに、だよ。」

「それも困るよ。ばれたら、朝廷で働けないし。禄がもらえないから、千代羅も白酒が飲めなくなるよ。」

風花の散るあの日から、千代羅は家に住み着くようになった。

生活の糧、という最優先事項のためもあったが、朝春は幼少の時から「男子」として生きなければいけなくなった。それは、呪いに近く、朝廷の外でも、朝春は「女子」として生きることがなかったし、姉の綺羅以外の人間は、彼は本当は彼女だと言うことを知る由もなかった。

それに千代羅が気がついたのは、彼が聖獣であつたからかもしれないし、そんなことは関係なかったのかもわからなかった。わかったことは、千代羅の話によると、自身を縛り付けていた蔓は強力な呪いだつたようで、簡単にあのときの朝春は切ることができたが、都の陰陽師でも何人それが可能かどうかかわからないということだつた。なぜ、それができたのか、二人にもわからないままだが。

「ちよつと、君、一体何本空にする気だよ！」

私たちが、ようやく雑穀から白米の暮らしに戻れたと思つたら、

居候が増えた。しかも、彼は、食べなくても死なない体のようで、他の食べ物に気が向いたときしか食さないが、白酒は別だった。

「毎日、飲むんだったら、毎日適量ずつ飲んでよ。」

「今日は私の胃袋は休みの日じゃないよ。」

「千代羅っ！」

だったら、姉さまに任せず雪かきくらいしろ、つと、雪降る外に放り出した。

外では、遠くで狼が、何かを訴えるように遠吠えしていた。

姉君の決意

冬の夕暮れ、朝春が、森へ狩りに行った際に、九尾の狐の聖獣である天戒を、拾って帰ってきた。

朝春は、綺羅という異母姉がいたが、二人で家格のわりには、大変貧乏な屋敷に住んでいた。女房も家人も誰一人住んでいなかった。なので、帰ってきた朝春を迎えに出たのは由羅だったが、隣に、切れ目の少年が一緒にいるのをみて、息を止めた

「いやああ！！男！！！！」

そして、家の奥へ逃げ出した。

「何故だ。狐の姿の時なら裸足で逃げ出す人間もいたけど、この姿で嫌われたのは初めてだよ。」

しかも、いつもは、どちらかと言うと、女人と間違われる方が多いのに。

「姉上はね、男嫌いなんだ。」

多分、軒下に住む野ネズミたちのほうが、ずっと仲良くできるほどに。

「朝春の姉は、少将変わってるね。」

「姉君の男嫌いは、まあ、無理もないけどね。」

父の弟の息子からは、偏愛を寄せられているが、母方のいとこの筒井筒（幼馴染）からは、なんかいろいろあつたらしい。朝春は良く知らないが。

「姉さん、戻っておいでー。狩りに失敗しちゃったから今夜は何もないけど、夕餉にしよう。」

朝春に言われて、天戒は狐の姿になった。九尾の狐ではなく、雪山に住んでいるような、小柄の狐に。おそろおそろ戻ってきた姉は、膳の前でちょこんと座った狐を見て驚いた。

「あれ、さっきまでそこに男の人、いなかった？」

朝春は、森での一部始終を話して、姉の前では狐の姿でいること

を約束させた。

「そうなの。ご飯代かからないならいいわ、家にいても。」

「生臭はそもそも食べれないし、定期的に食事を取らなくても平気ですよ。」

時々、白酒をくれたら満足だと、付け足した。

「ところで、このような年頃の姫が、女房も持たず、荒れた屋敷に住み続けたら、ますます婚期が伸びるでしょう。いくらでも援助してくれる親戚がいるだろうになぜ、受けないんです？」

むしろ、由羅の身分と器量から言えば、宮中で宮仕えもできるだろう。

「嫌よ。男がわんさかいるところへなんか行きたくないわ。」

「後宮の女官になればいいでしょう。今上帝には「夜輝らす姫君」と呼ばれるほど、粒ぞろいの美しい姫たちが大勢いると聞きます。」

いまさら新しく後宮入りしても帝に眼をかけられる可能性は皆無に等しい。女官として、それらの姫君の誰かに仕えれば、男嫌いの由羅姫にも仕事が得られる。

「そうね。朝春は、来春から朝廷へ出仕することが決まっているのだし、私も生活の糧を得られるようにならないとダメね。」

「いや、姉さん、二人くらいならなんとかなると思うから、大丈夫だよ。」

惣菜にばくつきながら、朝春が言った。

「家でうだうだ家事をするくらいなら、表でお金を稼いだほうがいいわ。千代羅のいうとおりよ。それにしても、忌々しいわ、この麦飯っ！」

先々週くらいまでは、水を増やして粥にしても、茶碗の中は白かったのに。

「春になつたら、私は、宮使えするわ。決めたわよ、朝春。」

「でも、姉さん、春先は無理だよ。後宮にあがるなら、最低限の準備が必要でしょ。せめて、私の禄が少し貯まる夏ごろにしたらどう？ そうじゃないと、親戚の誰かにお金を借りないといけなくなる

し、そもそも宮使えするなら、親戚の誰かに後見人になってもらわなきゃいけないよ。姉さんの嫌いな、どっちかの家に頼まなきゃいけないといけないと思うんだけど。」

その言葉に、由羅は凍りついた。

憧れの白飯にたどり着くまでには、もう少し受難がありそうだ。

嵐みたいな夜

「朝から夕方まではしとしと降る雨だったのにね、千代羅。日が落ちたらまるで嵐だ。夏になったのに、ちつとも雨が止まない。」

止まないどころか、雷の轟音が時々空から響く。

「夜だから、いいよ。別に外に行く用事もないでしょ。」

千代羅、と呼ばれた細身の狐は、寝そべりながら言った。朝春もその隣に座って、削り氷を食べていた。

「私にも、削り氷をください。」

「君、さつきいらないうって言ったよ。」

「気が変わったよ。」

「氷、買ったら結構高いんだよ！せっかくのもらいものなんだ、大事に消費計画たてないと。君にはいつも白酒飲ませてあげてるだろ。時々的高级品くらい、人間に譲ってよね。」

「ちょうだい。」

につこり笑って（狐なのでよく分らないが多分）こつちを向いた。めんどくさい狐だよ、と思いながらも、朝春はその場を立つた。「ごめんください、家主の方。ごめんください。」

その時、門の外で、かわいらしい声がした。表に出てみると、十歳くらいの子供が二人、傘を差して立っていた。防ぎきれなかった部分が、ところどころ濡れている。

「すみません、僕たちのあるじ様を探しているのです。」

どこかの貴族の家人か、稚児だろう。髪も、二人とも、肩より上できれいに切りそろえられていた。背格好も大変よく似ていたが、顔立ちは美しいけれども異なっていた。一人は、釣り目眼をした凛々しい顔立ちで、もう一人はたれ眼気味で、優しそうな顔立ちをしている。

「ずぶ濡れだね。どうしたんだい。とりあえず、話を聞くのは家の中で。さあ、入って。」

怪しい人物ではなさそうなので、屋敷に入っすぐの間に二人を通した。

「ごめんね。こんな貧乏な屋敷で、びっくりしたでしょ。雨漏れもしてるし。」

天井からは雫が時折おり、下には桶がおいてあった。二人は首を振った。

「いえ、僕たち、この通りのどのお宅を聞いてたずねても、門番に追い払われて、お話も聞いてもらえませんでした。」

そりゃあ、そうだろう。この通りは、貴族の家が立ち並んでいるので、このような子供たちがたずねたところで、門番に追い払われてしまう。幸い、この家は、貧乏すぎて、門番どころか家人も雇うお金もない。残念ながら。

「もう日が落ちちゃったのに、灯りもなしで嵐の中を来たの？大変だったでしょ。一体どうしたの？」

「人を探しているんです。」

「僕たちのあるじ様です。」

「今日の夕方、あるじ様と一緒にお話しながらこの通りを歩いていたんですけれど、ちよつと怒らせてしまったのです。夕方になっても、屋敷に帰って来てくれませんでした。」

「あるじ様に何かあったらどうしようって、僕たち心配で。」
そうして、二人とも、袖で顔を覆った。

「その探し人っていうのは、どういう方なんです？」

削り氷がなかなか来ないと思ったのか、千代羅も三人のいる間にやってきた。しかし、狐の姿ではなく、長身で、美しい人間だ。

「はい、この方位の御年なんですけれど、髪は銀色のような白色のような不思議な色をしておられるので、見かけた方はよく記憶されていると思うのですが。」

この方とは、朝春のことである。二人は、姿勢を整えて千代羅の方に向き直った。人の姿をして現れた千代羅を、どうやらこの屋敷の主人だと取り違えたらしい。朝春より、五つくらい年上に見える

ので、無理もないが。

「朝春と同じ年恰好の方で、髪は白……。そんな方がこの通りをふらふらしていたら、すぐに見つかると思うけどね。」

「ということは、他の場所にいるのかな。心配だと思うけど、今日は、嵐みたいな夜だし、遠くまで探しに出かけたら、君たちも病気になるっちゃうよ。あるじ様なら、きつとどこかで雨宿りしてると思うから、明日一緒に探そうよ。とりあえず、衣貸してあげるから、体を拭いて着替えておいで。」

朝春は、とりあえず、体を拭くための布を取りに奥の部屋に行った。

「だめなんです。」

「今日じゃないと。」

「どうしてですか？」

ついでにお茶も用意した朝春が、戻ってきて二人に布を渡した。

二人は、お礼を言つて、髪から垂れる雫を少しぬぐった。

「今日は、あるじ様の特別な日なんです。僕たち、お祝いしたくて、あるじ様に欲しいものありますか、って尋ねたんです。そしたら、＜月虹＞が見たい、とおっしゃって。」

「でも僕たち、長い間、夜の空を駆けていましたが、そんなの見たことありません。だから、夜にでる虹なんて、ずっと伝説だと思っていました。でも、それがあるじ様の欲しいものなら、二人で一緒にがんばって月虹を作ろうと思ったのです。」

でも、家に帰ったら、あるじ様が黙っていなくなっていたので、二人は嫌われてしまったのではないかと思つて、大慌てて外に飛び出してきたという。

「そっかあ、あるじ様を喜ばせようとしたんだね。でも、君たちのお話を聞いてると、あるじ様は君たちが月虹なんてない、って言ったからじゃなくて、別の理由で今もお出かけ中なんじゃない？」

朝春と同じ年くらいなら、虹くらいでこんなに小さな子供たちにあたる道理がないだろう。そのあるじ様が、大変な気難し屋なら知

らないが。

「入れ違いで、君たちを探しに外にでたのかもよ。夕方まで、何かを外でやってたんでしよう？」

二人は頭を横に振った。

「いいえ、僕たちが、怒らせちゃったに違いなんです。」

とうとう、垂れ眼の少年が、泣き声をあげた。つられてもう一人も泣き始めた時、閃光が闇夜に走り、空の高いところで轟音が響いた。

「今の雷、結構近いところに落ちたね。こんな豪雨が一晚中続いたら、川が氾濫してしまわないか心配だな。」

「氾濫・・・？」

二人は、ぴたり、と動きを止めた。

「ど、ど、どうしよう。川が氾濫しちゃったら・・・。」

切れ長の眼の男の子が、顔を真っ青にして、小さくふるふると震え出した。

「そんな大変なことになったら、あるじ様が大変なことになっちゃう。」

うわああん、と、同時に先ほどより声を荒げて泣き始めた。屋敷では、さらに大きな雷が走り、雨風の強さも増した。このぼる屋敷なんぞ、すぐにふつとばされそうだ。

「な、泣かないでったら。千代羅、君も何か声をかけてあげなよ。」

「そう言ってもね……。」

千代羅は、怪訝な顔で、二人の少年を見つめている。

「おそらく、もうすぐ来ると思う。」

その時、風の音と、屋敷がきしむ音で聞こえにくかったが、数回目で、外の方で「すみません！どなたか！」という声が聞こえた。

「今の空耳じゃないよね。」

「今日は、客人がよく来る夜だね。私が確かめてくるよ。」

千代羅が、外にでると、ただ立っているだけでも、匂うような気品の漂う若者が、傘を指して立っていた。二藍の着物が似合うすつきりとした凛々しい顔立ちだったが、しかし、見た目に限って言えば、年齢は朝春と同じくらいだろうが、千代羅ほどに長身で、幼さの影はない。眼は、切れ長で鋭く、知的な感じがした。とても、小さな子供相手に恠気を起こすような人物には見えない。

「夜にすまない、ここに小さな子供二人がいると思うのだが、僕の勘違いではなからうか？」

「いえ、お待ちしておりましたよ。」

烏帽子に覆いきれなかった部分からは、銀色がかった白髪が見えた。

「あるじ様！」

「あるじ様！」

若者が、家に上げられると、二人は一瞬驚いたが、すぐに駆け寄った。

「日入りした後は、都とて危ないぞ。妖の類に食われることもある。無事で何よりだ。」

泣き止まない二人だが、朝春は安堵した。

「すまぬ。この者たちが迷惑をかけた。外に出かけたと思ったら、夕暮れになっても帰って来ぬので、心配して探しに出かけたが、夜になって戻って来ぬし、嵐はひどくなる一方で、まさか何かあったのかと思ったが、そういうことだったとは。」

「いえ、私たちは、別に構わないです。二人とも、あなたに嫌われたらと思うて、とても心配していたんですよ。」

「朝春殿、と申されたな。心配をかけてすまぬ。今度、礼をさせていただきたい。今宵は、どうぞ、ゆっくりお休みなさってください。」

千代羅殿も、夜分に騒いで、真に申し訳ない。」

別れ際、若者は二人に礼を述べた。屋敷を出た時、嵐はすっかり止んでいて、雲の合間からは待ちかねたように満月が浮かんでいた。月光が、夜目にもはつきりと分かるほど五人をお互いを照らす。

「全くお前たちと来たら、昔から思い込みが激しいんだ。それにすぐ突っ走る。これからは、一度振り返ることも覚えよ。もう一度、きちんと二人に礼を言うのだ。」

「ありがとうございます。」

「やさしくしてください。ありがとうございます。」

そうして三人は朝春邸から去った。

「あるじと家人というより、まるで兄弟みたいだね。」

遠くに、三人分の影と、それぞれが手に持った、三本分のたたんだ傘の影を見送りながら朝春が言った。

「そうだね。君にだけに教えるけど、兄弟というより、あれの正体は川の神で、二人はその使いだろうね。まだ修行中の風神と雷神だね。」

「川の神様が……。」

「おや、驚かないのかい？」

「いや、君の存在が、私にとっては最初の驚きだったというか・・・人間って、ある程度の衝撃を受けちゃうと、それとおんなじくらいの出来事はあんまり衝撃を受けないですむ生き物なんだよ。でも、これで納得がいった。だから、今晚、嵐がひどかったんだ。」

嵐は、二人が感情を激しくしたときに強くなった。おそらく、あるじを心配して探し回っている間、感情のコントロールが上手くできずに、風と嵐を起こしてしまったんだろう。

「風と雷の神が同時に活動すると雨が降るからね。雨が降ると川は潤うが、降りすぎると氾濫して、川に生きる生き物も、付近に住む人々も命を落としてしまう。川の神が病むのはいろいろ理由があるけど、風と雷の神が病んでしまうと同時に影響を受けてしまうことが多いんだよ。」

「そうなんだ。それなら、ずっと仲良く暮らして欲しいね。」

二人が、振り返って屋敷に入ろうとすると、天に、月光を浴びて虹が浮かんでいた。まるで、夢の浮橋のようにな、宵闇にかかっている。

「うわ、綺麗だね。これが月虹かな。」

「そういえば、あの二人、月虹を作ろうとしていたって言ってたね。朝からずっと小雨が降っていたのはこの為だったんだろうね。」

天空を駆けながら頑張る、いじらしい二人の姿が浮かんできた。

「さあ、もう遅いし寝ようか、千代羅。見たかったら月虹見ていいけど、その代わり戸締りはちゃんとしてね。」

「いえ、帰ります。なんだか、今晚も蒸し暑い日になりそうですね。寝る前に削り氷食べてもいい？」

「そういえば、途中だったね。」

あ、と朝春は声をあげた。恐ろしいことを思い出した。

「どうしよう、君に言われて準備してる最中に二人がやってきたから、暑い中に氷を置きっぱなしにしちゃった……。」

そのまま、二人が寝苦しい夜を過したのはいうまでもない。こうして、朝春の＜削り氷消費計画＞は一日にして費えたのだった。

——次に、彼らが氷を食せたのは、いつだったのか……。秘密である。

猫君の思ふ所 上

猫というものは、雨を嫌がるものですので、こういう長雨の日は、おとなしくしているのです。

文月に入つて数日が立ち、七夕も近い今日です。

私の名は珠貴^{たまき}といひまして、やんごとなきお屋敷に買われています。白猫です。拾つてくださったのは、屋敷の家人ですが、立派なお名前をくださったのは、若様です。

「やあ、珠貴か。まだ寝ていないの。」

若様は、宮中ではく桜木の中将>と呼ばれていらつしやいます。昨年の秋の除目で、少将から中將になられたのでした。都でも、最も華やかな公達の一人と周囲からは言われていることは、私の密かな自慢でもあります。

でも、今日は、あんまり近づいて欲しくありません。今日は、若様とそこご友人が屋敷に遊びに来ておられるせいだと思います。

「おや、酒臭くて嫌われたかな。」

「猫にも嫌われるとはな、桜木。」

酒の瓶を持ったまま、縁側に出てきたのは、若様の悪友で、梅香る君として、く香梅の君>と言われている方です。若様は、桜がお好きですが、この方は梅が大のお気に入り、家にはたくさんのお梅が植わっています。この方も、都では大変有望な公達の一人です。

「今晚は、猫の君もお前とは一緒に添い寝してはくれないとよ。」

「香梅、お前が無理にすすめるからだ。悪酔いしてしまっただろうが。」

若様は扇を広げて、自分にあおつた。今日はきつと、蒸し暑い風しか顔に来ないと思いますけれども。

「だから、転んで庭の池にでも落ちはしないかと、見に来てやつたんだ。」

「心配してくれたのか。」

「いや、都の中の姫君の噂的、桜の君の無様な姿をこの眼にくつきり焼き付けて、冥土の土産にでもしてやろうと思つてね。」

香梅の君ではなく、若様の方がこらえきれずに笑い声をもらした自分が、池に突つ込んだ姿を想像されたんでしょうか。

「派手好みで通つたお前にしては、ずいぶんささやかな土産だな。私は、お前が死ぬときは、一番気に入っている紅梅の枝を持っていくだらうと思つてた。」

「いくらなんでも、死ぬときにまで梅は持つていくか。清く正しく生きた死人が、何かこの世のものを一つ、あの世に持つていけるなら、俺は都一の美女を選ぶ。」

……選ぶつて、この方は、死に際にどなたかにとりついて、一緒にあの世に連れていくつもりなんでしょうか。それでは、善良な死人ではなく、ただの悪霊だと思います。

「だから、私は、お前が梅をあの世に持つていつて、麗しい花の精にかえてくれと天上人を脅すんじゃないかと思つてた。」

香梅の君は、ぼん、と手を叩いてその手があつたか、という顔をした。この人なら、なんだかやりかねないという気がするのは、私だけではないはず。というのは、この方は、美しいと噂に聞く姫君たちに片っ端から手を出している、どうしようもない人なのです。

「成る程な。うちの屋敷で一番美しい紅梅の枝なら、絶世の美女の花の精になりそう。その方と一緒になら、俺もさめずに永遠にあの世で楽しく過ごせそう。」

「……お前、いつか、女人に刺されないよう注意しろよ。」

彼は、あちらが自分に夢中になると、すぐにさつと離れていくそうです。この間、若様がぶつぶつ言っていたのを私、この耳で聞いてしまいました。いわゆる女の敵です。

……いつか、私が代わりに、その顔を爪でひつかいてやれないかしらと機会をうかがっている事は、若様にも秘密にしています。「それか、いい加減、結婚しろ。子供も一人でも持てば、妻にも

愛着が沸いて、万年春頭の浮気虫もちよつとは減るだろ。悪いことは言わないから、検非違使に世話になる前にそうしろ。」

「なんで俺が結婚なんか。第一、結婚したい姫なんかいないしな。」

「女に殺されたなら、死んでも読経はあげてやらんぞ。」

「誰が、死ぬか！父も母も結婚、結婚うるさいけどよ、本当に結婚したい姫がないんだからしょうがないだろうが。」

「嘘つけ。いとこの姫にしつこく求婚したけど、断られるどころか、嫌われて逃げ回られたって、さつき酒飲みながら、いつてたじやないか。」

「だからそれは、昔の話っていったらう！子供の時の話だ！」
雨がうつとおしいのと蒸し暑いので、さつきまで床下のひんやりしたところに非難していたので、その話もちよつと聞きました。
盗み聞きじゃ、ありませんよ、たまたまです。

若い公達が、数人でお酒を囲めば、酔いが回ってきたところには、当たり前のように、どこぞこの娘は美しいのなんのって、お互いの恋愛戦記を語り合うわけですよ。

「百戦錬磨だと思っていたお前が、まさか筒井筒の女君にこつぴどく振られる以前に、相手にもされていなかったなんてな。」

若君は、扇で顔をおおっています。笑ってはいかん、と自制しているのか、肩が震えています。

「酒の席のくだらない話を全力で面白がるな。」

額にうつすらと青筋が浮かべて、若君を睨んでいる姿を、ちよつと可愛いと思ってしまうました。機嫌の悪い鳶みたいな顔になっています。

「そういうお前はどうかんだ、桜木。吉野の別邸が焼かれて、母様がお亡くなりになったが、もう喪は明けただらう。お前こそ、さつさと結婚して、父上を安心させて差し上げる。」

「……………」

「それ以前に、恋人の一人もつくつたらどうだ。花のさかりだと

いうのに、お前に関しては、最近の艶っぽい話と言ったら、当代一の職人に、新しく龍笛を作らせたことくらいだぞ。猫の方がまだましだ。」

「もう噂になっているのか、はやいな。」

「なんだ、本当の話だったのか。」

二人で笑い合っておられました。若様の瞳が変わった事が私にはわかりました。

香梅の君はご存知ありませんが、若君には世に知られていない弟君がいらつしゃいました。その方は、生まれてから、ずっと吉野の別邸にひっそりと暮らしていましたが、ある日から病にかかって、ずっと床に伏していらつしゃいました。

実は、子猫の私が拾われたのは、吉野の山のふもとでした。そして、屋敷に連れられて、その方が気分が良くて起きておられている時に、時々、慰めるのが私のお仕事でした。弟君には、年が近くて、顔立ちも瓜二つの兄君が一人おられました。

ある日、屋敷が大火事になりました。弟君は、たまたま風の向きとは逆のところで休んでおられたので、煙に巻かれませんでした。しかし、桜の木が大好きだった兄君は、すでに骸となっていました。その時、私は弟君の寝ている床下におりまして、煙に驚いてでてきた所を弟君に助けて頂きました。そして、兄君の骸をみて、弟君はとっさに兄君の衣を脱がしてそれをすばやく着ました。そのまま屋敷を飛び出し、後は火に追いつかれないよう、一晩中逃げて、京の都に辿りつきました。

お父上の屋敷に戻られた時、別邸が全焼し、母君も家人も全員亡くなったことを聞きました。しかし、誰が、若君を責める事ができましようか。おいたわしい若様を、子猫の頃から、なにより不憫に思っていたのは、私なのですから。

なので、若様が、自由な恋愛をされないというのは、家の繁栄の為に、父上が最も良いと思われた姫をそのまま受けるつもりなのだろう、と思います。

あるいは、一生、結婚されないのかも知れません。お嫁に行かれた二人の姉姫様たちには、子供がいらっしゃるので、跡継ぎの心配はないのです。

「私の心配はしなくていい、香梅。結婚するつもりがないなら、とりあえず、節操なしはやめる嘆き悲しむ姫君から、時々私の方まで、悩み相談の文が届いて迷惑だ。」

「何？そんな事あつたのかよ。」

「一度や二度じゃない。謝るなよ、謝るくらいなら、恋はするなといわないから、数を減らせ。」

「わかつたよ。……努力する。」

「お前、今は、いとこの姫君には興味はないのか？」

なんだ、急に、と香梅の君は眉をしかめた。

「さっきの話を聞いていて、なんとなくな。違うのか。」

香梅の君は、扇を大きく振って否定した。

「違うぞ。なんでこの俺が、あんな女に。子供の時の、一種の気の迷いだ。男は、世界が狭いと、その中にいる手近な女は、全部麗しく見えてしまうもんなだよ、子供のときはな。」

「そこまで否定するなら、その姫君は余程、現在のお前の好みから外れてしまっているんだろうな。」

「そんなところだな。」

香梅の君は、そのまま座り込んで、自分で酌をして再びお酒を飲み始めました。お前も飲むか、と言われて、酔いがすっかりさめてきたのか、若様も一緒に飲み始めました。

「戻っても、やつらはきつともう潰れているだろうから、酒臭い男が寝転がるところで飲むよりは、月の下のほうが旨いだろ。」

「当然だ。しとしと降ってた雨も、いつの間にか止んだしな。雲も途切れて、月も顔を出した。十六夜か、惜しいな。」

「十分だ。恋人の気鬱を晴らすには十分だろうが。」

閉じた扇をあごに当てて、考え込んでいるようでしたが、数秒後、ぱつと扇を開きました。

「七夕か。もうすぐだな。」

「七夕に降る雨は、催涙雨ともいうそうだが、桜木。織姫と彦星の、再開を喜ぶ嬉し涙に違いない。」

「だったら、この間からうつとおしく続く長雨は、どのような気持ちで二人は待っているって事なんだろうな。」

「さあな。俺は、焦らされるのは嫌いな性分じゃないけどな。」

「お前の性格なんぞ、私には興味ない。酒をもっとくれないか。」

「今宵は結構、飲んでるな。長い付き合いになるのに、お前がそんなに飲めるとは知らなかったぞ。」

「いいじゃないか、もっとくれ。そして、なんか面白い話の一つでもしろ。舞でも踊れ。」

立場が逆転してしまったようで、めんどくさいやつだな、といったつも、香梅の君は若様に酒を注いだ。

「面白い話か……。そうだな、さっき七夕に引つ掛けて、ぼんやり思い出したことがあるんだ。さっきのいとこの筒井筒の姫の話なんだがな。」

「いいよ、話してくれ。」

香梅の君は語り始めました。

猫君の思ふ所 下

「そいつはわけあって、俺んこの屋敷で暮らしていた時期があつてな。初めて来た時が、七夕の前の時期だったんだ。俺、いこだって言われても、そいつは、父上と身分違いの女との娘じゃないか、つてずいぶん疑つてて、ずいぶん苛めたんだ。」

「お前は、いくつの時代も子供だったんだな……。」

若様は、わざとらしくため息をついた。香梅の君は、むっとしたが、かまわず続けた。

「でも、そいつ、すごい気が強いなんのつて、すごかったんだよ。蛙やら虫やらを筆習いの道具に忍ばせてやつたりだとか、今思えば、くだらない仕掛けをあちこちにおいて、仲間のやつらと一緒にその様子をこっそり見てた。いつも狙い通りに、ひっかかつてくれるんだけど、驚いた後は、何もありませんでしたワ、みたいにそのままなんだぜ。無理に、強がつている風でもなくて、それがそいつのそのままだったんだ。」

「本当にくだらない子供だったんだな、お前つて。暇があつたら、漢詩や笛の芸事の勉強をすればよかったじゃないか、その時代に。」

以前、今日のように、公達方と酒を交わしていた時に、香梅の君様が、「俺は芸事に優れた女は嫌いだ、自分の得意分野をあからさまに自慢する女はもつと嫌いだ。」と言つておられたことを思い出しました。

「芸事が苦手なことを、本当はこっそり気にしているんだろ。いじめに頭を使うくらいなら、才能をそちらに使えば良かったんだ。」

「練習しても、苦手なもんは苦手なんだよ。だいたい、事やらなんやらが上手い姫つて全員、すごい美人だけど、なんか、霧みたいに消えそつていうか、人形みたいにおとなしくて、前々面白い味のない女ばかりだったぞ。俺の経験から言つと!」

当たり前です。教養に優れた姫君というのは、身分も高く、深窓のお姫様ってことでしょう。あなたさまのように、高貴で容姿も優れていらつしやるのに、中身はがさつというような姫君がこの京都にいらつしやるなら、私、ぜひ、確かめに行かせて頂きます。

「そうなのか？私は、男にくらべれば、女子は誰でも、静かで優美な存在だと思っていたぞ。」

「そりゃ、お前は、身内以外の女に関わったことがないからわからないだろうが。」

念のために申し上げておくと、若様の母上も姉姫達も、深窓の姫君の分類に入ります。

「それで、話を続けるぞ。しばらくして、夜更けに、俺の家のどこかから、琵琶の音が毎夜聞こえるんだよ。」

それは、その姫様の御手にちがいないのでした。香梅の君の話によると、その姫さまは、和歌も音楽も洗練されていて、特に琵琶は大人顔負けの腕だったようです。

香梅の君が、こっそりのぞくと、姫は、なにやら鉢のようなものの前で、琴を奏でているのでした。それは、姫が屋敷に来るときに一緒に持ってきた夏椿の若木だということに、君は気がつきました。そうして、姫はときどき、月の光に濡れながら、悲しそうに夏椿の若木に自分の琴を聴かせてやっていたのでした。

姫の音楽の才を、屋敷の中で知るものはいませんでした。ある日、香梅の君の父君は、知人を集めて宴を開くことになりました。その時に、客人の為に演奏することを、頼まれる事もありました。姫は、本当はいうまでもなく、父君の隠し子ではなく、姪っ子であり、香梅の君のいとこであったのですが、そのことを信じなかった君にとっては、自分の苦手な音楽の才も持ち合わせた姫は、ねたましい存在でしかありませんでした。

ある日、いつものように、いたずらを仕掛けに、姫のいない間に忍び込んだことでした。姫の部屋には、宴会に来ていた客人の中の一人が、大層、姫の演奏に感心されたということで、特別に

姫の為にこしらえた琴を贈り物として、父君に渡されました。その琴が、あまりに立派なものでしたので、家の中は一時、騒然となりました。その箏が、大切そうに、姫の部屋にあったのでした。

君は、その琴を叩き割ってしまいたい心情に駆られました。それが贈り主に知れたら、そして、その犯人が息子しげんであれば、父君が恥をかくことは間違いありませんでした。

なので、君は、琵琶の代わりに、姫が大事そうにしていた夏椿の鉢を手に取り、庭へ持っていて縁側から落としました。鉢は無残に砕け散り、若木も折れてしまいました。

姫の怒り狂う顔、あるいは落胆した顔を見てやろうと、こっそり庭影に隠れていました。すると、戻ってきた姫は、どうにもならない鉢を見て、怒りもしなければ、泣きもしませんでした。

そして、頂いた立派な琴ではなく、自分のものを取り出して、庭を見ながら演奏を始めました。長いこと姫は琴を引き続けていたので、君は庭に隠れたまま、いつのまにかそのまま眠りに落ちてしまいました。

次の日、家人に発見された君は、母君に知られて、大変叱られました。叱られた後で、母君から、姫がこの屋敷を去ったことを知りました。

「あなたが姫をずっといじめていたことを、私は知っていますよ。周りに誰も知らせず、ずっと耐えていたのでしょう。心労が重なったのか、姫は熱を出されたので、よく気のきく女房を私が選りすぐって、別荘に移っていただきました。妹姫が流行り病で、姫にもうつっては大変と、我が家に預けてくださったのに、愚かなわが息子のせいで、寝込まれたと知れたら、私は顔向けできません。」

父上にも、帰ってこられたら、よく叱っていただきますからね、と母君は、念を押しました。母君の手には、白い布で包まれた、夏椿の折れた若木がありました。

「これも、あなたの仕業でしょう。なんと、むごいことをするのです。あなたは、姫がどんな気持ちで、この小さなく沙羅の木に

自分の琴を聴かせていたのか知らないでしょう。」

沙羅の木とは、夏椿の別名です。この若木も、もうすぐ白い花を咲かせていたかも知れないのでした。姫は、自分と一文字違いの妹姫と、同じ名前のこの花を、離れる代わりに屋敷に持ってきたのでした。

姫は、妹ではなく、いとこだったのだと君は思い知らされました。そして、姫が寝込んだことと、夏椿の話を聞いて、なんてひどいことをしてしまったのかと、後悔で涙が溢れました。めったに泣いたことのない君は、止めようとしても溢れてくるものを流しっぱなしにしていました。

「母様、私は大変悲しい事をしてしまいました。どうしたらよいでしょう。」

「姫が元気になって、この屋敷に戻ってきてくださったら、今度は優しくしてあげるのですよ。謝れば、お優しい姫のことですから、きっと許してくださるでしょう。でも、それだけなら、きっとあなたは今日の出来事をいつかは忘れてしまうでしょう。」

あなたも、花木を育ててみなさい、と母君は仰りました。

「大事な人の事を思って、それらを大きくなるまで育ててみなさい。その花が立派に咲く頃には、あなたの心にも他人を慈しむ心が芽生えているでしょう。余計ないたずらをする気持ちもおさまって立派な公達にもなれましょう。そうしたら、その時は、その花を持つて、もう一度、姫に今日の事を謝るのですよ。」

君は、木や花を育てれば、本当によい子供になれるのかどうか、そのときはわかりませんが、そのあとすぐに家人にお願いして、育て方の勉強を始めたということでした。

「なるほど、君の屋敷に木や花が、全部君が育てたものだとい噂は本当だったと言うことが。」

桜木の若様は、微笑みながら、もう一度酒を口に含みました。

「なんだ、お前、今まで疑ってたのか。」

「京でも一、二を争うほどのあのお屋敷の庭の美しさは有名だが

ら。でも、それが、風流事にはぱつと見、全く関心なさそーな君が作ったものだと思ひるのは、親友の私でも難しい事だよ。」

「……殴りたいのか、桜木。」

「夏の屋敷の植物も本当に見事だよ。屋敷を四つに分けて、四季によつて、植える植物を変えているそうだね。でも、春の間には、かなわない。」

この間、若様が招待された場所は、＜夏＞と＜秋＞の丁度中間に位置する場所の間で、夜に招待されたことが少し残念だったと、こつそりついていった私は思いました。それほどに、あの屋敷の庭は評判なのでした。

特に、春の屋敷は、梅が咲き乱れることの美しさと言つたら、京中を探しても、他に勝る場所を見つけるのは大変なほどでした。

「ところで、結局、姫には謝つたのかい？」

「いや、姫が別荘で元気になった時に、妹姫が元気になつてな。

この屋敷に戻らず、そのまま実家に帰つたんだ。それから、一度も会つてない。」

「じゃあ、沙羅の花に文でも書いて、季節の便りでも出してみればいいじゃないか。」

「なんで、今更、便りを出すんだ。それにあいつは、夏椿ではなくてだな……まあ、いいや。」

「いとこなんだろう。彼女の好きな花に手紙をつけて、その中に昔の事をさらりと謝つておけばいいじゃないか。」

香梅の君の話を聞く限り、その姫は教養もあるし、きつと優しい方でしょうから、子供の頃の話だと、頬を染めて笑つてくださるはずですね。子供の頃から、琵琶の跳びぬけた才能があつて、君の従妹なら、都で噂になつていないはずがないのですが、私、風の噂にも聞いたことがないのが不思議ですが。

「それとも、もうすでに誰かの妻なのか？」

「そんな噂は聞いてねえ………はずだ。」

「お前、今、ちよつとあせつたか？」

「なんでだよ！」

後に、君は、母君との約束を果たすために、従妹の姫に文を添えて、送ることを決心しますが、それはもう少し後のお話だと言うことです。

君は、話すのも、めんどくさいようでした。また酒をついで、勢いよく飲み干してから、横になれました。

「もう、俺は寝る。部屋に帰るのも億劫だ。」

「ここですか？」

「立てん。飲みすぎた。」

「俺もだ。」

「今日は調子に乗った。」

「明日は悪酔いしそうでこわいな。」

おいで、球貴、と庭先に向かつて、私を呼びました。若君は、私を抱き上げて、膝に乗せて、胡坐をかいたまま、眼を閉じました。

「男と二人寝なんて、嫌だからな。」

「その科白、そのままそっくりお前に返すぜ。」

そうして、夜はさらに更けていきました。

風薫る季節 一（前書き）

風薫る季節は、中篇程度の内容になります。

風薫る季節 一

沙羅姫は、ある日から、朝春になった。

大納言の二女として、生まれた。大納言の父には、二人の妻いて、一人は朝春の母。もう一人は、長女の由羅姫の母様。つまり、朝春には、異母姉が一人いることになる。妻同士の仲もとても良く、朝春と綺羅もそれは同じだった。

しかし、朝春の母は、＜霞一族＞という影の一派の血を受け継いでいた。その当代は、＜霞夜叉＞として、古来から代々天皇に仕え、時には隠密、戦争や内乱が起これば軍師としてなど、御世を影で支える存在であつたという。その存在は、天皇自身も知らずに存在することもあつたそうだ。

変わっていることは、汚い仕事を請け負っているにもかかわらず、＜不殺＞を信念としていること。血にまみれた過去とは違い、平安の世では、言ってみればなんでも屋みたいな立場になってきている。一族の血を引き継ぐものは当代を除いて、朝春の母しかいなかった。その母は、沙羅姫として朝春を生んだ。そして、亡くなった。正確には、彼女は、暗殺された。その後、朝春も、流行病に冒されてしまった。運よく完治したが、入れ替わるように父も、綺羅の母も、流行病でぼっくり逝ってしまった。

危機感を感じた先代＜霞夜叉＞は、朝春と由羅を引き取って、大納言家の別荘に住まわせ、朝春を次の＜霞夜叉＞とすべく、様々な武術や知識を叩きこんだ。そして、先代の死と入れ替わりに、「沙羅」という名前の姫は、「朝春」という少年に代わり、＜霞夜叉＞の名を引き継いだ。

少年に扮しないといけなかったのは、姫のままだと世の中の動きに敏感になれないからである。この時代、姫君は、めったに表に出ることはなかったのだから。

先代が亡くなった後、すぐに都に戻る気にはならなくて、朝春と

由羅は別荘でのんびり暮らしていた。帰っても、屋敷には、誰もいない。父様が亡くなった頃から、これ幸いと家人が勝手に家財を持ち出し、屋敷は結構荒れてしまっていた。当然、現在は猫の仔一匹もないような場所に成り下がった。親戚に頼めば、なんとかしてもらえるのだろうか、姉妹二人なら何とか自給生活もできると考え、そのままにしている。

そうして、朝春は由羅とのんびり生活を楽しんでいた。朝春は、先代に、いろいろな武術を教えてもらっていたから、馬に乗って弓で小動物を狩ったり、川で綺羅と魚を捕まえて食べたりしていた。本当なら、綺羅みたいな姫のすることではないけど、誰も見てはいないし、そもそも綺羅姫は、朝春以上に活気がある。たまに、男子に生まれたかったわ、と言っているが、本心ではない。

由羅は、大の男嫌いだからだ。

由羅の従妹、つまり由羅の母方と、朝春と由羅の父方の従妹、両方の従妹に、嫌な思い出があるらしくて、トラウマになったそうだ。朝春は、その辺の事情を良く知らないでいる。そろそろ、由羅は、結婚しても良い年頃なのに、父がなくなってしまったから、当分はきつと無理だ。

「いいのよ、私は、結婚なんかしなくて！」

「私よりも、沙羅のほうが心配よ。あの人、なんで沙羅にこんな責任負わせて、自分は逝っちゃうなんて無責任ね。」

「いいの。私は、母様の仇をとる為に、＜霞夜叉＞になったのだもの。それを達成するまでは死ねないよ。それに、私の名前は、朝春だよ。」

由羅が、困ったような、悲しいような顔をした。さっぱりした性格で、容貌は朝春と「双子の姉妹のようだ」と言われていたが、姉のほうが、匂うように美しい姫だと朝春は思う。それなのに、これから、草木も勢い良く茂っているだろう荒れ屋敷に一緒に戻るかと思つと……不憫だった。

「朝春の分も、水張ってあげましょうか？ 気持ちいいわよ。」

「ううん、これから、夕餉の分の狩りに行こうかと思って。兎を何羽か獲りたいな。」

「本当？楽しみに待ってるわ。私も、そろそろこれを仕舞って、琴の練習でもしようかしら。」

「絶対に、日暮れになったら縁側に出ないでくださいね。」

「こんな田舎に賊なんかでないでしょう？」

「いーえ、心配です。この別荘には、私が出かけたら、姉様しかないんだよ。」

その辺、自覚して欲しい。先代＜霞夜叉＞と一緒に住んでいたら、むしろ返り討ちにあうだろうが、今、自分が出かけたら、別荘に残るのは、綺羅だけなのだ。しかし、彼女も気分が良いときは、先代と私の訓練に参加していたときもあったから、賊は無理だろうが、都の軟弱な公達ならねじ伏せてしまふに違いないと思った。

「それにしても、私たち、こうしてみるとよく似てるわね。」

足をのけた桶の水に映った自分の姿と、私を交互に見比べる。

男として生きることになったといえども、都の噂も聞こえてなさそうなこの田舎で、立派な装いをする必要もないだろうと、髪は「沙羅」のときのままの長髪で、格好は狩衣姿。姉様も、女装束が「歩きにくい」とか、文句をたれて、狩衣を着ている。つまり、二人の姿は同じ。着物も色も一緒。背格好も似ているから、遠くからみれば、そっくりかもしれない。

「姉様、都に帰ったら、家の中でも、女の着物を着なくちゃいけないからね。」

「わかってるわよ。でも、男の装束のほうが、琴の練習もしやすいんですもの。」

「はいはい。じゃあ、とりあえず行つて来るから、本当に、気を付けてね。」

気がかりだったが、今日の夕餉も心配なので、馬（残った数少ない財産の一つ！）に乗って、弓と矢も持って、朝春は、狩猟に出かけた。

父が、他の貴族が別荘を建てたがるような場所ではなく、どうしてこのような場所に建てたのか、最初は謎だったけれど、狩りが趣味な人にとっては、この辺一体は最適なようだった。人の姿はないけれども、木や草木は美しく生えていて、獣が時々顔をだす。

馬で林を歩きながら、新緑に薫る風を胸いっぱい吸い込んだ。時々、ぴょん、と飛び出してきた兎をしとめて、林を進んでいった。途中で、鹿の群れとも出くわしたけれども。一人で抱えてもって帰れそうにないので、あきらめた。

途中で、小川が流れていて、由羅が桶の中に足を入れて気持ちよさそうにしていたのを思い出して、真似してみたりもした。それも、終えて、再び馬に乗って林の中を、もと来た道順を通って帰ろうとすると、横で藪が大きく揺れた。

（大型の獣かしら……。）

とつさに弓を引いて、藪のほうに向けて様子を伺う。

「まさか、私を連れて来られたのは、狩りのお供ではないでしょうね。」

「そうではなくて、なんだというんだ。」

「殺生は嫌いです。狩りお供の際は、別のものを呼んでくださいと申し上げたはずですよ。」

「そうか、すまない。でも、ここまで来てしまったのだから。勘弁してくれ。あと、兎を二、三匹しとめたら京へ帰ろう。」

「帰ろう、ではないでしょう……一体、ここはどこなんです？ 方角がわかりません。」

獣ではなく、人間だったようだ。でも、最近、人里離れた生活に慣れたせい、か、人に出会うより、大型の獣に出会うほうが多いから、かなり驚いた。だから、とつさに、不思議な安心感に満たされてしまった。

なので、逃げようとする気持ちを掘り起こすのを、忘れていた。藪からぬおつ、と出現したのは、白馬と黒馬に乗った長身の男の二人組。

「おや……これは。」

白馬に乗った男が、私を見た。

「この辺りに、人が住んでいるとは思わなかった。」

「そういえば、先ほど、屋敷のようなものを見かけましたから、その住人かもしれませんね。なるほど、そこに行けば……。」

「屋敷？そんな話、私は聞いてないよ。」

賊、だと思った。

だとしたら、この辺にまだ仲間がいるのかもしれない。

（由羅姫……！）

朝春は、急いで馬を走らせて、屋敷に向かった。

「ちよつと、君！」

背後で、男たちのどちらかが、叫んだ。かまわず、馬を走らせる。

「まずいですね、見失っては大変です。追いましょう。」

（追つてくるの?!）

高貴な着物を着ていたので、もしや貴族と思ったけど、やっぱり賊だったみたいだ。どうしよう、なんで、こんな人里離れたところにも賊がでるんだよ！

でも、このまま普通に屋敷に駆け込んだら、「私の家はここです」って白状してしまうようなだろう。

仕方なく、相手を巻くような逃げ方をしながら、屋敷から少し離れた木の幹に馬をくくりつけて、徒歩でこっそり屋敷に戻ることにした。

屋敷に近づくと、由羅の琴の音がした。

「あら、お帰り、朝春。意外と早かったのね。」

問答無用で、綺羅の袖口を引っ張って、縁側から室内に引き入れた。庭からは、二人の姿が見えないように隠れる。

「痛っ、何？どうしたの？」

（静かにして!）

影から、こっそりと庭の外をうかがう。

かざりと、庭木の茂みが動く音がして、人の着物らしいもののが

ぞいた。

（姉様の姿、見られたのかな……？）

息を殺して待つが、一向に、庭に押し入ってくる気配もない。どうやら、ただの無人の屋敷だと思ったようだ。貴族の別荘なら、最低でも門の前に家人が何人かは張り付いているだろうから。よもや、姉妹が、二人つきりで切らしているとは思わなかったのかもしれない。

とりあえず……良かった。

安堵して、息を吐く。

「ごめんね。無理やり、中に押しこんじゃって。」

怪訝な顔をして、朝春の顔を見るが、何も聞かなかった。

「なんか、狩りの最中に、人に出くわしたんだ。結構、良い着物を着ていたけど、賊かも知れないから、明日から気をつけてね。私が、屋敷にいないときは、外から見えるところにはいないでね。」

「人がいたの？ そうなの……。もう、近くにいないかしら？」

確認してくるよ、といって、外に出た。

ちょうど、着物の色が見えた所に行ってみたが、何もいなかった。もう一度、安心して、帰ろうとすると、足元に、なにか光るものが落ちていた。

「女物の……扇？」

拾い上げてみると、光っている部分は、金箔が光に照らされている所だった。賊が持つにしては、やけに雅な代物であるが、先ほどの男二人のどちらかが所持するにも、似合わない。かといって、雨にさらされたようではなく、比較的最近に落とされたものだ。

「何だこれ………？」

とりあえず持ち帰り、そのついでに馬を迎えに行った。

その後、しばらく、警戒して日々を過ごしたが、都に帰ると決めた日まで、賊にも、人にもあう機会はなかった。

「朝春は、心配症なのよー。」

と、由羅は最後まで笑っていたが。

そんな、ささいな出来事が、都を騒がせる事の発端だと知るのは、
当分、先のことになるということを、二人はこのときは全く知るよ
しもなかった。

風薫る季節 二

姉妹は、ようやく都に戻ることを決心した。

屋敷の荒れっぷりに肝を抜かれた思い出はさておき、都のにぎやかさは、二人の生活を楽しくするのに十分だった。初めての冬に、たまたま狩りに近くの森に行ったときに、迷って奥の方に入りこんでしまい、奇妙な狐を拾ってきてしまってから、貧乏ながら、さらににぎやかな家庭となった。

「私は、九尾の狐だけど、妖怪ではなくて、吉兆の神獣だからね！」

と、耳にタコができるほど念を押されているのは、いい加減しつこい。本人いわく、千年も生きた天狐だそうで、その間に尻尾がさけて九つになったそうだ。

「二千年生きて、空狐になれるよう、精進しないとねー。」

「ねー、じゃないでしょ、千代羅。昼間から、お酒を消費しないで。」

食べ物を食べなくても生きていけるし、生臭物は禁忌らしいけど、白酒だけは、無限に飲み干す。なのに、一向に酔わない。不思議な体だ。ちなみに、通常は、やせていて長身だけれども、男性とも女性ともつかない、中性的な容貌をしている。（だから、男嫌いな姉様も過剰反応を起こさずに平穏である。）整った顔立ちで、顔も髪もぬけるように白いけれど、波打つ長髪は、他人の前では黒髪になる。本来は、輝く銀髪だけれども、その姿で人前に出たら、驚かしてしまうからだ。

「千代羅、ヒマでごろごろしてるなら、ちょっと用事で手伝ってくれないかな。」

「いやいや、これでも結構忙しいんだよ。知ってるかい？お酒を大量に飲むということは、普通の人は、酔っだろう。よって、この中には健康な体に対して毒素となるものが含まれているにちがいな

いのだよ。だから、体は、それに対抗する為に、通常よりも、多く働かなくてはいけない。つまりだね、私は自体はじっとしたままでも、体内では、勢い良く破壊と再生が繰り返されているので、体内は大忙しであるから、私から体力を奪うことで、それを補っているだよ。」

「……………昨日さ、どつかの屋敷に仕える使用人の格好をして、市場にいろいろ買いにいったんだ。その時にね、まだ秋になったばかりなのに、もう狸とか獣の毛皮が売られてたんだ。商人に聞いたら、銀毛の狐の毛皮って、結構稀少価値があるんだってね。夏の大嵐で、ますます屋根の瓦がどこかに飛ばされちゃって雨漏りも大変だから、早くお金を準備して修理したいね、って姉様と話していたんだ。」

千代羅は、無言のまま、自分が散らかした空の瓶をきれいに一直線に並べて、その後ろで手を突いて、土下座した。未熟者め。

話を元に戻そう。

「この間、良いお話をもらってさ、姉様の後宮出仕のが実現しそうなんだよ。」

「でも、由羅姫は、男嫌いだから、宮中だろうが、後宮だろうが、やっぱり勤めには向いてないんじゃないのかい？」

異母姉である由羅姫は、（今は、奥で、なにかの巻物を読んでいる）そろそろ結婚してもいい時期だ。むしろ行かず後家になってしまっいそんな危機の年齢だけでも、父様が亡くなったのみならず、家の財産もなくなり、屋敷もこんな状態（じめじめしてくると、不思議キノコが床から柱をつたって、天井にのびてしまうような屋敷。）なので、本人の意思の問題以前に、お婿取りできる状態ではない。

この時代、姫の婚姻には、実家の地位、財力がモノを言う。婿が、嫁の実家から、なにかしら援助を受けられるからだ。つまり、出世の踏み台というわけだ。

いくら元々、高貴な身分にしようが、現在の状況が重要。つまり、良き婿を迎えるには、朝春が出世して、由羅の後ろ盾にならないと

無理だろう。しかし、今年の春から、朝廷に出仕したばかりの新米官吏には、姫の貢献をするには無理すぎる状態だった。

なので、由羅を出仕させることを思いついた。つまり、朝廷に上げることで、ちよつとでも公達と接点のある場所に移そうということである。いうなれば、「出会いの演出」だ。

でも、由羅は「男嫌い」だ。

公達がわんさかいる宮中ではたらく女房として、出仕させるのは無理だろう。多分、ひきつけ起こすに違いない。

後宮、つまり、帝の妃がたくさん住むところで、妃の誰かの元で働くのが、一番適当な気がした。後宮は、帝以外禁制だが、時々、宮中に赴く機会もなきにしもあらずであるし、後宮で働く器量の良い女房は、公達の耳にも届くだろう、という期待を寄せて。

由羅姫は、私がここまで画策しているとは知らないだろうが、家で草むしりや庭いじり（天界の父親が、姿をみたら泣くかもしれない。）をしたり、家事をこなすだけでは、一銭の金にもならん、と気がついたらしく、やる気だ。最近、ずっと麦飯が続いていたので、それも、由羅を奮起させる理由には十分……というより、白いお米の為だと思う。全ては。

「いい仕事先が、あつたんだよ。何だと思う？」

「最初の計画通り、帝の妃の誰かに仕えるんじゃないのかい？」

「それが、違うんだよね。いろいろな人をお願いしたら、女東宮様の教育係を探しているっていう話になってね。」

「東宮様？帝と血を分けた妹宮の？確か、御年十五前後位じゃなかった？だったら、もう何人もすでにいそうなもんだけど、違うのかい。」

「それがね、なんか、ちよつとした心の病というかなんというか……。すつこい、臆病で、あんまり人前に出たがらないんだって。すぐに引きこもっちゃうもんだから、周りの女房も扱いに困っちゃうみたいで、誰か、東宮様をしょっぱいてでも、外に連れ出してくれるような女房を希望してるって。」

「うーん、由羅姫に合ってそうな、職場っぽいね。」

「だよ。聞けば、尚侍（ないしのかみ）の待遇で、迎えてくれるってさ。私たちの父様、死んじゃったけど、生前の評判は良かったみたいで、その娘なら、安心です、とか言ってたよ。」

尚侍というのは、有力な家の妻や娘から選任されて、本当なら、天皇の側近くに仕えて、臣下が天皇の間の伝達係りみたいな役柄なのだけれど、名目上の事で、実際は下の位の女官が仕切ってることが多い。言ってみれば、天皇の妃の位である、女御様、更衣様に続く位ではあるけど、女官でもあるという、丁度中間の立場になる。由羅にとって、一番適しているかもしれない。

直球で、後宮のいろいろを取り仕切る、古参の女官に求人はないか尋ねてみたが、「お願い、助けて」的な勢いで、しがみつかれてしまったのが、ちょっと心配だ。そんなに、東宮の性格はひどいのか。

「由羅姫は、何て返事をしたんだい？」

「行くって。一秒も迷うことなく即答だったよ。」

「そうなのかい。勇気ある姉姫に乾杯！」

「どさくさにまぎれて、お酒の瓶を開けない！」

手から取り上げて、もう一度栓をする。千代羅は、ぶつぶつ何かをつぶやいている。

「なんか、言った？」

「自分だって、昨日の夜、そっかの屋敷の宴会でたくさん飲んだくせに……。」

「私のは、つきあいだ！仕事の一種だよ。」

先輩貴族の主催する宴に、連れて行かれたのだ。こういう席で、若者は潰されると決まっている。いかに、回ってきた酒を手元で水の入った杯に、ばれないように摩り替えることができるかに、昨晩は神経をすり減らしたのだ。＜霞夜叉＞が酔いつぶれるなんてありえない。酔いつぶれて、女子だとばれたら、もつとありえない。朝廷で裁判にかけられて流罪だってありうるのだ。

「別に、帝を含めて、朝廷の動きを探るなら、宮中で働く女房のほうで都合が良くはないかい？」

「今働いている、兵部省の方が便利だよ。都の外の状況もわかるし、上司は優秀だから、必要あれば、他の部署の状況についても教えてくれる。都の状況を察するには、やっぱり男装して朝廷にいるのが一番なんだ。馬を乗り回しても誰も文句言わないから、筋力も落ちないし。」

「ふうん。まあ、朝春君がいいなら別にかまわないけど。それで、綺羅姫の出仕の準備について、私は何を手伝ったらいいんだい？」

「うんとね、身の回りに必要なものを最低限そろえる必要があるんだけど、うちにそんな余裕がないから、誰かにお願いしなくちゃならないんだ。とりあえず。」

「大貴族の親戚がいるんじゃないのかい？彼らに頼んだら、姪っ子の仕度品くらい整えてくれるだろう。」

「それが、姉様が、絶対世話になりたくない、って行ってるんだよね。私は、流行り病で屋敷にいたときに、姉様は、母方の従妹の屋敷にいたそうんだけど、なんかそこでいろいろあったみたいなんだ。私は、良く知らないんだけど、多分、香梅の君の事だと思うけど。」

由羅の母上は、先の左大臣の家系で、今右大臣を、その兄、つまり伯父様が務めているらしい。近衛府に勤める右大臣の次男は、香梅の君と呼ばれている。梅の花が、大のお気に入り、右大臣家の屋敷の庭の美しさは都一美しいと言うのが人の知るところではあるけれど、その中でも、「春の庭」は、その御曹司が手をかけた梅の木々が咲き乱れて、雅な香りに包まれるらしい。

都でも有名な公達の一人で、かなりの遊び人で有名だ。私は、直接姿を見たことはないが、地味で真面目がウリの兵部省まで噂が聞こえてくるのだから、よっぽど派手に遊んでいるんだろう。どうでもいいが。

一度、父様が生前の華やかな時代の春先に、若かりし頃の香梅の君から由羅姫宛に文が届いて、家人の女連中が色めきたった事があったが、姉様はさつと眼を通した後に、火鉢にくべた。

友人で、優秀だと評判の右衛の中将が、大の桜好きで有名なことから、対抗して梅を愛でているとか、そうでないとか、いろいろ聞くが、「桜木の中将」にも、私はまだお目にかかったことはない。再び、話がそれた。

「じゃあ、父方の親戚は？結構、年の離れた弟がいるって言ってなかったかい？」

「叔父様のことね。姉様は知ってるみたいだけど、絶対、話たがないし、私も朝廷の誰の事なのかよくしらないんだよね。謎だよ、謎。」

「叔父様は、実はイタチの妖怪だったりして。」

「いやいや、狐の妖怪で十分ですから、うちの屋敷はね。」

「だから、私は妖怪ではなく……。いい加減、覚えてくれたまえ。」

「はいはい。」

訂正するのも疲れるが、叔父は人間である。私の父様、人間だったし……。

「じゃあ、結局、綺羅姫の仕度はどうするんだい？求人が見つかったも、それではどん詰まりだろう。」

「だからね、かくなる上は、羅泉（らせん）先生にでも、頼んでみようとおもって。何か貸してもらえないかな、と思ってるね。」

羅泉先生とは、陰陽寮（ずしりょう）の頭。つまり、陰陽師だ。代々、陰陽師の家系のようだった。さらに、先代のく霞夜叉の協力者みたいで、朝春が本当は女子だという事情も全て知っている。

「羅泉先生なら、お願いしたらなんとかしてくれると、私も思うよ。」

「先生の前で、何か粗相したら、千代羅の尻尾を寝てる間に、全部割いて九本から十八本にするからね。」

「……植物じゃないから、割いたところで、元みたいに大きい尻尾にはならないと思うよ?」

なんか、最近、暴力的な言葉が多くないかい?という千代羅の声を無視して、朝春は出かける準備をした。

風薫る季節 三

「いらつしゃい、朝春君に、千代羅君。」

屋敷の主は、にこにこ微笑んだ。羅泉先生を見るたび、朝春は、春の野山でころころと転がるように、母親の後を追いかけていく子ウサギの集団を思い出す。

「そっか、由羅姫の出仕が決まったのですね。良かったじゃありませんか。」

ゆつくりとしていて、穏やかな話し方だ。羅泉と話していると、朝春はとても落ち着く感じがした。

「なので、最初の時期だけ、周囲の女房さんに笑われない程度に見の周りの準備をしてあげたいんですけど、私の力が足りなくて……。」

「確か、親戚の方とは、いろいろあるみたいな話を聞いたことがあったので、そろそろ来る頃だと思っていましたよ。東宮様の教育係に、先の大納言の長姫がなされると、噂好きの貴族がささやく声が、陰陽寮までそよそよと秋の小風にのってやってきましてね。」

「なんで、噂になってるんだろうか。そんなに、東宮様の状態はひどいのだろうか。」

「なんでも、先の教育係は、耐えられなくなって裸足で逃げ出したそうですよ。それを聞いて、少し心配になったんですけれども、由羅姫は大丈夫でしょうか？」

「ちよつと心配になってきた。東宮の教育係ということは、結構な身分と教養のある方が選抜されているはずだと思うんだけど、その方が裸足で後宮を逃げ出すってどうなんだろう。」

「由羅姫なら、心配ないと思いますけどね。でも、私も、朝廷に勤めて長いですけど、東宮様がどんな方なのか、知りませんから、由羅姫が気鬱にかかってしまわないかどうか、慣れるまでは気にかける必要がありますね。」

これが、準備しておいた仕度品ですよ、と明らかに新品の細々したものの全てを、女房に持ってこさせて並べた。

「全部、私が訪ねる前に準備してくださったのですか？」

「ええ、もし頼って来てくれなかった場合は、どうしようかと取り寄せてから考えましたけどね。」

その時は、姪にでも贈りますよ、と笑った。

「でも、ちよつと若い娘向きの拵えなので、嫌味ととられたら大変なので、予想通り朝春君が来てくれてよかったですよ。」

「どうもありがとうございます。必ず、時間をかけてお返ししますから。」

「いいですよ。あなたの父様には、よく目をかけていただいていたから。綺羅姫にお仕事がんばって下さいと伝えて下さいね。」

もう一度、丁寧にお礼を伝えた。手について下げた頭を戻したときに、さっきまで横にいて静かにしていた千代羅の姿がないことに気がついた。

千代羅は、庭の下を何か一生懸命に見つめている。

「何してるの？」

「さつき、庭で変なものが動いた気がするんだけど。」

なんか、普通のものっぽくなかった、とつぶやいた。獲物を見失った猫のように、目線を泳がせている。

「すみません。うちの屋敷には式がいるので、千代羅君にとっては落ち着かないかもしれないですね。」

「……………」

「式神ですよ。靈感が強いと、なにかと妖の類が寄ってくるものでしてね。用心の為に、屋敷に数体張り巡らせているんですよ。」

「そういえば、羅泉先生は、陰陽師でしたね。」

先生は、庭に降り立つと、桔梗の花を手のひらに包んだ。次に開くと、中から紫の蝶がふわりと飛び立つ。それが、私の肩先にとまろうとしたので、ふれようと指を伸ばすと、触ったとたんに、羽が落葉みたいにならばらになて落ちた。しかし、良く見ると、それは

先ほどの桔梗の花弁だった。

「朝春君が、朝廷で過ごしやすいように、周囲に男の君だと思いきんでももらえるよう、ちょっとした術をかけておいたのですけど、上手くいっているみたいで安心しました。」

それは、初耳だ。元々、年齢の割には女の子らしくない外見のおかげだと思っていた。

「でも、無理やり体を触られたりとか、そういう類には無理ですから、重々気をつけて下さいね。」

「……………はい。」

「朝春君は、順調として、これからの問題は由羅姫ですね。いまだに信頼関係のない新しい女房を雇っても、十分な効果があるかわかりませんし、となると、貴方のうちのどちらかが、しばらくは綺羅姫のそばにいたほうがいいと思うのですよ。」

「……………はい？」

「ですからね、後宮で由羅姫の働く様子を一時期見守れば、朝春君も安心じゃないですか。」

ああ、なるほど。

「それなら、私が後宮に潜入するしかないですね。」

「私は？」

「千代羅は無理。」

即効で返答されて、落ち込んでいるが、無視。千代羅に、「様子を伺う」とか、曖昧かつ微妙な事象を判断できるわけない。

「でも、昼間は、兵部省の仕事があるから、無理じゃないかい？言われてみればそうだ。あの仕事に関しては、鬼長官が長期休みとか許してくれるだろうか。」

「高遠には、私の方から言うておくよ。」

高遠とは、兵部卿の宮、つまり朝春の長官のことだ。でも、陰陽寮の頭が、兵部省の長官に対してそのような権力もっていたのだろうか。

「大丈夫ですよ。私は、彼の弱みをいくつか握っていますから。」

雪が解けて、春先に吹く、光る風のように爽やかな笑顔で恐ろしい事をさらりと言った。

「悪いことは言わないので、一月ほど綺羅姫の傍にいて差し上げなさい。ただし、後宮の者に顔を覚えられると、朝春として復歸したときに問題が起きそうなので、その辺は気をつけないといけませんかよ。」

つまり、床下潜伏業務ってことだろうか。きっと、そうだ。

「私は、何か役立てることはあるかい？」

「そうですね。あなたには朝春君の援助役として、そろそろ働いてもらおうと思っただけです。」

「そろそろ」という単語が、ひっかかるけど、先生に任せよう、と彼は思った。千代羅も、わくわくしているみたいなので放っておこう。

そのような感じで、朝春は、羅泉のお屋敷訪問を終えたのだった。帰宅して、持ち帰った調度品を由羅に見せると、大変喜んで、東宮についてのうんたらは、不安にさせたくない、というよりは、話したところで、「貧乏脱出」を掲げる由羅姫には、気にしないと思うので、自己判断で「教育係って、噂によると結構大変らしいよ。」と一応伝えておいた。思ったとおり、「そう」といって、顔も上げずに巻物に夢中のままだった。

そして、とうとう由羅姫の出仕の日がやってくる。

風薫る季節 四

「別に、心配してくれなくていいのよ。」

由羅姫はそういうが、朝春の方もすっかり準備が整ってしまった。二人は、後宮の女官から与えられて凝華舎（ぎようかしや）にいた。一般に、後宮の総称される七殿五舎（しちでんごしゃ）とは、主に天皇の後妃の住まう殿舎を指して、文字どおり七伝と五舎が存在する。凝華舎は、別名、梅壺と呼ばれていて、春は植えられた白梅が庭に咲き誇る場所だ。梅が好きな綺羅姫に羅泉先生が気を使ってくれたに違いなかった。

由羅姫は、羅泉からもらった日用品の品々を整理整頓し始めた。鏡を入れる鏡箱には、葵の花の文様があしらわれていて、ところどころに金も使用されている。全く安そうな品物ではないのだけれど、本当にもらってしまったていいの不安になる。

他にも、化粧道具を入れる唐櫛笥なども、細かい装飾の作りで立派だった。綺羅が屋敷で使っているものは、ずいぶん昔に父からもらったものだと思うが、年季が入っている為に、角の色がはげてしまっていて、とてもじゃないが、きらびやかな後宮の人々に見られても良いようなものではなかった。

「あれ、これ、いつの日か別荘の庭で拾った扇子じゃないの？」

「そうよ。女物だから、朝春が私にくれたんだっけね。落し物にしては立派な扇だったので、持ってきたのよ。私の持ち物の中で、宮中で使っても恥ずかしくない品って言ったら、残念だけど、これくらいしかなかったのよね。」

ほかに、羅泉先生が、数本扇を忍ばせておいてくれた。それらとは違って、拾い物の扇は古風な作りで、高級そうな代物だった。その扇で、顔に風を送ってみる。季節は秋といっても、暑く、吹く風は乾燥している。生い茂った木々には、まだ蝉が鳴き続けているので、虫の声が聞こえてくる時期には、まだ早そうだ。

とうとう、二人は、この登華殿にやってきたのだった。

朝春は、由羅姫の遠い親戚の尼僧、という羅泉先生の設定で、一緒に綺羅姫とやってきた。もし、女房の格好で、忍び込んだ方が、紛れて目立たないかと思ったが、男装する為に髪を切ってしまったので、無理なのだ。しかし、尼になって忍び込むにも無理があるのでは、と思っただけ、人がずいぶん辞めた（逃げた、ともいう）そう、一時だけでも東宮の面倒を見てくださるなら一緒に来てください、と言われたと、羅泉は言っていた。

この内裏で働く女房は、二種類いて一つは、天皇に仕えているんなことを取り仕切る女房と、後宮に住む妃が実家から引き連れてきた女房だ。門から入って、この局に案内される間に見かけた人たちは、皆、教養も気品もある女性ばかりで、ちよつと気後れしてしまう。

「ところで、本当にそのへんは、大丈夫なんでしょうね？」

「大丈夫だってば。羅泉先生が、ちゃんと主上（おかみ）に念を押してくれたし、主上も了承してくれたよ。」

由羅が心配しているのは、うっかり主上がたずねてきたりしないでしょうね、という不安だ。

「内侍は言ってみれば、妾の一人でしょう。正式に入内させられないような姫を名目上、出仕させる為の手口じゃないの。」

「でも、姉様の場合は、父様の娘なら教養ありそうだと、私が仕事先を探しに口聞きしていた女官が、東宮の教育係にぴったりそうだと主上にこぼしてくださったから実現したんだよ。女官とはいえ、内侍は立派な役職だから、会議にもかけられたし、そこで、羅泉先生が、姉様の事情をそれとなく、主上に伝えてくれたみたいだから、大丈夫だと思うよ。時々、妹のご機嫌伺いに見えるかもしれないかも知れないけど、その時は、隠れておけばいいって。」

本当の事を言えば、主上には、身分も容姿も教養も、申し分のない妃がすでに三人おられるので、これ以上、浮気心を起こしたら、人ならぬモノから崇られるに違いないだろう……と噂されている。

「ねえ、車を用意してくれたのも、羅泉先生なのかしら？」

「そうだよ。貴人がまさか歩いて内裏に行くわけにはいかないからね。」

「面倒をみてもらって本当に申し訳ないわね。その分、仕事がんばらなくちゃ。もうすぐしたら、どなたか呼んでくださるから、一緒に東宮様の元に行きましょうね。」

「そうだね。」

その時、渡りから乱れた足音がして、それがこちらに近づいてきた。洗練された女房の者とは思えない。何かあつたんだろうか。緊張が走った。

「もしもし、由羅様、涼安様、いらっしゃいますか？お疲れの所、えらい申し訳ありません。でも、ちょ、ちょっと来ていただいてよろしいやろうか？」

几帳の奥から、足音の主らしい声が聞こえる。年齢は、姉様より少し上くらいだろうか。ちなみに涼安というのは、私の偽名だ。

「私も東宮様に仕えるものの一人で、衛門と申します。」

「どうぞ、こちらに入ってきて下さらない？」

衛門と名乗った女房は、息を落ち着かせる余裕もないといった様子で、すぐるような眼を二人に合わせた。

「大変ですよ。東宮が、また、ご乱心です。今日は、私たちの手にも負えへん有様で。すみませんけども、手を貸していただけませんか？」

東宮様が、乱心……………？

姉妹は顔を見合わせて、そのまま何もいわずに立ち上がって急いだ。東宮が住むのは、ここからほぼ反対側にあるといっても良い、昭陽舎（しょうようしゃ）。庭に梨が植えられていたところから、梨壺とも呼ばれている。

本来ならば、東宮様の御前に出るのだから、心の準備がもう少し必要だと思っが、急に呼ばれた。由羅も、十二単装束に身を整えていたことに安堵したに違いない。化粧も、念入りではないが、手抜

きでもなさそうだ。

そのまま、連れられて、東宮様がいる梨壺まで近づくと、中から叫び声がした。

「私なんて！私なんて！」

「おやめください、東宮様！」

「うあああ！」

声の主は、部屋にある小物を手当たり次第投げつけているらしく、時々いろんなものが中から飛んでくる。衛門は、頭を抱えて、固まっている。姉妹はそつと中を伺ってみた。女房たちは、東宮を落착かせようとするもの、飛び交う小物を必死で避けるもの、恐怖で動けなくなっているもの、逃げ惑うものなど様々で、耐え切れなくなったものから順に朝春たちの方へ逃げ出してきた。

その中心では、髪の毛を振り乱して、真っ青な表情をした……、一瞬、本物の物の怪じゃないかと思っただが、多分、この人が、噂の女東宮様なのだろうと思った。

全ての女房が、逃げ出して、私たちの後ろに隠れた。叫び声が無くなって、少し穏やかになった室では、東宮様が肩でゼイゼイ、と呼吸をしていた。投げつける小物が、飛び散ってしまっただ、もうすでに手元にはないからだ。

ゆっくりと、東宮様がこちらを振り返った。ぎろりとらみつけるような瞳が怖い……。もし、猫の仔だったら、全身の毛を逆立てて、フツー！と威嚇しているに違いなかった。

本当に、陰陽師とか僧とか呼んで、祈祷とかしてもらった方がいいんじゃないだろうか。

全員が、何も言えずに沈黙して、固まっている中、由羅姫は、かがんで、自分の近くに飛ばされてきた鏡箱らしきものを拾い上げた。由羅の肩越しに見ると、その鏡箱は、まだ新しそうなものにも関わらず、ぶつけられた衝撃で漆がところどころはげてしまっている。

その時、朝春は、由羅の中で何かがブチッ、と切れる音を聞いたような錯覚がした。

「あなたね……、こんなに物を粗末にして、タダですむと思ってるのかしら？」

錯覚じゃ……なかった。

由羅姫の周囲の空気が氷点下になったことを察して、後ろに下がった。粒ぞろいの女房たちは、勘も良いようで、私より早く、今度は東宮ではなく、綺羅から逃げた。逃げ遅れた朝春は、法衣の袖をつかまれた。

「何が不満なのか知りませんがね！この鏡箱一つに、一体、どれだけお金がかかっていると思っているのよ！あんたみたいに物を粗末にする人間は、貧乏神にたたられてしまえば良いのだわっつ！……！」

くわっ、と眼を見開いて、今は物の怪と比べてもどっちが本物？と思うような状態の、雅な姫に向かって一括した。まるで、雷が、落ちたような怒声だった。

今の一撃で、女房たちは、さらに遠くへ逃げた。そして、ひよっこりと顔だけのぞかせて、こちらを伺っている。

東宮様は、さらに眼をまん丸に見開いて、由羅を呆然と見つめている。というか、恐怖を通り越して、硬直してしまったようだ。金縛りにあつたように、微動だに動かない。

「みなさん！」

由羅が、女房達のほうへ振り返った。全員が、びっくりと肩を震わせた。

「この姫宮は、いつもこんな調子なのかしら。だとしたら、あなたくし新参者ですけど、教育係として許せなくてよ。これから、お話をするので、皆様はあたくしが良いというまで、この部屋から遠ざかっていただいても良いかしら？」

カクン、カクン、と音がしそうなほど、全員、首を立てに振っている。登華殿内での、力関係が構築されてしまった瞬間だと言えるかもしれない。

さーっと女房が消えていくのを確かめて、由羅は再び、東宮様の

方へ向き直って、室に入っていた。朝春も、袖をつかまれたままなので、つられて入る。

「覚悟は、おありね、東宮様？私の前で、物を粗末にするものは、笑顔を作れなくてよ。」

怖い。こんな性格だっただろうか？いや、元々、男装している自分よりも男気溢れる性格だって知っていたけれど、琵琶も箏など音楽は上手だし、薫物も高い原料を手に入れられないわりには、良い合わせを作るれるから、家の中で、本当なら家人にやらせるような針仕事をしていても、やっぱり根っからの雅な姫という印象が、朝春にもあつたのだ。こんな怖い人だったわけ？

「誰？」

「貴方の新しい教育係よ。噂では、今まで何人もの教育係を追いつ出したそうね。残念ながら、あたくしの根性は、そこらの野草よりもずっと図太くてよ。喧嘩をするなら、覚悟されてね。」

怖い……！エセ尼なので、所々間違っているかもしれないが、神様、仏様、お題目唱えさせていただきます、と、朝春は、心の中でぶつぶつ唱えた。

「東宮……いえ、姫様なら、姫様らしく物を大切に穏やかにお過ごしなさい！」

「そうか、あんたがこの間から女房連中が噂していた由羅内侍やな。せやったら、教えたる。」

私は、姫宮やなくて、男や、と東宮はやけくそのように言った。

「梨壺の女房だけは、みんな知ってる事やけど、表に知れたら混乱するさかいに、口封じされてる。主上（にいさま）も知らん。まだ、私の事をほんまもんの妹宮やと思ってる。そやさけ、辞めた女房も外でばらしたら死罪やで。」

今度は、由羅姫と朝春が、眼を丸くする番だった。

「うちの母上が、私がお腹の中にいる時に、神さんか仏さんが知らんが現れて、再び、自分が夢に出てくるまで、息子を女として育てへんと、無事に成長できん、とのたまわったそうや。」

「だから、姫宮として、今まで生きてこられたのですか？」

朝春も、由羅姫の背中の影から、恐る恐る聞いてみた。

「あんたは誰や。」

「由羅姫の遠い親戚で、尼をしております、涼安です。たまたま京に来る用事があつて、私もお歌や箏くらいはできますから、一時だけでも、東宮様の助けにもなればと思って、由羅姫と一緒にあがらせて いただいたんです。私は、しばらくしたら帰りますので。」

「尼僧か。あんたも、都から離れた場所でも、私の事をばらしたら死罪やで。」

「心得ております。」

東宮にぎろりとにらまれてた。話を聞く限りは、引きこもりで臆病な姫と聞いていたのに、なんとということだ。全く違う。

「それで、先の教育係を追い出されたり、今日も手当たり次第に小物を投げ散らかして、女房連中を怖がらせているのはどういう理屈ですか？」

「姫のたしなみや言うてこの間は箏を持ってきたと思えば、いずれ男に戻ったときの為に、今日は漢詩を暗誦せいと言う。一体、どうせよと言うんや。私は、今年で十八…… ちゃうわ…… 十九やったかな？」

「私は、御年十五とお聞きましたけど？」

「サバ読んでるんや。十五やったら、まだぎりぎり後宮に引きこもつていても、政治や結婚や言われへんからな。どっちにしろ、私と同じ年の若君は、華の盛り、姫君やったら嫁き遅れ言われても仕方ない年や。それやのに、御簾の外では、女みたいになよよして歌も笛もヘタクソな連中が、年中色ボケでうろついているのに、なんで、私は、こんな格好で、こんな事してなあかんのや。装着（女の子の成人の儀式）までさせられたんやで！」

えらい言われ様だ。それにしても、髪の毛が乱れているのをさし除けば、あらためて見ても、どこから見ても完璧な姫君である。口調は、今は興奮しているせいもあつてか、きついけれども、朝廷で

見かける、東宮いわく、「なよなよした連中」と比べても、肌もぬけるように白く、美しいし、声変わりもまだのせいか、本物の姫よりも、姫らしい。このことを口にしたら、絶対怒られそうな勢いだから決して言わないが。

「じゃあ、今すぐにでも、若君に戻れたら良いじゃありませんの？」

「内侍、私の母上が、再び夢でお告げの主に会うまでつてさつき言ったやろ。それがまだやから、問題なんやて。それやのに……、表上は女になつてゐるのに、東宮にたたされたんや。主上（おかみ）が、あの姫やこの姫やと、美しい姫さんばつか妃にしているのに、皇子さん生まれへんから、本当は弟やけど、妹宮として私が役目をおわされてるんや。」

男なのに、女としての生活を強いられているのに、その上、東宮の位についたとなれば、いろいろ窮屈なんだろう。それで、鬱憤がたまっているのか。

「美しくて、教養もある姫と聞いたたら、周囲に無理言わせて入内させているのに、妃にしたと思つたら、ろくに相手せえへん。釣つた魚はなんとやら、なんかいな。入内の度に後宮に震撼は走るわ、その後も、妃さん同士でバチバチ對抗心燃やし取るわ、その中で、どれだけ気を使って、神経すり減らして生活しているのか、あのボンクラにはわからへんやろうけどな。」

いっぺん、この脇息（肘掛け）、あの頭に投げつけてやりたいわと恐れ多くも主上に対して、暴言を吐いた、東宮だった。

「内侍、あんたも聞くところによると、歌も音楽もいろいろできるそうやないか。貧乏や言うても、なくなられた父様は、先の帝の時から覚えのめでたい高官。身分的には、申し分ない。どうせ、私の教育係としてやけども、狙いは、主上の妃の地位やろ。」

姫宮には似つかわしい、なめるような目で、由羅姫を見た。

「なにバカなこといつてるのよ！」

とうとう、彼は、彼女の逆鱗に触れた。

その、形相に驚いて、さすがの東宮も脅えた表情に変わった。

「あたくしも、教えて差し上げましょう、東宮様。あたくし、殿御という存在が、大嫌いなものよ。だから、女官ばかりがいる後宮にお勤めに来たの。」

まさか、主人が、女装の男だと思わなかったけど、という皮肉を飛ばすのも忘れなかった。

「その点が、誤算だったけれども、私はお金の為なら、一度やると決めた仕事は放り出さなくてよ。」

さあさあ、何が気に入らないの？全部聞いて差し上げるわ、と詰め寄った。

さすがに、東宮も、恐れを通り越して、面白くなったらしく、ついに吹き出して笑い始めた。着物の袖で口を隠している。（姫としての動作が体に染み込んでしまっている事がわかった。）

「嫌だ。笑いが止まらへんわ、内侍。いや、由羅と呼んでもええやろうか？」

「どうぞ。」

「あなたみたいな面白い女房に、初めて会ったわ。身分も教養もあるのに、貧乏で、その上、男嫌いやて？今頃、承香殿、麗景殿、登華殿の女御は今頃、ヒス起こさんばかりにイライラしてるやろうに……。」

梨壺までくるときに、何も気がつかなかったんかいな、と東宮が聞いた。姉様と顔を合わせてみて、そういえば、御簾を横切るときに、中から刺すような視線を感じたような、しなかったような……。

「由羅にその気はなくても、向こうはそうは思っていないで。慣れるまでは気をつけや。」

でも、今日見た限り、全く心配さなさうやけどなあ、と付け加えた。

つまりは、自分達のライバルとして警戒しているのである。当たり前の感情と言ったら、そうなのかもしれないが。

東宮の言つとおり、帝にまだ一人も皇子が生まれていないのも、

大きく関係しているのは、明白だった。

「とりあえず、部屋をきれいにした後で、いくらでも愚痴聞いてあげるから、片付けましょう。」

由羅は、散らかりに散らかった物を拾い始めた。

「そんなん、掃司（かんもりのつかさ）を呼んで片付けてもらったらええやないの。」

「あなたが、自分でやったのだから、やりなさい！」

由羅は、東宮の御前に初めて伺候して、まだそれほど時間も経っていないというのに、遠慮なく一括したのだった。雷を落とされた東宮は、男でも姫宮として育ったせいか、おとなしく由羅姫にしたがって、片付け始めたのだった。

風薫る季節 五

三人で梨壺を片付け終わるまでの時間は、どうして東宮が荒れていたのかを姉妹が理解するには十分な時間だった。

東宮の母上が、夢のお告げを見るまでは、男君に戻れないけれども、戻ったら戻ったで、東宮としての仕事がある。もし、主上の御身になにかあれば、即位しなくてはならないのだから。

しかし、かわいそうなことに、梨壺の外の人間は、彼を「女東宮」とみなしている。言ってみれば緊急措置扱いだ。確か、ぼんやりとした記憶だけでも、女性が皇太子となつたのは奈良時代の女帝が内親王、そして皇太子から即位した一例だけだ。

そして、先の帝には、今上帝と今東宮の二人の御子しかない。先々帝の孫にあたる人ならば、もう少しいるだろうが、血筋から考えて、表上は姫宮である、今東宮を廃する時は、今上帝に御子が生まれた時だろう。もちろん、ずっと皇子が生まれないままの間に、今東宮が、男君に戻る機会があればそのままになるのか、変わるのかはわからないが。一番、最悪なのは、東宮が女君のままで、帝にも皇子が生まれない状態が続くことだ。それは、政治の安定を脅かすことにもいずれ繋がるだろう。全く、ややこしい。

なので、東宮は女君のままで、儒教や道德の勉強を東宮職と呼ばれる家庭教師から学ぶ一方で、後宮で管弦の宴や諸々がなされたときには、上流の姫としての教養も必要とされるという二重苦のストレスから、爆発気味らしい、と言うのが、私が耳に挟んだ噂の真相のようだった。

「東宮様は、本当は悪い方やありませんのよ……。」

と、梨壺を仕切る筆頭の女房らしい衛門は、すがりつかんばかりに姉様に言った。年増の女房は、口が軽そうだというので、梨壺は東宮の秘密を守るために、少数精鋭の若手で占められていた。衛門も、もとは中流貴族の娘のようで、和歌を詠むのが非常に上手く、

その分野の教師も兼ねているに違いなかった。

女房が裸足で逃げ出したというから、一体どんな東宮だと想像できないでいたけれど、ストレスによるものなら仕方ないのかも知れない。辞めた女房達は、衛門に聞くところによると東宮が癩癩を起こして投げつける物が、運悪く頭に当たって、切れて出血したのをみて失神した事が原因のようだ。早い話が、ヒス慣れしていなかった。でも、普通の後宮勤めの女房の水準を上回る、しっかりした女房が梨壺にはそろっていることから、大丈夫だと思うので、当初の予定を変更して、初日で、朝春は後宮から去ることに決めた。

その後は、由羅尚侍（きらのないしのかみ）の弟、朝春として、時々、様子伺いに来れば良い。

なので、この一週間は、東宮に呼ばれたときは、由羅と一緒に梨壺に伺候して、それ以外は、梅壺でひっそりと、二人おとなしくしていた。

と、いうのは、東宮様が、言ったとおり、主上の女御達の（勝手な）嫉妬は、初日より続いたのだった。

由羅が、梅壺から、梨壺に渡ろうとすると、御簾の中から、それぞれの女御が実家から連れてきた女房連中が、にらみつけるような視線を送ってくる。三人の妃は、すべて都一の才媛、という触れ込みで入内してきたので、歌を詠んだり、箏や和琴をかき鳴らしているの、ここで演奏することは、彼らのあてつけになってしまふと思います、琵琶も箏も、由羅は演奏しないまま、静かにしていた。

ただし、東宮と一緒にいるときは、その練習に付き合っ、演奏していた。

「驚いたよ、綺羅。あんた、歌詠みも箏も上手やな。なんで、今まで、朝廷の噂にならへんかったんやろ。」

「そうですか？」

「うん、絶対に、梅壺にいるときは演奏せえへんほうがいいわ。それでなくても、まだ連中は、あんたの事疑ったまんまなんやから。」

「どうして、女御様は、そんなにぴりぴりしてらっしゃるの？三人とも望まれて入内されたんじゃないですか？」

「その度に、後宮がひつくりかえるから、主上の側近を引っ張って、わけをきいたんや。去年か一昨年か、東宮時代からの妃やった妃がなくなってしまったから、新しい妃を後宮に入れてくれと、周囲から懇願されてたらしいんやけど、その亡くなった妃との仲があんまり良くなかったもんやから、姫君に対する夢も希望も、男やのに、全く持ち合わせていなかったんやな。」

妃の喪も明けて、ふらりと、どこぞへか遊びに出かけたときに、山奥でとある姫君に出会ったと言う。

「山奥やったから、貴人の装いはしてなかった見たいやけど、屋敷も立派やったし、風に吹かれて薫る香も上品で、これは、都の高貴な妃が、ちよつと休養に来てると思ったらしい。でも、すぐに、家人の者が隠してしまって、顔も良く見れなかったし、そのまま名前を聞かずに都に帰ってきたって聞いて、わが兄上も阿呆ちゃうか、と思ったけど……。」

……君にはわからないでしょう、東宮。あの方こそ、私の理想の姫なのです。その方がかきならす箏の音のあまりの美しさに、私はしばらく心が止まってしまったのですよ。それから、もう動揺してしまって、夢現のまま、都に帰ってきてしまったのです。

と、帰京した後も、公務がおぼつかないほどの状態だったらしい。「夢物語の主人公になった気分にいるんやろ。主上の頭が、恋の病にやられたら、もう、大変なんや。平和ボケしてるけれども、小さい時から、結構、思いつめたら猪みたいにまっすぐ進んでしまうのや。それに、言うても都一の権力者。私の言いたいことは、わかるやろう、二人とも。」

つまりは、「教養がある」という、唯一かつあいまいな手がかりを握り締めて、主上は理想の姫探しに、都中の高貴な姫を荒らしまわったらしい。

「そして、三人とも外れだったということですか？」

「それだけやおへん。三人とも美人やし、才媛なのは事実やけど、一人は、何考えてるかかわからへん程もの静かで、もう一人は、矜持が高すぎて、帝もタジタジしてる。最後の一人は、嫉妬深くて怒りっぽくて、帝は後宮になかなかよりつかん。でも、それぞれの家の事情もあるから、女房連中は、互いに敵対心むき出しにしてるから、時々とばかりが来る私にも、安息の日々はないわ。」

……それもつまりは、東宮の鬱憤の原因らしい。同じ後宮に住むものとして、時々それぞれの女御のご機嫌伺いに行くそうなのだが、そのたびに帝やそのほかの女御へのあてつけや嫌味を聞かされるのだ。想像するだけでも、胃を病みそうだ。

「そうやから、今度、梨壺で管弦の宴を開くのや。」

「そんなの聞いてないわよ。」

由羅が、東宮様に向かつて言った。梨壺の数少ない女房は、由羅が伺候したときは、安心して、他の仕事をするべく、出て行くので、今は、朝春、由羅、東宮の三人しかない。

「もうすぐ、八月十五夜や、仲秋観月の宴やで。最近、いっそう箏やら琵琶やら和琴をかき鳴らしたり、歌詠みしたり女御がこれ見よがしにするから、最近の後宮は秋の虫の演奏会より賑やかになって、雅を通り越して耳障りなんや。ここらで、決着つけたらええやないか。」

「東宮様は、その宴で、女御様に演奏させるつもりなの？」

「そうや、その時は、由羅もついでに何か演奏したってな。」

東宮は、扇で顔を隠して、ニコニコと笑った。

その夜、朝春は自分の屋敷に帰るべく、こっそりと後宮を出た。

「おかえり、朝春君。もう、帰ってきたのかい？」

帰ってくると、千代羅が、寝転びながら、何かを読んでいた。

「いや、噂だと引きこもりで、超悲観主義者な姫なのかと思っただけだ、実際は、いろいろ鬱憤がたまってるだけだったし、結構、本当は明るい気性の方みたいだから、姉様なら大丈夫だと思っただけよ。」

千代羅は、朝春の屋敷に住み着いている九尾の狐なので、東宮のことを話しても、それを第三者に漏らす必要もないから、打ち明けた。

「へえ、変わった東宮だね。その宴には、朝春も招待されるのかな？」

「いやいやいや！招待してもらわないと困るよ！宴だよ？」

宴、つまり、公達が来る。姉は、男嫌い。

「何か起こってからじゃあ、遅いからね。東宮様は、今日の尼僧が朝春だってことは、知らないけど、朝春は、由羅姫の弟だから、多分、本当に姉様がその宴に呼ばれるなら、ついでに招待してもらえると思うけど。」

「招待されなくても、心配だから、由羅姫の傍についているつもりなんだね。」

「うん。姉様の結婚相手が見つければいいなと思って、出仕させただけど、まだ、全く男性恐怖症は治ってないから、いきなり公達がわらわら集まるところなんて無理だよ。」

まさか、出仕そうそう、そんな機会にあうとは思ってもよらなかった。

「そういえば、由羅姫は男嫌いなのに、その東宮様には過剰反応起こさなかったのかい？」

「仕事っていうのもあるけど、その東宮様って、男って言われてもすぐには信じられないほど完璧な姫だったんだよね。最近、いろいろ溜まっているみたいで、今日は結構お喋りだったけど、外見は、押したら倒れちゃうような華奢さだったし…。背は結構、高かったけど。」

まあ、実の妹が、男装してる事情もあるから、同情している部分もあるのかもしれないが。

「普通ならね、内侍の身分なら、実家から身の回りの世話をする女房がついてなきゃいけないんだ。でも、姉様は、今のところ一人でしょ？一人でも、身の回りの仕度をするのには不自由しない人だ

けれど、こういう公の場に出るときは、取次ぎの女房がいないと不便だから、十五夜の宴までに、なんとか人をそろえないと……。」「
そうなのだ。」

この時代、姫というのは、男に顔を見せることはおろか、直接声を聞かせることもない。身近な女房に取り次がせるのが、普通だ。つまり、宴の時に、御簾に引っ込んでゐる由羅に、公達が声をかけたとする。この時代の若いものは、思わせぶりの科白を言うことも、社交の一つ、とされている。（東宮様いわく、なよなよした連中。）浮気心を歌だとか、美しいものに包んでばらまくのだ。

その時、例えばだ。取り次いだ女房の言葉は、主人の言葉ということだが、その女房が裏切ったら？

ただでさえ、内侍という微妙な立場の綺羅姫を快く思わないものがあるのに、飛んで火に入るなんとやらだ。

はやいこと、信頼の置ける、姉様専用の世話役、兼、護衛役を準備せねばなるまい……。

でも、……雇うお金がない。

「その役、私がやってあげようか？」

「千代羅が？」

「古来から、狐は変化自在で器用な生き物と相場が決まっているのだよ。」

はっはっはっ、と得意げに高笑いをした。

確かに、性別年齢不詳の千代羅なら、女房に成りすますのも問題ない。現に、気分で女物の着物を着ている日もあるが、それらは違和感なく似合っている。

「私だったら、信頼が置けるだろう？」

「ああ、いい考えだよ！逆になんて思いつきもしなかったんだろう。お願いだよ、千代羅。」

「まかせたまえ。」

千代羅はふっ、と不適に笑った。あんまり似合っていなかった。

「女房勤めなら、死んだ母上の着物でも、十分間に合うと思うし、

君もちよつとは、当日まで後宮に慣れる必要があるだろう？」

「さつそく、明日から出仕かい？」

「そうしてくれると、助かる。でも、女房勤めに関する常識とか、君にあるの？」

千年生きた、と自己申告しているが、それゆえに、人間の社会生活不適応者な部分があるのだ。

「朝春が、出仕するようになってから、私がごろごろ屋敷で転がってるだけかと思っていたのかい？」

「うん、そう思っていた。」

千代羅は、がくつとうなだれた。

「だって、事実でしょ。」

「私は、羅泉先生に、いろんな物語や、漢詩の書物を借りて、俗世の勉強をしていたのだよ。」

と、先ほどまで読んでいた巻物を差し出した。

「源氏物語だよ、これ。」

「そうだとも。一番有名な教養本じゃあないか。」

まあ、そうだけど、これは物語だ。実用書ではない。

なんか心配になった。

「そういえば、由羅姫の従妹の右大臣家から、手紙が届いたよ。

姫を出仕させるために、親戚の右大臣が何も手伝わないうって、はたからみれば、ちよつと変じゃないかい？ありえないけど、もし仮に帝へ正式に入内することになつたら、右大臣家は、由羅姫の後見人になるじゃないか。」

「うん、でも、伯父様の長姫が、すでに女御様の一人として、後宮に入っているし、伯父様は姪っ子の男性恐怖症は、自分の息子にも半分、原因があるとおもっているからね。」

由羅は、父方の従妹の誰か（つまり、私の従妹にもなるわけだけど、私は知らない。）から、しつこく求婚を迫られた経験があり、母方の従妹、つまり右大臣家の屋敷には、朝春が流行り病にかかっていたときに、一時居候させてもらっていた時期があり、その次男

坊からいじめられていたらしい。

なので、右大臣自身は、由羅姫のことを大事に思っているし、姉様も伯父様のことは好きだ。でも、その次男は許せないらしい。

その次男は、家柄も容姿も申し分ない公達に成長したらしいが、軽薄で、誰でも有名な遊び人で、その人が、ある日、過去の出来事はどこへやら、姉様にもツバをつけようとした事件が発生したので、姉様は完全に嫌っているのだった。

その若者を、香梅の君という。

「その君から、由羅姫あてに、文が来たんだ。私はよく、羅泉先生のところ遊びに行くから、朝廷の噂なども耳にするけど、香梅の君って、梅の木をよく愛でている事で有名な人だろう？」

「そうだよ。私はまだ、姿も見たことがないけどね。」

噂だけは、風にのってやってくるのだ。

「でさ、彼って、遊び人で、たくさん愛人があるのに、誰とも結婚してないよね。だから、公達連中が話しているのを聞いたんだけど、本命の人がいるって噂だよ。梅を育てているのは、その姫が好きだからとも話していた。確かに、一番の花盛りで人気があるのに独身貴族って、堅物で通っている君の上司の兵部卿の宮と、家族が事故でなくなって、喪が明けたばかりの桜の中将をのぞけば、香梅の君くらいしかないよね。」

「遊び人だから、もうちょつと身を固めるのは後にしよう、って考えているんじゃないの？女性からの人気もなくなるし。それに、梅が好きな女性って、この都に一体、何人いると思ってるんだよ。」
確かに、由羅は梅が好きだ。香も梅花の合わせを使っているほど。でも、この時代、梅を嫌う貴族を見つけるのが難しいくらい、花といったら梅花なのだ。

「じゃあ、なんで、由羅姫が出仕した夜に、右大臣家の次男様から文が届くのさ。」

「え？右大臣さまからじゃなくて、香梅の君からなの？」

「そうだとも。」

あらためてよく見ると、花も葉もない枝は、梅の木だった。由羅にそのまま見せたところで、また読まずに火にくべられるに違いないと思ったので、心で百万回「ごめん！」と謝って、その文を開いた。

「月みれば ちぢにものこそ 悲しけれ……」

の香

」

雲がくれにし、花

月見れば、は古今集の有名な歌の一つだ。下の句が、「わが身一つの 秋にはあらねど」で、月を見れば、秋の寂しさが心にしみるようです、という意味で、秋になると感傷的になる気分を表した歌だ。それを無理やり引用してきて、「月が雲に隠れてしまったように、この枝の梅の香りも私から離れていつてしまったようだ。」と言っているのだ。花も葉もない枝を準備したのは、そういう理由らしい。

にしても、雲と花の香は、しっくり合わない組み合わせのような気がする。

捻りもないもない内容なので、この人は、あんまり文を書くのが上手ではないのか、それとも由羅姫が出仕したことで、古歌の引用に頼ってしまった程、動揺を隠せないでいることを表現したかったのかは、わからない。

「たしかに、内侍になっちゃったら、うかつに手は出せないってことだもんね。動揺してるのかな。」 「だと、私は、思うんだけどね。香梅の君も、十五夜の宴に呼ばれるのかな。」

千代羅は、さらりと爆弾を投下した。

朝春は、この文の内容を、姉に伝えるべきかどうか、頭を抱えて悩み始めたのだった。

風薫る季節 六

「見てみ、みんな綺羅綺羅しい程の公達ばかりやなあ。」

「なんぼ平和ぼけした世の中やいうても、立派やな。」

「やつぱり、当今とこぎんさんが麗しいと、周りの殿御も美しい人らが集まるんやなあ。」

梨壺の宴は、今をときめく若い公達ばかりが招待されていた。非公式ではあったけれど、東宮が主催されていて、もしかしたら帝も現れるのではないかと囁かれていた。それに、今日は、三人の女御が、皆の前で演奏するのだ。

所々に飾られた薄が、獣の子供の尻尾のように時々風にゆれた。他にも、桔梗などの秋の花も、彩りを添えている。

てらてらとした月は、雲に隠されることもなく、光が地上に降り注ぐ。その下で、人々は、酒を飲み、笛を吹き、賑やかだった。

御簾の奥では、十二単を着込んだ後宮の女房達が、その様子を見守っている。

朝春のような若手官吏は、ひっそりと末席に座って、しばらくはその様子を伺っているだけで良かった。御簾の奥のどの辺りに綺羅がいるのかわからないままだったので、確かめたいのだけれど、中でこちらをうかがっている女たちと視線が合って誤解されてもいやなのだ。

「初めて見る顔だな。」

隣に、落ち着いた風情のある公達が、隣に座る。朝春は、軽く会釈を返した。深みのある不思議な薫物の香りがする。どのような調合の仕方をしたのか検討もつかない。このような香りなら一度すれ違っただけでも覚えられそうだけれど、今日、初めて知った香りだ。どうして、お前みたいな若造が、この席に呼ばれているんだ、いう視線を感じるけど、気がつかないフリをした。

「もう、酔いが回ってきた頃だと思うけど、君は、そうでもない

ようだねえ。」

朝春の杯が、空なことに気がついて、酒をつごうとしてくれる。

「恥ずかしい事に下戸なので、私はそんなにたくさんも飲めないですよ。」

粗相がないように、受けて、一杯だけ飲み干す。

「そうか、思い出した。君は、兵部卿宮のところの新しい子だね。彼は、こういう場があまり好きではないから、君に押し付けてきたのかな。」

「まあ、そんなところです。」

そういえば、兵部卿の宮、今晚は来ていないみたいだ。この人の言う様に、騒ぐのはあまり好きな人じゃないから、こなかったんだろ。

「平和な世に、仕事があるわけでもなかるうに、あの方もまじめなお人だからね。」

遠まわしに、「堅物」呼ばわりしているように聞こえた。この人の言うとおり、兵部卿の職は、今の時代では、名誉職みたいなもので、主に、宮家出身の貴族の方が職につく場合が多かった。

でも、実際働いている身としては、そこまでヒマではない職場なんだけれどもな。

彼にちよつとした恨みでも、あるのか、その後も、ねちねちと小言を言った。めんどくさいので、聞いているフリをして流しておく。その時、優雅な笛の音がした。

「おや、桜木の笛が始まった。」

「あの有名な。本物を聞いたことがなかったのですよ。幸運です。私は、ちよつと近くに行つて聞いてみたいので、失礼します。」

立ち上がる機会だと思つて、この人から逃れる為に、外のほうへ出てみた。なるほど、これが有名な桜木の中將の笛の音らしい。他にも、彼に合わせて、何人かが、演奏し始めた。

ほとんどの公達が、笛につられて庭に出るとの入れ違いに、また再び部屋の隅に座つて、ほつと息をついた。

（朝春君。）

御簾の中から、聞きなれた声がした。

（なんで、この私が、他の人が飲むお酒を準備しなくちゃいけないのさ。）

（女房の仕事ってそういうもんでしょ。）

（私は、もう疲れたよ。今ね、丁度、主上もお見えになったんだ。東宮の横に座られるよ。）

中央の御簾の奥を見ると、東宮の横で女房たちがいそいそと準備をしていた。東宮と、今帝のいる場所には、両隣に仕切りがしてあって、東宮たちからは顔や様子がみえない状態ではあるが、それぞれの女御とおつきの女房たちも、宴会の様子を眺めているのである。笛の音に合わせて、誰かが、箏を演奏し始めた。それにつられて、ほかにも一斉に楽器の演奏を始める。女御だけではなく、お付の女達も演奏に参加しているようだった。

外にいた公達たちが、音楽に気がついて、中へ戻ってくる。笛の演奏者たちは、曲調を変えた。女たちの演奏の引き立て役にまわることにしたようだ。

（これじゃあ、誰が何を演奏しているかわからないかい？）

千代羅がそつとつぶやいた。確かに、東宮は、女御達に「決着をつけさせる」と言っではいたが、このような大演奏になってしまっっては、よほどの聞き手でないと、誰がどのように上手いのか、わからない気がした。

それでも、ときどき伴奏になっていた音が弱くなり、主旋律の音を実際立たせる演出をする時があった。事前に示し合わせたわけでもないだろうに、こういうことができるのは、上手い演奏家たちなんだろうと思う。

その時に、桜木の中将が奏でる事があつたけれども、当代一と言われているだけあって、彼が最高の演奏者だということはわかった。今度は、隣に違う人が座った。その時、季節はずれにも関わらず、梅花の薫物の香りがした。

「面白くなさそうですね。」

その人のさらに隣の人が、話すのが聞こえた。

「この時だけは、桜木があなたよりも注目を集めてしまいませんかね、香梅の君？」

心臓が、どきつと高鳴った。この人が、昨日の文の差出人だったのか。

そつと顔をみると、確かに女の人達が放っておかないような顔の作りだ。桜木の中将が、誠実さを感じさせる美しさを持っているとすれば、この人は、艶めく美しさを持っていた。杯を持つ指も細く、臥せた眼からは睫毛が長いことがわかる。しかし、不思議と弱弱しい感じはしなかった。

今は、すこし不機嫌なのか、眉を寄せている。

「芸達者な右大臣様の御子なのに、まさか笛が苦手だなんて、聞いたときには驚きましたよ。」

「弓も馬も、俺は上手いから、仕事上は心配ない。それに、このような場では、あいつに身代わりを頼めばいいことだ。」

そういつて、杯の酒を一口含んだ。

「だったら、どうして、桜木の中将が笛を吹き始めると、こつやつて酒を飲み始めるんです。しかも自分の酌で。」

「俺は、嫉妬しているわけではないぞ。」

「はいはい。」

その男は、香梅の君に、酒をついだ。

その杯に口づけようとして、彼の様子を見ていた朝春に気がついた。

「なんだ、お前。見たことないな。」

「え……、あ、あのう……。」

昨日、文を盗み見てしまった身としては、なんだか気まずくて、視線を泳がせてしまった。（ちなみに、千代羅に綺羅へその手紙を渡してもらったが、それがどうなったかはまだしらないでいた。）

「新人か。」

「ええ、まあ、はい。」

気が回らずにすみません、と、酒の瓶を持った。彼は、ついでもらった酒を一気に呑んで、自分の酌を受けてくれた。その後は、朝春に関心をなくしたらしく、檜扇をもて遊びながら、隣の男と談笑を始めた。隣の男は、どうやら香梅の君の、階級の違う同僚のようだった。

今度は、箏の主旋律に変わった。

「これは、誰の御手だろうな。」

「姉ではないな。」

「姉様が、女御のお一人だなんて、あなたの将来も約束されたようなもんですね。」

「それでも、なさそうだけだな。姉は、好きな人がいたらしく、当初は、頭にきていたらしい。」

「何をおっしゃる。この都で、主上に嫁ぐことを望まない姫なんておられないでしょうに。」

「総領姫だと言って、元からそうなるように育てられたものだから、わがままに育ったんだ。」

香梅の君の姉、つまり右大臣の長姫は、女御の中の一人らしい。それにしても、彼は、自分の姉のことをあんまり快くおもってないみたいだ。

その箏の音を引き立たせるように、箏の音が、響き始めた。

いつも聞きなれているからわかるけど、これは由羅の箏だ。あくまで、控えめに演奏しているけれども、冴えるような音色は、別格だった。

演奏会に我慢できずに加わってしまったのか、それとも、東宮が命令したのかは知らないけど、多分、中央で東宮様が、檜扇で口元を隠してはいるけど、によよしているのが見えたから、無理に引っ張りだしたらしい。

その時、隣の香梅の君が、持っていた檜扇をぼろっ、と落とした。「どうした、香梅？」

君は、硬直したままだった。

「香梅？」

「……いや、なんでもない。」

彼は、扇を手にとった。男は、首を傾げたが、空の杯を差し出して、今度は、香梅の君に酒を注がせた。

箏の音は、溶けていつて消えた。

「今の琵琶の音色は、すごかったね。誰のお付の女房だろうな。」

「ああ……そうだな。」

「つていつても、あなたには上手いも下手もわからんでしょう。」

「……………」

「すみません、言い過ぎました？」

「いや。」

「ちよつと、顔色悪くなってきましたよ。呑みすぎました。」

「そうかもな。」

ちよつと、夜風に当たってくる、といって、香梅の君は、席をたった。心配した男が、一緒についていく。

やがて、演奏は終わりを向かえ、音が鳴り止むと同時に、待ち構えていたように新しい酒や食べ物運びこまれた。それで、少し騒いだあとは、宴自体も終わりに近づいて、酔った公達で埋め尽くされていた。

部屋中が酒臭くなっていたので、酔った誰かに無理やり酒を飲まされる前に、庭に出た。頭上では、満月がずっと照り輝いていて、地上を月の光で満たしていたが、中の人は誰も気がついていないだろう。せつかくの十五夜なのに。

その時、庭の茂みが動いて、何かに手を取られてそのまま奥に引き寄せられた。

「やつぱり、あなただ。月に願ってみるものですね。」

何者かに抱きしめられて、耳元でささやかれた。ふっと、幻惑的な薫物の香りが鼻をかすめた。

全身の毛が、逆立った。口を抑えられていて、袖口も絡め取られ

ているので、叫ぶことも逃げることもできない。

（……………誰っ?!）

月は明るいのに、木が影になって光が届かないから顔が見えない。そのまま、景色が反転した。

茂みに押し倒されのだ。

（ちよつと、待って!）

なんで、口に布みたいなの押し込まれているんだ!

「華奢ですねえ。本当に男ですか、あなた。」

必死でもがこうとするが、腕をつかまれて押さえ込まれている。滑らかな声から、頑強な賊でもないだろうに、逃げる事ができない。

お、親指で、手首をなでるのやめてっ!

混乱と気持ち悪さで、頭がくらくらする。

そのまま、私の首に顔をうずめられた時、ああ、もうダメだと思った。

うにゃああん、という、低くて、不気味な猫の鳴き声でした。

「なにやら、今宵は、特に大きな猫がいるみたいです。」

落ちて着いていて、でも、闇夜にも響く玲瓏のような声がした。先ほどの猫が人間にでもなったような、低い声だった。

朝春からは、その人の顔半分だけが、光に照らされて見えた。眼には、鋭い光が宿っていた。その腕には、更に二つ光を放つものがあった、それは、やや大きめの黒猫だと気がついた。

「これは、とんだ邪魔が入った。」

朝春の手首はしっかり握ったままだったが、顔を上げて、その人に言い放った。

「黒八を探しに来てみれば……。忍ぶ逢瀬ではないみたいです。」

「君も無粋だね。」

男が、朝春を離して立ち上がった。

「ふうん、今日の宴に来た誰かの従者かな? 主人を迎えに来たの

かい。」

「そんなところです。」

「私も、見逃せ、などと野暮は言つまい。」

「しかし、あなた程の方が、小さな少年に対して、美しいやり方ではありませんね。」

「君の想像に任せるよ。」

ふつ、男は笑つて（姿は見えなかったが）振り返らず、その場を立ち去つた。

猫が、もういちど、怪しく啼いた。

「立てないのですか？」

猫を抱いた男が、しゃがんで覗き込んだ。先ほどの幻惑的な香りとは対称的に、さっぱりした爽やかな香りだった。荷葉の調合に、自分流に何かを配合しているみたい。

嗅覚は、そのように冴えているのに、体中は、起き上がったけども、足はしびれたように動かなくなっていた。黒猫が、男の腕から降りて、私の腕に体をこすり付けてきた。そのやわらかい感触が、自分を現実の世界に戻してくれたようで、徐々に恐怖で体が震えてきて、知らずに涙が頬を伝っていた。

「彼は、風流人でもあります。美しいものは、手に入れないと気がすまない性分と聞いてます。」

声に出して、何でもいいから叫びたかった。自分は、あの薫物の香りを知っているから。

何とかお礼を言いたいのだけれども、何も言えない。

「もう、そのお顔では宴には戻れないでしょう？私も初めてみるお顔ですが、どこの方ですか？そろそろ、あなたの車も迎えに来られているでしょう。呼んで来て差し上げます。他の方には、上手く伝えておきますので。」

と言つても、全く声にならずに、口からは、嗚咽しか漏れてこない。ああ、もうどうしよう。

「仕方ありませんね。」

男は、朝春の腕を掴んで立たせると、小さな子供を抱えるみたいに腕の中に包んだ。かなり、背が高い人のようで、朝春の顔は、その人の着物にすっぽりと埋もれてしまった。

先ほどより強く、爽やかな薫物の香りがした。春が終わって、夏の初めに吹くような風の香りに似ていた。

「弟や妹がたくさんいますね。時々、着物を提供するの、俺の仕事ですよ。」

泣き終えたら、あなたの従者を呼んできてあげます、と言ってくれた後に、私は声もあげずに、一気に泣き出してしまった。

風薫る季節 七

「へえ、災難だったね。」

と、言いながら、女房装束の姿で、笑い転げている千代羅を睨みつけた。

二人は、後宮の梅壺にいる。由羅は、梨壺に呼ばれていていない。「だって、姉様が心配だーって言って、私を女房にしたのに、自分の方が危険な目に合ってるし。」

何が、面白いのか理解できない。こちらは、死ぬほど怖かったのに。

絶対、冬になったら、九本ある尻尾のうち一本は、毛皮をはいで襟巻きにして売ってやる。

千代羅は、私以外の誰にも今は見られていないため、すっかり地に戻って、ごろごろしている。

「変わった人に、気に入られちゃったなら、他の人からも同じ様な目で見られることもあるんじゃないかい。一人で、あの広い屋敷に住んでて大丈夫なの？」

「うん、だから、戻ってきて。」

「は？」

「戻ってきてってば。猫でも化け狐でも、一人でいないよりマシだよ。」

「やだよ。」

「ごろごろ転がりながら、千代羅が言った。」

「ここだと、食べ物も酒も、豊富すぎてちよつとくらい持つてきても誰もばれないもん。」

「君、私に助けてもらった恩より、お酒の方が大切なわけ？」

「うん。……………いや、そんなこともないよ。」

殺気を察したのか、千代羅はあいまいに返事をした。

「本当の事を言つと、梨壺の女房さんたちは、由羅姫には結構優

しいから、私はいなくても大丈夫かもしれないよ。」

いまや、東宮の信頼を得た由羅は、同じく梨壺の女房たちにも同様の感情を抱かれています。それは、良いことだ。

「梨壺からも、何人か音楽を奏でたけど、東宮だけじゃなくて、他の女房からもせがまれて昨日は箏を持つ気になったみたいだよ。本人は、その気はなかったみたいけどね。」

「うん、私は、すぐに姉様の箏ってわかったよ。」

「昨日の宴の後でね、音楽を奏でた女達には、参加者から衣が贈られたんだ。由羅姫も、もらってると思うから、それを売れば、雨漏りの修理代にはなると思うよ。」

「そうなの。」

「帝は誰にも渡さなかったけど、残りの公達は、自分が上手だと思っただ方に渡していったんだ。結局、枚数的には、梨壺の場所が他より一枚多いだけで、残りは同点だったから、しばらくは後宮は静かになりそうだよな。」

「だから、仕切りがあつたのね。でも、あんなに同時にいろんな楽器を奏でたら、誰が何を演奏したなんてわかんないじゃないの。聞き手も酒に酔ってるし。」

「だから、いいんじゃないか。誰が責任を負うわけでも、名誉をたたえられるわけでもないだろう。そんな状態でも、衣の数は同点だった。つまり、あらそっても意味ない、ってことを東宮は伝えたかったんじゃないの?」

なるほど。東宮って、平和主義的解決法を考えられる頭の回る人らしい。

「でも、梨壺が結局、勝ったんでしょう?それって、梨壺の女の人たちが一番上手いってこと?」

「昨日は、言ってみれば団体戦だから、それでいうと梨壺の人たちが一番上手ってことになるだろうね。」

「東宮様の精鋭隊だもんね。」

「うん。でも、私が隣で聞いていた限り、衛門の箏と綺羅姫の箏

は、やっぱりすごかったかな。帝の隣に座っていた東宮も、主上もびっくりしておられた、って、終わった後に梨壺の女房達をほめていたし。」

衛門って、箏も上手だったのか。

「昨日の宴で、三人の女御様を見たけど、なんというか……すごかったよ。いろいろ。」

「夜輝らす姫君」と呼ばれている帝の妃は三人。承香殿、麗景殿、そして登華殿にそれぞれ住んでおられるので、そう呼ばれている。三人とも、とても美しい方なので、それぞれ異名を持っていた。

承香殿の方は、三人の中で一番気位が高い。入内前は、「？娥姫（こうがひめ）」と呼ばれていた。？娥姫とは、中国の物語に出てくる美しい月の姫の名前らしい。

麗景殿の方は、怒りっぽくて、「織姫天（しきてん）の君」と呼ばれていた。この方は、右大臣家の長姫だ。

登華殿の方は、おとなしいというか、何を考えているかわからない謎めいた人だ。占いなどが好きらしい。「十六夜（いざよい）の姫」と呼ばれていた。

「どうすごかったの？」

「織姫天の君がわがままし放題だから、？娥姫がそれとなく嫌味を投げつけて、バチバチ。それを、そしらぬ顔をしていた十六夜の姫のところまで、火の粉が飛んで、十六夜の姫がなんかよくわからない札とか呪文を唱えて二人を脅かす。乱闘にならなかったのは、東宮と梨壺の女房が割って入ったおかげだよ。」

東宮も、いろいろ大変だな。男の身で、女の熾烈な戦いの仲裁に入らないといけないなんて。

「世にも恐ろしい光景とはあのことだったね。今度、毒蛇同士が戦いをしているのをみたら、そつとしてあげようとおもったよ。」

この人は、毒蛇の喧嘩にもちよっかいを出す程、ヒマな人生を送ってきたんだろうか……。

「あともう少し、お客達の到着が遅れていたら、血みどろの戦い

が起こつて、女達が叫んでいただろうね。」

その時、「キヤー！」という悲鳴が、あがつた。

「うん、こんな風に。」

そして、バタバタと乱れた足音が近づいてきた。

「大変どすえ。由羅様が、失神されました。これから、梅壺まで運んでまいります。」

衛門さんが、によき、つと現れた。（そういえば、あわてていないときの足音を、今まで聞いたことがない。）

「由羅姉様が、倒れたつてどういふことですか。」

「あら、朝春様。由羅様が、梅壺に戻るまで待つていらしてくれたのでしたね。」

衛門は、私の方に余裕なく微笑むと、大変、大変といいながら、また大急ぎで戻つていった。

「なんだろうね？鳥毛虫でも、頭に落ちてきたのかな。」

「姉様は、そんなことで失神しないでしょ。」
慣れてるし。

「ちよつと眩暈が起きてふらついたのを、衛門たちが騒いでるだけなんじゃない。」

「彼女達、優秀だけど、ちよつと神経質なところあるよね。」

「昨日しか働いてないのに、よく見てるね、千代羅。」

ちよつと、見てこようか、と千代羅が立った。

とりあえず、言われたとおりに寝転がれるような準備をのろのろとやり始めた。

その時、また、乱れる足音がして、千代羅が飛び込んできた。

「たたたたたた、たっ！」

千代羅は、壊れた太鼓をたたいたときのような、奇妙な声をだした。

「大変だ！」

「何が？」

「由羅姫の入内が、今日、さつき、決まつたつて！」

朝春は、千代羅の眼をじっとみた。そして、一拍遅れて、叫んだ。
「そりゃ、大変だ！」

後ろから、由羅を担いだ梨壺の一団がやってきた。てきばきと、彼女を寝かしつける。

由羅は、目を瞑ったままおきる気配がない。何故か、額がうつすらと赤くなっている。

「そこは、たおられたひょうしに、巻物の角でぶつけなさったんだすえ。」

「そ、どういう事なの、衛門？ 姉様が入内って何かの冗談？」

朝春としては、衛門と会ったことがないのに、思わず名前を叫んでしまったが、混乱状態なので、彼女も気が付かなかった。（危なかった）

「私から事情を説明しよう。」

「東宮様！」

衛門が振り向くと、東宮様も、梅壺に来ていた。

彼は、朝春の眼をじっと見つめて、それから、「皆は、先に戻っていてよろしい」と女房達に言った。

彼女達が去ると、梅壺には、東宮様と私と千代羅、そして寝たまの姉様が残った。

「由羅の身内か。朝春殿と言ったか。」

「はい。」

「涼安と呼んだ方が良いかな。」

「……っ！」

「心配せんでもよろしい。誰にも話すつもりはない。昨日の宴でな、涼安に似た公達がいると、由羅に言うたら、素直に認めおった俺は、屋敷に引きこもって一日中、巻物や草紙なんぞの文字ばかり読んでいたから、主上よりも、世の中のことに詳しくなっただんや。霞夜叉のことも、一応知ってる。」

自分のことを、私から俺、と呼んでいることに気が付いた。それに、気が付いたのかわからないが、由羅に言われてな、自分の事を

しつてゐる者の前では、女装してても男になる努力をしてるんや、と付け加えた。

「すみません……。」

「謝る道理がありません。」

今回は、こちらが謝らないと駄目やしな……と、急に、顔を曇らせた。

「羅泉……陰陽寮の頭を通じて、帝の後宮に入る心配はないようにお願いしていました。」

「俺も、その話は知ってる。」

「それに、姉は男性恐怖症が、まだ全く直っていません！全く、男性に全く免疫がありません。出仕して、まだ3日目ですよ、今日は！なぜ、入内することになったのです？」

しかも、うちは貧乏だから、政治的、財政的貢献という、旨味もないぞ。

「だから、今から、理由を話す……。これは、朝春が、由羅にやったものだな？」

東宮は、扇を開いて見せた。

「それは、うちの別荘の、庭先にたまたま落ちてたものです。落とし主もわからないし、まだきれいだったので、姉にあげました。」

「これは、主上が、特注した扇の一つや。」

「と、特注の扇？」

「そうです。完成したとき、自慢げに見せてもらたから、よう覚えてる。二日前、俺が話した、主上の「運命の姫君」の話、覚えてはるか？」

朝春は、記憶を芋を掘るときみたいに、うんしょ、と引っ張りあげた。

「山奥やったから、貴人の装いはしてなかった見たいやけど、屋敷も立派やったし、風に吹かれて薫る香も上品で、これは、都の高貴な姫が、ちょっと休養に来てると思ったらしい。でも、すぐに、家人の者が隠してしまって、顔も良く見れなかったし、そのまま名

前を聞かずに都に帰ってきたって聞いて、わが兄上も阿呆ちゃうか、
と思ったけど……。」

確か、こんな事を言っていた。

「由羅姫は、変わった梅花の薫物してるやろ。あのときの香りと
同じだったと、兄が言った。それに、その家から聞こえた箏の音色
が、昨日の宴とまるきり同じやったと。」

「そういえば、その時、白い馬と黒い馬に乗った二人組を見まし
た。私は、てつきり賊だと……。」

つまり、なんだ？

あのときの二人は、主上と従者で、主上の「運命の姫」は、うち
の姉ということか。

「へえ、そんな、絵巻物みたいな、話の展開って本当にあるんだ
ね。」

最後のダメ押しをした千代羅を、すっかり、はたきそうになった。
物語は、物語だから良いのだ。現実には、なったら、ただのはた迷
惑だ。

「でも！主上のお願いでも、うちの姉は認めないと思います。」
すっかり、世を儚んで由羅が出家しちゃったらどうしてくれるん
だ。

「全力で阻止させていただきます。」

「無理。詮議で決まっちゃったから。俺もさつき、知った。」

気が付いてたら、俺の力で食い止めることもできたんやけど……
と、東宮がうなだれた。

「高官たちに、主上が無理やり認めさせはった。」

「でも！うちは、入内できるほどのお金の余裕はないですよ！」

「うん。それがな。主上が、右大臣の養女にしたらどうかと提案
した。彼女は、姪っ子やしな。」

「でも、右大臣には、織姫天の女御がいるはずでは？」

「皇子も皇女も生めへんのに、女御も何も無いやろう。」

父方には、身内が少ないので、家の莊園や財産は、いずれ再興で

きたときに返してもらおう約束で、右大臣家に管理していただいている。その代わり、そこで採れる農産物の全てに二人は手をつけていない。なので、右大臣家は、姉妹と一番縁の深い貴族ではある。

「そんな！姉が、仏門にでも入るって騒いだら、父様と母様に私は顔向けできませんっ！なんとかしてください東宮様っ！！」

「無理なものは、無理や。由羅っ、目を回してる場合やないでっ！」

起きなされっ、と、東宮は、由羅の額を扇で叩いた。
容赦ない扱いに、彼女が気がついた。

「な、何……？私、どうして？」

「寝てる場合やないで、由羅。このままやと、あんたは主上の妃やで。あの妃連中と、ドロドロの後宮生活が続くんや。」

由羅は、その言葉に、燃え尽きたように真っ白になった。

……ちなみに、この時代、妃になることは、女性にとって、最高の名誉であるはずである。

しかし、今や梅壺の四人にとっては、閻魔大魔王の降臨以上に、身の毛もよだつ事件である。

由羅は、立ち上がって、どこかに行こうとした。それを必死で押さえつける。

「姉様っ、はやまらないで！死んだり、出家しちゃ駄目だからねっ！」

「死ぬもんですかっ！今まで必死で貧乏に耐えてきて、三食とも白いご飯にありつけたのよっ！」

「出家も駄目！」

「仏門に入ったら、鮎の塩焼きが食べれないじゃないのっ。」
その一言を聞いて、がく、っと力が抜けた。

「じゃあ、どこ行くの？」

「約束を反故にした主上を殴りつけてやる！」

それは、きつと謀反になると思うので、駄目である。

「じゃあ、どうすればいいのよーうっ！」

とうとう、由羅が興奮と怒りのあまり、涙を浮かべた。

「身代わり、たてちゃえば良くない？」

今まで、静かだった千代羅がぼつり、と言った。

「それか、入内までに、帝が幻滅するように、由羅姫が嫌われてみるとか。」

正式に、入内するまでに、まだ日はあるんだろう、と東宮に向かって聞いた。

「俺の情報によると、陰陽師達に占わせたら、良い日がなかったらしく、来年明けるまで時間はある。」

「だったら、入内を承諾する代わりに、それまでに由羅姫には手を出せないように約束してもらえばいいじゃん。」

「一度、約束を破った人が、守るわけないでしょう！」

「じゃあ、羅泉先生に、その日までに手を出すと不幸が降りかかると伝えてもらう。」

なるほど、と姉妹は納得した。羅泉先生は、巷では陰陽寮の頭として、日々書物にのんびり、埋もれているが、陰陽師の人間の中では、有名人なのだ。（影の実力者らしい。）

「俺も、主上を見張っておこう。」

「東宮様が、私は目立つたら嫌だからって、言ったのに、無理に箏を演奏させたのが悪いのよ。」

「なっ？それは八つ当たりやで。朝春が扇を拾った扇を、堂々と使ってたあんたも悪い。」

「……やつぱり、そう？」

由羅は、「もう、落し物なんて拾わないっ！」っと、突っ伏した。

「朝春、右大臣家は、来年といえども入内の準備を進めるはずやおまえは、妃の弟として、右大臣家の庇護下におかれる。早ければ、今日にも家の使いが来るかもしれんから、忙しくなるやろ。由羅の事は、俺が面倒を見るから、安心してええ。」

そっというわけで、東宮のすすめもあって、千代羅を返してもらい、重い足取りで、後宮を後にした。

来年の春までに、入内を食い止められるよう、主上の気が変わる
といいのだが……………。

風薫る季節 八

その日は、一週間後にやってきた。

姉様の弟となる朝春が、こんな荒れ屋敷に住んでは、社会の恥、と右大臣家が屋敷の修復を申し出てくれた。そして、もれなく従者もつけます、と男や女の下働きをたくさん送ってくれたのだが、丁寧に断った。すると、

「一人暮らしは心配だ。世間体も悪い。優秀な者をつけるから、それだけは、お屋敷に入れてください。」

と、右大臣と羅泉先生の両方から、強制的に通達された。

「……それが、あなた？」

「はい。青蓮（しょうれん）と申します。」

まるで、どこかのお坊様みたいな名前の青年は、特徴的な声の持ち主だった。

「この間は、怪我はありませんでしたか？」

なんと、宴の夜に自分を助けてくれた人だったのだ。

明るいところであらためて見ると、すらりと背が高いが、動作は貴族的で優美というよりは、野生の獣のようにしなやかな感じだ。表情も、無意味な笑顔を浮かべず、無表情。縹色の水干姿が良く似合っていて、腕にはなぜか腕輪状の数珠をはめていた。そして、さるになぜか、まだ獲ったばかりの鹿を片手にぶらさげている。

「右大臣様より、今日から朝春様のお世話をするようにと言われました。羅泉様からの推薦も受けました。」

「どうして、先生が？」

「俺は、元々、官吏でして、羅泉様の下で働いていたのです。しかし、いくら勉強しても所詮は、中流貴族の出ですので、出世の野望なども持ちようがありません。その時、とある事件も起こりまして、なので、朝廷で働くよりは、貴人の補佐として、日陰の身として尽くそうと決心したのです。」

「右大臣の子息じゃなくて？」

「羅泉様から、右大臣家を紹介していただきました。右大臣様は、やり手のすごいお方ですが、すでに苦楽を共にしてきた従者が何人もおられます。残念ながら、その愚息共……失敬、息子方には、才気のかけらも感じませんが。」

……そんなことないと思うんだけどな。現に、御曹司たちは、高い位についていて、仕事の評判もそれなりに良い。

「なので、羅泉様の信頼ある朝春様なら、働くやりがいを見つけられるだろうと思ったのです。鹿肉も頂きましたし。」

「羅泉先生から、鹿？」

「好きなんです。鹿肉。」

まるで、それこそ、「この世の真理」、と言わんばかりに、さらに述べた。

ところで、向こうで転がってる方は、誰ですか、と視線を移した。几帳の隙間から、体の一部分が見えている。

「あれは、千代羅です。」

「お屋敷には、朝春様一人しか住まわれていないと右大臣様からお聞きしたのですが。」

しまった。千代羅を、狐の姿にしておくのを忘れた。

「それとも、あれが羅泉様から仰っていた、九尾の狐ですか？」

千代羅が、その言葉に反応して、こちらを振り向いた。のっそりと起き上がって、こちらへやってくる。

「そっか。君は、先生の下で働いていたって言うてたけど、書物がたくさんある方じゃないんだね。」

「俺は、陰陽師です。と、同時に……。」

青蓮が、自分の腕から、数珠の腕輪を取った。

すると、青年だった姿が、牛ほどもある、黒い狼の姿になった。眼光が鋭くて、口からのぞく大きな舌は、血にまみれているかのように、赤い。手だった部分は、四肢は太く、野山で熊に出会ったと

しても、相手のほうが飛んで逃げそうなくらい、鋭い爪が生えていた。

「妖怪か。」

また、数珠をはめなおすと、すぐに、人間の姿に戻った。

「正確には、妖怪に体に乗っ取られていまして。封じ込めているんです。もちろん、他言無用でお願いしますよ。いろいろめんどくさいので。」

……この人、変だ。

賢そうだし、仕事もできそうだけど、変だ。

「ふーん。まあ、いいんじゃない。私達が、賃金払うわけでもなさそうだし。」

良かないよ、千代羅。

「あと、羅泉様から、その狐を教育するようにも言い付かってますので。」

何が不満なのだ、羅泉先生。

確かに、酒をかつくらってばかりの駄目人間……いや、駄目キツネだけでも。

「なんで、羅泉先生が、君にそんなこと頼むのさ。」

「せっかく、この時代に降りてきたのだから、仕事をせよ、と羅泉先生は仰りました。俺は、不本意ですが、その補佐と言ったところですよ。むしろ、朝春様は、身の回りの事はすでによくお出来になる。入らぬ人を屋敷に呼んでも返って邪魔になると右大臣様に忠告したのは、俺です。必要なのは、身の警備くらいで十分でしょう。十五夜の夜のように、変な気を起こす人間が興味本位で近づかないように。」

と、言うわけで、この狐、しばらく拝借いたします、と千代羅の肩をぐい、と掴んだ。

「ちよつと、君、何をするのさ。」

「朝春様、俺達は羅泉先生の指示の元で、しばらく仕事をいたします。朝春様が、危険な目にあった時は、察知することができます」

ので、すぐ駆けつけますから、ご安心を。」

あと、由羅姫の身辺に十分、気をお配りください、と付け足した。
「由羅姫入内に伴って、不穏な動きがあります。俺の口からは言えないこともありますので、羅泉様のところをすぐにでも訪れてください。」

それでは、失礼、と、強引に千代羅を引っ張っていこうとした。

「あ、その前に。」

これで一緒に鹿鍋しましょう、言つのと同時に、千代羅を掴んでいた腕を離したので、千代羅は、顔面から畳の上に落ちた。

「君、いい根性してるね。後で覚えときなよ。」

「狐が狼に勝てると思ってるんですか？」

「ごわごわで、肌触りの悪い毛皮の持ち主に言われたくないね。」

「頭に行くはずの栄養を、余分に使ってるんでしょう。」

「美意識の欠けた鉄面皮に、私の風流心はできないさ。」

「千年も生きているのに、漢詩も読めない人に言われたくありません。」

「なんで、君がそんなことしてるのさ。」

「私も、よく羅泉様のところにご機嫌伺いに行くのですよ。」

朝春は、触れちゃいけない空気を感じて、そろそろと鹿を持って、台所にいこうとした。

「朝春様っ！」

びく、っと、肩が震えた。

「なんででしょう？」

「それは、新鮮なので、膾（なます）にしてもらっても大丈夫です。生刺も作ってください。」

はいはい……。

これじゃあ、どっちが主人なのか分からない。

慣れたもので、すばやくさばいて、秋の野菜や、採っておいたきのこなどを加えて、味噌で煮る。麦ご飯は、昼間は仕事の朝春に対して、昼間は屋敷でごろごろしている千代羅が炊いておいてくれた。

（しつけの効果だ。）

狼と狐は、また何か低次元の争いを繰り広げていたみたいだが、鍋が出来上がる美味しそうな香りが立つてくるにつれ、おとなしくなった。今は、二人で、庭先の野草や月をのんびり眺めている。

出来上がった、二つの鍋を囲んで、三人で食べ始めた。一つは、鹿肉がなくて、野菜ときのこだけの鍋だ。千代羅は、妖怪ではなく、自称・神獣なので、生臭物が食べれないのだ。

「美味しい。これは、青蓮が獲って来たの？」

「そうです。鹿肉は、別名、もみじとも言うんですよ。」

「もみじ？」

「奥山にもみじ踏み分け鳴く鹿の、聲きくときぞ秋は悲しき、つて歌を聞いたことがあるでしょう？」

「猿丸大夫の有名な歌だね。そこからきているの？」

「はい。」

好物を食べているので、機嫌が良いのか、屋敷に来て初めて青蓮の笑顔を見た。以外にも、結構普通に笑えるらしい。

千代羅は、白酒を呑みながら、ご飯と鍋を交互に食べている。

「青蓮も、酒は飲むのかい？」

「いえ、私は、飲みませんよ。」

その言葉に、千代羅は、ほっとしたようだった。

「無理に飲ませないくださいね。地獄をみますよ。」

「なんで、私が青蓮に酒を譲らなくちゃいけないのさ。自分で飲むよ。君は、肉を食べていればいい。」

よく、こんなもの食べれるよ、と千代羅が顔をしかめた。

「やっぱり、生で食べるのが一番ですね。」

青蓮が、生刺の皿に箸を伸ばすと、千代羅は後ろへ逃げた。

「野蛮！」

「失礼な。通の食べ方ですよ。」

この狼めえ……と、血のにおいが嫌いな千代羅は、青蓮が皿を空にするまで、もとの場所に戻れなかった。

「ところで、今日は、この屋敷に君は泊まるのかい？」

食べ終わった後、まだ酒をちびり、と呑んでいる千代羅が顔を上げた。

「本当は、すでに羅泉様のところに行くはずでしたが。」

「今から出かけても、先生に迷惑だろう。きつと夕餉を食べているよ。」

「なので、明日の朝から行きます。」

「右大臣の家には戻らなくていいのかい？」

「右大臣様の家の内部を仕切る仕事をしていた時期もありますが、現在は、息子様たちの世話役をしていましたので、俺は消えても代理がいるので問題ないのです。」

どうして、彼等は、俺を有効活用できないんでしょう……と、小さいが、低い声が聞こえた。

「私が連れて行かれる理由って、なんとなく検討がつくけどさ、それって、由羅姫にも関係してる？」

箸の動きを止めた。

「なんで、姉様が？」

「ですから、俺の口からは……あとから羅泉さんに確認してください。できれば良いことですが、簡単に説明すると、都内部の気の流れが、少し、狂い始めたのですよ。」

都は、悪鬼や物の怪が入らないように、守りがされている……らしい。それが、少し崩れかけているようだ。

「本当は、夜歩きをしないほうがいいのですけれども、禁止令を出したところで、人々の不安をあおるだけですからね。陰陽寮のかつての仲間達も、夜勤で警備に当たっているそうですよ。」

「それって、いつからなの？」

「結構、最近からですよ。羅泉様の予想では、都内で、強力な呪を使おうとするものが入るようです。誰かは、まだ分かりませんが、ただ、素人らしく、その呪が完成しないどころか、失敗し続けて奇妙な風にねじれるので、結界に傷をつけているのです。」

その傷が、割れ目となつて、そこから外の妖（あやかし）が入ってくるというわけか。

「その呪をたどると、いつも途中で追跡できなくなってしまうんです。呪を試みているのは、複数なのか、それとも、同一人物が、毎回別々の場所で行っているのかはわかりませんが。でも、そのゆがみが、由羅姫入内の報が巷間にあふれてから、さらに勢いを増しました。」

「じゃあ、その呪の矛先は……。」

「帝、東宮様、女御様、由羅姫の、誰かに向いていることは、間違いないでしょう。」

「だったら、後宮の警備を強化して、優秀な陰陽師をそろえればいいじゃないか。何で、私が働かなくちゃいけないんだ。私は、千代羅の傍で、ごろごろしている。」

「大丈夫です。羅泉様が、陰陽寮の臨時官吏として、あなたを扱ってくれますので、禄が支給されます。朝春様の手取りをぶんだくつて、白酒を買い込む必要はなくなるのですよ。ただ飯ならぬ、ただ酒をかつくらつて、朝春様の御身も守れない狐が、何を申しますか。」

「連れて行ってください。青蓮。」

「朝春君まで裏切るなんて……。」

そうか、無駄出費から開放されるのか。しかも、社会貢献にもなるなんて。千代羅が、何かに役に立つという使い方が、この世にあるとは思わなかった。

「と、いうわけで、この狐は羅泉様の指導のもと、俺が当分管理いたしますので、ご心配なさらずに。朝春様。」

そうして、翌朝、千代羅は青蓮に引っぱり張られるようにして、屋敷を出て行った。

風薫る季節 九

朝春が由羅姫入内のショックで、毎日頭を抱えていると、それ以上衝撃的な事件が都を震撼させた。

帝の三人妃の一人、承香殿の方の変死である。

彼女は、左大臣の姫君であつたので身分も申し分なかった。入内前は、月の姫を意味する「^{ムツギヒメ}娥姫」と呼ばれていたほどの美貌の持ち主であつた。

少し気位が高いところがあり、周囲からの反感を買いやすいところがあつたが、それは、他人から殺される理由にはならない。それ以前に、彼女の死が、他人によるものなのかどうかもはっきりしていなかった。

しかし、数日後、陰陽師達が調べると、彼女が住むところの床下から、呪札のようなものが見つかった事を、朝春は東宮から聞かされた。そして、その次の日、帝の住むところの真下からも同じものが見つかったそうである。

「やっぱり、私の姉のせいでもあるんですかね……。」

朝春は、頭を抱えてしゃがみたかった。三人の妃には子供がなく、それぞれが危うい均衡を保ち火花を散らしているのである。しかも、三人とも主上の寵愛を十分に受けているとは、必ずしもいえない状態なのだ。

その中に、由羅姫という新しい姫の入内話が出ると言うのは、劇薬を肌に塗るこめられることに等しい。彼女の背後を支える権力者達にも影響を与えるだろう。

「うーん……これは、主上への脅迫なんですかね。」

「安全じゃないことは確かだね。だから、私たちがこうやって、警護の役目をおおせつかったのだと思うのだけれど。」

「あるいは、本人の主上への嫉妬による自殺でしょうか？」

「あの気の強い承香殿の方なら、呪いなんてかけずに、自分で仕

掛けいきそうだけれどね。」

桜木の中将は、どうしてこいつがここにいるのだ、と言う風に朝春を見た。左近の中将である彼のような帝の覚えもめでたい若くて出世頭のエリート達によって、内裏の警備は強化された。その中で朝春は浮いた存在である。

もちろん、近くには、桜木の同期ともいえる紅梅の君も、警護に当たっていた。

「君のほうは、もっと大変だろう。」

「まあな。」

紅梅はいらいらした様子で、桜木の方を見もせずに答えた。

承香殿の方の変死により、疑われたのは、残り二人の妃とその縁者である。

その片方の姫の、麗景殿の方は右大臣家の出身であり、紅梅の一番上の姉であり、入内前は「織姫天の君しきてん」と呼ばれていた。承香殿の方が、冴えるような凜とした美しさだしたら、この方は、大輪の牡丹のように艶やかな美人だった。

「うちの姉は、わがままに育てられたでいか、ヒステリックなところがあるが、人を殺すような残虐なことは考えもしない人だ。」
眉一つ動かさず、冷静に分析するような口調で、紅梅の君が答えた。

「俺の姉と、父を疑うくらいなら、もう一人の妃の方が余程可能性としては高いだろう。登華殿の方は、占いや術が趣味だと聞いている。」

登華殿の方は、三人の中で実は一番年上だが、少し童顔で小柄な為、その事実を知る人は少ない。性格は、おとなしいというか、謎めいた雰囲気を持つ人で、「十六夜の姫いざよひ」と呼ばれていた。

彼女とその実家は、占いや術のマニアで、彼女も大量の札や、まじないの品を所有しており、いつも小声ではそぼそと何かの呪文を唱えていた。

「意外と、彼女は嫉妬深くて、主上への脅迫とライバルの消去を

同時にできるまじないでも見つけたんじゃないか。彼女は、一番最初に入内したこともあって承香殿の方から対抗心をもたれていたみたいだしな。」

でも、たんなるまじない好きが、人を殺める術に手を出すと言うのは危険だと、朝春は知っている。

（逆に、術を仕掛けたものが、のちにしつぺ返しをされてしまうこともあるですよ。だから、私のような、それを生業にし、訓練を積んだものでも、施術の時は常に警戒しています。）

と、陰陽師である羅泉先生も言っていた。

（もし、承香殿の方が、自殺や暗殺ではなく、呪いによるものなら……。）

その形跡が現れてくるはずだ。それを追えば、犯人にたどりつける可能性があるかもしれない。

丁度、下弦の月が雲に覆われて、光が降り注がなくなつた。風が止み、あたりから、白いもやのような冷気が立ちこみ始めた。

朝春は、強い眠気に襲われた。何とか気力を保とうと頭を横に振って、眠気を払おうとするが、ゆるい漣のように後から押し寄せてくる。気がつくと、桜木も、他の近衛兵たちも、気をうしなつたように座り込んで、眼を閉じている。

何かが、おかしい。

朝春は、携帯していた気つけ薬をむりやりのどに押し込んで、意識を覚醒させた。

すると、もやの中から、黒い人影が現れた。それは、走って後宮の方へ向かっていく。朝春が、追いかけて中へ入っていくと、中で警備に当たっている人間も、丁度、外に出てきただけの下働きの人間も、眠っている。

黒い影は、そのまま走って、麗景殿のほうへ吸い込まれるようにして入っていく。

「その者、止まりなさい！」

朝春は、忍ばせておいた小刀を、矢を飛ばすように、黒い影に向

かつて投げた。小刀は、影のちょうど背中中央を貫いた。
しかし、影が走り行くと、そこには地面に落ちた小刀がおいであ
った。

（すり抜けた……？）

朝春は、悪寒が全身を走るのを感じた。
嫌な予感を感じたまま、中をそつと入ると、そこでは人が眠って
いることが、夜目にもわかった。

「麗景殿様、夜分失礼いたします！麗景殿様！」
しかし、彼女は気がつく様子はない。

「もし、だれかおらぬか？明かりを！」

几帳の裏で、警備に当たっているはずの女房が居ないかと覗き込
んだが、ふつくした中年の女が、突然倒れたように横たわっている
だけだった。

後で怒られることを覚悟で、麗景殿の妃を抱き起こしてみた。

しかし、彼女は、眠っているのではなく、すでに事切れていたの
だった……。

「いやあっ！」

その時、遠くから、絶叫のようなものが聞こえた。
登華殿のほうだった。

他の女房達もすでに眠らされてしまっているのか、闇夜に響くの
は、朝春の足音だけだった。

「失礼いたします、大丈夫ですか？」

明かりもない部屋で、恐怖におののいているのは、登華殿の方だ
った。彼女は、朝春が駆けつけてくるなり、しがみついた。

「私、私……」

朝春は、彼女につかまれた左手首に不思議な感覚を覚えた。ねっ
とりとした粘膜のようなものが絡みついている、それに、生臭いよ
うな、奇妙なおいが鼻をつく。

「どうかされましたか？」

妃の悲鳴で、そばで他と同じように眠っていた女房が、ようやく

覚醒したらしい。その者が、急いで明かりをつけると、朝春は自分にしがみついている妃が、血でぐっしょり濡れていることに気がついた。その量と飛び散り具合と、彼女の状態から、彼女自身が重症を負わされたようでもない。

「何なのこれ…。」

登華殿の方は、明かりに照らされた、変わり果てた自分の様子に恐怖し、あ…と小さく悲鳴を上げてそのまま失神してしまった。

取り残された朝春は、明かりをつけた女房の気をも振動させるような絶叫に覚醒して、徐々に集まってきた女房達に囲まれた。その視線を浴びながら、自分自身も失神できればどんなにいいだろうと考えながら、全身の血が逆流していくかのような気分を感じていた。

風薫る季節 十

「だから、私は、殺していませんって！」

朝春は、朝から何度口にしたかしのれない同じ言葉を言った。

「でもなあ、疑うな、というほうが変だろうが。血まみれの登華殿の方とお前が抱き合っていて、片方の妃様は、亡くなられた。それに、お前が無実だっていう事を証明する人間もいない。」

「だから……！」

と、言いかけて、朝春は反論するのをやめた。自分以外の人間が、全員寝ていました、なんて滑稽な話だ。話したところで、ねちねちいびられるのがオチなのだ。

自分が、やってないことは確かだし、登華殿の方も犯人ではない。もし、麗景殿の方を殺害したのが、あの黒い影ならばだが。

「で、動機はなんだ？もう一人のお妃様も、お前がやったのか？」

「やってません！」

朝から、このようにいびられどうしなのである。

その時、正面から影が伸びた。長身のその男は、陰陽寮の長の羅泉である。

「そのものを、私が引き取っても良いでしょうかねえ。」

「は、誰から許可を得てきたのだ？」

羅泉は、男の鼻の切っ先に、一枚の紙切れを見せた。

「し、失礼いたしました。」

「ここは、もういいです。お下がりなさい。別の仕事が、たくさんあるのでしよう？」

羅泉は、朗らかに微笑み、男は一礼して退去した。

「もうすこし早くこれたら、彼のイビリから救ってあげれたのですけどね。」

朝春の両手首に結び付けられた縄を、あっという間に解いてしまった。

「いえ、拷問にかけられる前で良かったです。どう考えても、あの状況では、私自身が不利ですから。」

「君も災難が尽きませんねえ。」

「あの…、登華殿の方は無事なんでしょうか？」

「体調の面で言えば、無事です。軽い失神ですから。状況の面で言えば、あなたと似たような状況です。いえ、むしろ彼女のほうがひどいでしょう。彼女も、私が引き取りました。」

「そうですか。」

「あなたが、心配するということは、彼女も無実なのでしょう？世間からの誹謗中傷に耐え切れず自ら死ぬようなことになってはかわいそうですからね。私の式神に面倒を見てもらっています。私の屋敷なら、幾分かましでしょう。」

羅泉の屋敷で彼女の声を聞くと、その言葉通り予想よりもひどい状態ではなくて安堵した。通常、男が女性と対面することはいけないので、羅泉と共に几帳の外で会話に加わっている。思ったよりもひどい状態ではなさそうだった。

昨晩は暗くて全くわからなかったが、几帳の隙間から見える彼女は、二十七歳という年齢の割りには少女のような顔立ちで、でも雰囲気としては年齢相応の女らしさにもじみ出ていた。猫の目のように大きな美しい瞳は、知的な光を宿している。まつげがびっしりとそろって長かった。真珠のような肌に、癖のないつややかな黒髪は、まるで竹取物語に出てくるかぐや姫を、朝春に連想させた。

「昨晚の、今日ですみませんが、あなたにお話を聞きました。」

「

「朝春様ですね。昨日は、大変ご迷惑をおかけしました。」
声は、響くようなやや低い声だった。

「私は、あなたが犯人とは思っていません。なので、あなたの身に一体何が起こったのかを知りたいだけです。話してくださいますね。」

「ええ。もちろんです。といっても、私にも自分に何が起きたの

かわかっていませんが。」

「と、言っと？」

「急に、寝ていたら、目が覚めたんです、そしたら、両手がなにかひんやりとした不気味が感触があつて……。手のひらのおいをかいたら、暗闇でもすぐに異様な状態だと気がつきました。起き上がつて、そこで自分のからだも、胸から腹にかけてぐっしり濡れているってわかつたんです。もう一度臭つてみて、暗闇でもそれがなんだかわかってしまったので、叫んでしまったのです。」

……なるほど。

「もう一つ、あなたはまじないや術が好きだとお聞きしましたが……。」

「母が好きなので、実家から無理に送られてくるのよ。世間の人が私をどういう風に見てるか知っていますけど、私自身はそういうのはあまり好きではないの。だから、私が呪いをかけて殺したなんてことはないわ。誓つてもいい。」

それに……と、彼女は続けた。

「私、どうなるのかしら？無罪でも、後宮に戻るのかしら？実家に迷惑をかけずにすむなんて、ありえないわよね……。」

そういつて、目から、涙をばた、と落とした。

「私、本当は妃の位なんてどうでもいいのよ。主上は優しいし、小さい頃から仲がよかった縁で後宮に来たけど、恋愛とは違うわ。彼もきつとそう。私の実家の為に気を使ってくれたのよ。それに、私、どうして最近、主上が後宮にこられないのか、知っているもの。」

「それは、どういう意味ですか？」

「主上は、昨年から、病にかかっているの。床から起き上がれないほどにね。でも、それがばれたら、政局はせっかく安定しているのに、混乱するわよね？だから、代役を立てているの。」

衝撃的な真実だった。羅泉をみると、特に顔色を変えていなかった。彼は前から知っていたのかもしれない。

「父様が無き罪を受けたせいで、世間では、はかないものになっていた、とある親王様を、まだ元気だった頃の主上が見つけた。その方は、主上にそっくりだったから、時々、彼の代役を手伝っているのよ。他の二人は知らないわ。だから、主上が、あなたの姉上を入内させるというのは、私にとっては本当に奇妙な話なの。多分、何かあるのよ。」

「それは、もしかしたら……」

「それは、今日のような事件が起こる事を前々から予測していて、それをあぶりだす為に仕組んだことだとも考えられますね。」

羅泉が、失礼、といって几帳の奥に進んだ。登華殿の方は、驚くことなく、落ち着いた様子で羅泉と朝春の眼を見つめた。

「あなたが、そこまで話してくれるとは、予想外でした。私達を信頼していただいている、と考えてもよろしいでしょうか？」

「もちろんよ。昨日、私を助けてくれたのは、その朝春様ですもの。それに、二人も近い方が亡くなっているのよ？」

「では、私も、私の情報をお話しましょう。確かに、主上は誰かに暗殺されかけています。強力な呪いによるものです。おそらく、体調不良もその呪いによる影響でしょう。」

登華殿の方は、やはり、といったような表情をした。

「ただし、問題は術者のかけた呪いではなく、自然発生的なものだろう、ということですよ。」

「人為的なものではないのね？」

「その可能性もあります。しかし、その場合、かなり強力な力を持つものですよ。」

もし、人の手でかけられたものなら、跡がつくはずだ。それをたどれないということは、人ならざるものの可能性が高い。

「あなたのような陰陽師がそばに居るのに、今まで対処できなかったということは、相当やっかいなものですね。」

「そのとおりなんです。」

羅泉は、困ったように苦笑した。

「今、千代羅と青蓮に探索させています。結果を待ちましょう、朝春君。」

朝春は、あの仲の悪そうな二人がきちんと仕事をできるのかどうか、若干心配になった。

「羅泉先生、そういえば、三人の中でどうして登華殿の方様が最後に襲われて、そして無事だったのでしょうか？」

「理由がないなら、それですみそうですし、あるのなら犯人の手がかりに結びつきそうですね。」

羅泉は、深みのある笑みを見せただけだった。

「最後に、もう一つ聞きたいことがあるのでがよろしいでしょうか？」

「为什么呢？」

「もし、全ての問題が片付いたら、あなたは後宮に戻りたいですか？」

「戻りたくないわ。」

「主上の体調が元通りになっても？」

何もかも、見透かしたような、きらきら光る羅泉の瞳が彼女を捉えた。

「願いがかなうなら、残りの人生は自分の為に生きたいわ。」

実は、私には夢があるのよ、と彼女は微笑んだ。

それは、二人が始めてみる彼女の笑顔だった。

風薫る季節 十一

「登華殿の方と、他の二人の違い？」

「そうですよ。今までの私の話から考えて、あなたなら何だと考えますか？」

秋風が吹く中を、羅泉と朝春は歩いていった。朝春には、自分達が内裏に向かっているように思えた。

「他の二人の妃は、主上を想い続けて、嫉妬してるけど、登華殿の方は、自分をしっかり持っているようにみえたことでしょうか？」

「そうですよ。強い思慕は、報われなかった時、時々凶暴な感情になります。通常は、それらを人は自分の中に秘めているので表に出ることはありませんがねえ……。」

「表に出たら、そうなるのです？」

「この世には、見えないほうがよいものが二つあります。一つが女人。女人が人前に姿をさらさずに、衣、香りで存在をほめかし、歌でやり取りをするからこそ、平安の男は恋をするのです。」

「もう一つは？」

「人の心です。」

「心？」

朝春は、首をかしげた。

「奥ゆかしいものでは、なくなるでしょう。人の凶暴な感情が、表に出れば、それは<鬼>になります。」

「鬼？」

朝春は、眉をしかめた。

「ええ、妃の話を聞いて、どうして私が呪の原因を突き止められないかが、ようやくわかりましたよ。それは、私にはとうてい罰せられないものの中から出現していたのですからねえ。」

朝春は、明かりもない暗闇の中を羅泉の後について行くだけだったが、ここに着て、自分達がどこに向かっているのか、ようやく理解

することができた。

「突然ですが、失礼いたします。」

羅泉が、外から、中に向かって声をかけた。返事はない。

庭では、小さな紫の花をつけた紫苑が風に吹かれていた。御簾が上げられ、室には床に伏した人物がいた。御簾を上げた人物は、朝春と羅泉を中に入るように促した。

「よく着てくれたね、羅泉。」

朝春は、驚いた。床に伏せている人物は、やせて青白いが間違はなく主上だったからだ。自分のような人物が直接会えるような方ではない。

「これは、朝春といいます。ご存知でしょうか？由羅姫の弟君です。」

主上は、頭を少し朝春のほうへ向けて、微笑んだ。

「由羅姫に、よく似ているね。君には、今回の件で特にすまなく思っている。朝廷の者からのまなざしも変わってしまっただろう。」

「そんな……いえ、主上。」

「どうか、私の最後のわがまを許して欲しい。もう、私は長くはないだろうから。」

かすれた声で、主上は言った。

「せっかく、安定した政局を私は乱したくなかった。私には、まだ後継者がいなかったし、私が倒れたとなれば、誰が次の帝になるのかで世が混乱する。だから、私は影武者を立てることにした。」

主上の目線の方向には、先ほど御簾を上げた男が居た。気がつかなかったが、彼は、主上は病気でやせこけていなかったら、同一人物だろうと思われるくらいによく似ていたのである。

「私は、生まれは親王でしたが、数年前まで、世に忘れさられていたところを主上からお救いしていた。だいたいです。」

男は、玲瓏のごとき声で、そう言った。

朝春は、嫌な記憶が、濁流が押し寄せるように脳に流れ込むのを感じた。

「あなたは、この間私を襲おうとしたーーーー！！！！」

思わず、朝春は立ち上がって叫んだ。

彼は、梨壺の宴で朝春と一悶着あった、何某である。

それを踏まえて考えると、こちらの若者のほうが、顔はそっくりでもなんとなく妖艶というか、妖しい雰囲気がほとばしっている……気がする。

「おや、君は……？奇遇ですね。あなたの姉が主上の想い人だったとは。顔が似ていると好みの人物も似通うのでしょうか？」

「知りません！」

流し目（だと、朝春は思った。）を送られて、背中に悪寒が走るのを感じた。

「ちよつと、待ってください。姉君が、主上の想い人ってどういうことですか？」

朝春は、本能的に後ずさりしたが、また姿勢を正してまじめにたずねた。

「それは、私からお話しよう。」

主上がそういうと、若者は立ち上がって、箱から扇を取り出した。それを主上に渡す。主上は、男の力を借りて、上体をゆくりと起こした。

「この扇は、鴛鴦扇といえます。とある唐人の翁が京の都を大変気に入って、住むようになり、こうして扇を作っている物を、私の母が買ったのですよ。」

主上が、扇を広げると、雄のオシドリが飛翔している絵図が描かれていた。

「この扇によく似たものを、あなたの姉は、持っておられることでしょう。」

綺羅姫の持っている扇は、メスのオシドリが描かれている。二つの扇は、二組で一つの存在だったようだ。

「その時は、まだ今よりも少し調子がよかったので、無理を言って乗馬したのです。もう、馬に乗れる機会もきつとないだろうと

思ったのでね。野を越えて、緑の大気を吸えば、私の憂鬱も少しは晴れるかと思っただけで、どうにもならなかった。そんな時、林で冴えた箏の音を聞いた。」

その日は、暖かい日であつたけれど、その音色を聞いたとき、心の臓が急に冷たい真水に落とされたような衝撃を受けた。

「このような、音楽を聞けるのなら、もう少し頑張ってみるのも悪くはないと思えた。どんな人が弾いているのだろうと覗いてみると、まだ若い女人だったので私はとても驚いたよ。」

半分男のような格好をして、ただ純粹に箏をかき鳴らす姿は、自分の周りに住む女たちの、どれとも異なっていた。

彼は、ほとんど本能的にその娘を欲しいと思つた。自分の中に、そのような情熱的な感情があつたとは、彼自身が一番驚いたことである。しかし、その子がよもや貴族の娘とは思ひもしなかつたので、今生で出会える機会はないだろう、とも感じた。そこで、すばらしい箏を聴かせてくれた礼もかねて、自分の心の代わりに、鴛鴦扇の片割れを残して去つたのである。

「では、姉を東宮様の下に出仕させられたのも、その為ですか？」

「いや、それは実は偶然なんだ。鴛鴦扇の力だろうか？だから、私は私たちの縁がきつと深いものだろうことを信じてみることにしたのだよ。」

帝にとっては、最期の願いに等しいものかも知れないが、それは結局、政局を揺るがすことにもなりかねない。しかも、想う人を手に入れられたとしても、自分の命はそれほど残つてはいないだろう。命あつてのなんとやらである。

自分を取り巻く人間たちが、自分の欲望の為に好き勝手騒ぎ立てることさえも、彼には羨ましいことであつたにちがいない。

「主上、失礼ながらあなたが意識している以上に、あなたの中には大きな嫉妬心が生まれていましたようです。」

羅泉が静かに告げた。

「それが、鬼となつて妃を食い殺したと？」

「ええ。しかし、鬼を具現化して他人を殺めるのは大変難しいことなのです。一番最初の事件のあった日、妃と主上の住む床下から呪の札が出てきたことを報告させていただいたことを覚えていらっしやいますか？」

「ああ。」

「どこかに、主上の心から<鬼>を引き出し、操っている者がいます。」

羅泉は静かにそう告げた。

「操っている者？」

朝春が顔をしかめた。

「ええ、でも、千代羅と青蓮が始末をつけたようなので、大丈夫ですよ。もう心配ありません。」

羅泉は、穏やかに微笑んだ。

——後日。

秋が過ぎ、冬が来た。

平和を取り戻した都では、綺羅姫入内の話題で持ちきりである。不思議な事に、主上も病状が回復し、起きている時間もずっと増えた。

「寒いですね。今晚は初雪が降るんじゃないでしょうか？」

夕餉の仕度のために、かまどの火の状態に気を配りながら、青蓮が聞いた。

「どうだろうね。」

朝春は、昼間に野山で摘んできた野草を刻んで鍋に入れていく。千代羅は、めんどくさそうに三人分の食器を並べている。手伝わないと、青蓮にぶつくさ言われるからである。

この二人（二匹？）は、昼間は羅泉の下で、なにやら仕事を請け負っているみたいだが、夕方になるとこうして、朝春の屋敷に帰ってくるのである。

「それにしても、由羅姫が承諾するなんて、今考えてもすごいよね。」

千代羅が、何回口にしたかわからない科白を繰り返す。
そうなのだ。

由羅姫は、今回の事件のあらましを知って、なぜか入内を承諾したのである。

しかし、事は結婚である。しかし彼女は平然と、こういつてのけた。

「あら、そうだったの？あの扇の持ち主だったのね。どのみち、誰かと結婚しなくちゃいけないなら、

私を好きでいてくれる方のほうがいいに決まっているわ。」

それに、主上の方にも朝春から姉が病的な男嫌いを告白したところ、

「表向きは、入内とはいっても、ただ彼女と会う機会を公式に得られれば私は、良かったのですよ。」

それに、私は病に伏している身なのだから。」

と、それほど気にしていない様だったのだ。

つまり、入内とは言っても、二人とも赤の他人から友達に昇格するくらいにしか考えていない。

なんとも奇妙な結末である。

「それに、十六夜の姫は、後宮を結局去っちゃったんだろう？」

「今は、屋敷に戻っているって。でも誰もお咎めなしだそうよ。」

十六夜の姫は、後宮を退出した。

表向きは、あのような事件が身近に起こったので、気を病んでしまったことになっているが、退出した後主上が、謝罪の意味もこめて彼女の実家を丁重に扱ったので、世間の評判は落ちるところかあがったのであった。彼女自身は、自宅で「やりたかったこと」を実行中らしく、時々、ご機嫌伺いの手紙が朝春の元にも届く。

全ての心配ごとはおさまり、通常の日常に戻り始めた。 【終】

風薫る季節 星月夜

「やっと、気がついたか。」

由羅は、失神からようやく意識を取り戻した。十二単の姫君姿の東宮が、ぼんやりと視界に入る。

「わたし……？」

急に記憶がよみがえり、飛び起きる。庭ではすでに日は落ちていて、星は煌き、草は風にゆれていて、その影から、鈴虫やこおろぎが鳴いている。

「ちよつと、東宮様、入内なんて話が違うじゃないのよ。どういうこと！」

「東宮様じゃない、蘇芳すおうと呼べと言ったやろつ。」

彼は、親しい間柄の人に、その別名で呼ばせていた。

「なんもできずにすまんかったなあ。」

それにしても、根っからの男嫌いやったんや、と思い知らされた。「そんな調子で一生をほんまに終えるつもりなんか？」

好きでもない男に無理やり嫁がされでもしないと、なおらないのではなからうか。

「私のこれは、溺れかけたせいで水が嫌いになったりとか、子供の頃かまれたせいで犬が嫌いになったりするのと似てるだけよ。好きだといって追い回したり、手紙を送りつけるいこと、因縁つけてねちねちいじめたいとこのせいで、がっかりとか幻滅してしまったのよ。今まで読んだ、物語やおとぎ草紙にでてくる男性とは全く違うんだもの。」

「世の男が、全部、由羅のいとこのようなものではないやろつ？」

「犬にかまれた人は、どんなに他の犬がかわゆくて、危険じゃない仔犬ってわかってても、嫌いだったりするものよ。それと似てるの。だから、もし、恐怖を超えるほどの何かのきっかけがあれば、仔犬を飼おうとする気持ちも起こるはずよ。」

「きつかけで変われば、いつかは結婚するっていうことか？」

「そうよ。せっかくこの世に生まれたのだから、命を紡いでから死にたいもの。しってるかしら？ 蟬や蜉蝣なんかは、何年も土や水の中ですごすの。そして、成虫になったら、必死で恋をして死んでいくのよ。すごく短い命しか残されていないから。それに比べたら私はまだ時が待っていてくれるの。きっとなんとかなるわ。」

「それを聞いて安心したわ。」

「どうして？」

「なんでやろう。従者になったら家族やいつも言うてるからかなあ。由羅はもう、きつと俺の妹みたいなもんなんや。」

「あら、嬉しいわ。蘇芳もいつか、誰かと結婚する時は、私も心配したり喜んだりしてあげる。国を治めるものだったら、自分の仕事を引き継いでくれる者がいないと駄目だから、命を繋いでゆくことは、自分だけの為じゃなくなるわね。私にとつての結婚よりも、責任重大事項よ。」

「俺の場合は、男に戻る方が先だけだな。」

「その時は、かわいい姫と結婚できるといいわね。」

蘇芳は、微笑んだが複雑な気分だ。後宮に入ってくる姫など、その時の状況でだいたい決まってくる。そういう姫は、子供の時から親にそうなるように教育されて育つので、美人だろうが、好きになれるかどうかはわからない。

「今日は、朝春が来てくれるはずだったのに、帰っちゃったのね。かなり驚いてたでしょ？」

「当たり前や。」

「朝春が、仕事を見つけて来てくれたの。二人で暮すには貧乏だけど、十分なのに、このまま屋敷で暮らしていたら、ずっと結婚の機会がないどころか、男性恐怖症もなおらないだろうと心配してくれたのね。」

「姉思いのいい弟……妹やないか。」

「そうよ。あの子は、自分のことは全くかまわずに、いつも他人

のことを気にするの。白い布が、染料を染み込ませるみたいだね、他人のことを考えるために、心をいつも真っ白のままにしてあるのよ。」

まるで、どんな花も傷つけることなく、優しく寄り添う霞草のよう。

由羅は、冬の朝に御簾をあげたら、一面に積もっていた雪を思い出す。表にでて、その上を踏んでしまったら、再び雪が降るまで跡はのこる。凍える夜に、しんと降り積もらないと、翌朝までに元通りにはならない。

霞夜叉を続ければ、続けていく程、いろんな境遇を経験することになる。それでも、できる限り、朝春の心が傷つけられ、痕を残されていかないようにと切に願っている。

「私より、大変なのは本当はあの子の方。いくら霞夜叉だからだつて、どうして『屋敷の中でいる時まで』朝春でいる必要があるの？」

それは、朝春自身も意識していないこと。でも、本能でそうしなければいけないと気がついてたこと。

「呪によつて、霞夜叉は、＜想う人を守つて死ぬ＞そして＜決して結ばれない＞んやつたな。」

霞夜叉が死ねば、新しく花の刻印を受けるものが、次の霞夜叉になる。

しかし、自分が天寿を全うすれば、呪は断ち切られる。

でも、朝春は、先代の霞夜叉がそれを達成しようとして、結局、成し遂げられなかった事をまだしらない。

由羅は、朝春が、愛した人の「贄」となつて死ぬ事と、誰もをに平等に愛して、そして傷ついていく朝春も、どちらも可哀想だった。誰かが、朝春の「想い人」になつたら、その身代わりになつて死ぬ。

「でも、沙羅のままでは、霞草や雪のようにはなれないし、完全に朝春になつても駄目だから、あやうい均衡を保とうとずっとあの

子はがんばっているの。自分でも気がついていないと思うけどね。」

「朝春が、壊れてしまわないように、守ったりや。由羅の存在も、朝春にとっては大切やと思うで。」

「当たり前じゃないの。私たち姉妹は、生まれたときから喧嘩なんてしたことないほどのよ。珍しいでしょ。」

彼女が、流行病にかかった時、右大臣の屋敷に連れられていく時に持っていたのは、箏と沙羅の若木だったことを思い出す。

妹と同じ名前で、夏に清楚で白い花卉をつける木は、まるで妹そのもののようだった。

だから、その鉢を壊されたときは、怒るとか憎いとかいうよりも、とても恐ろしかったのだ。まるで、妹は助からないと告げられたようだった。

その衝撃で熱を出している間も、神様が見捨てないでくださるよにと願った。妹が完治したと聞いたときは、本当に体の芯から安心した。

だから、あの鉢を壊された日の感覚を、由羅は今でも思い出すことができる。その要因を作り出したとこの存在も、憎らしいなどの負の感情よりも、おぞまい事件を起こしたきっかけの象徴となつてしまっているのだ。

「昨日も、その人から下手クソな意味のよくわかんない手紙を貰ったけど、何様のつもりかしら。あの男、ちよつとはまともに成長したと思ったら、都中の美姫に手を出す節操なしだと聞いたわよ。」

「……由羅のいとこの一人って、香梅の君の事やつたんか？確かに、あの若者は、仕事はできるけど、結婚もせんとふらふらしてるみたいやな。良い所のぼんぼんやのに。」

「あいつ、しれつとして、時々私にまでちよつかいをかけてくるのよ。子供の頃は、私を嫌っていたくせに、なびかない女はプライドが許せないのよ。だから、私が折れるまでしつこくし続けるつもりだわ。」

そういつて、昨日、千代羅から受け取った文を蘇芳に見せた。

「たしかにひどい文やな。右大臣は、芸事にすぐれた家系やのにうまいこと血を受け継がなかったんやろか。」

「子供次第に、ヒマがあつたら悪がき連中とつるんでいたから、上達する為の時間を全部つかつたんじゃないのかしら。」

箏に関しては天才の域である彼女を、子供時代の香梅の君は眼の敵にしたやろうな、と思った。

だったら、どうして苦手な文を、わざわざ自分で書いて由羅に寄越したのか。彼なら、優秀な代筆を雇つて歌を書かせたり、高価な贈り物で誘つたり、強行突破で夜這いをしかけたりと、恋の手順はいくらでも実地で経験済のはずである。

もしかしたら、香梅の君がまだ妻を娶らないのは、本命がいるからで、それは自分の目の前にいるこの姫だからじゃないのか……？

（あほらし。あの君が、そんな清い恋きよをするタマかいな。）

「入内には、早くても年明けやから、時間は十分あるけど、どないするのや。向こうは、あんたに惚れてるみたいやけど、由羅はうちの主上を知らんのやろ？」

「顔を見たこともないわよ。あんまり急な事件だから、正直あんまり深く考えられないわ。」

「せやろな……。」

「まだ、男性が傍を通るだけで、体中に悪寒が走るし。主上のほうに、私に絶えられるのかしら？」

確かに、嫌いと面と向かつて言われるよりも傷つく反応だろう。

男として。

その前に、本当は男なのに、由羅が拒絶反応を自分に示さないのは謎だ。

「だって、蘇芳は外見も動作も完全に姫だもの。でも、根っこは姫ではないけれど、その部分は、私が今まで読んだ物語の主人公に近いわ。それに賢いから、バカな事もしそうにないし。」

褒められているのはわかるが、なんだか複雑な気分である。

「今まで心配して傍にいてくれてありがとう。もう大丈夫だから、

蘇芳も室に戻って休んでね。」

そういわれたので、静かに戻る。頭の中では自分で思っているほど、男君としての存在が、姫として教育されてきた影響を受けすぎているのかもしれない、と心配になった。

ふと顔を上げると、星は雲に覆われずに、ずっと煌き続けている。虫の音も止まないが、風は優しく吹いていたのにほとんど止んでいた。

監獄蝶（前書き）

監獄蝶を書いた後に、尊敬する夢枕獏さまが、同じ元ネタ（虫愛する姫君）で「陰陽師」で書いておられてびっくりした作者です。しかも、何だか監獄蝶と過程とラストも似ています。書いたのと読んだ順が逆ですが、お許しいただける方のみ、おすすめ下さい。

監獄蝶

——人は、まことあり、本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ

手入れの行き届いた屋敷が並ぶ通り一角に、その若君はひっそりと住んでいた。

若君は、その翁が去るから預かった子供で、翁にの実子とその妻もその屋敷にいた。翁が死ぬと、夫妻は若者をその屋敷で一番古くて陰湿な部屋に押し込めた。

翁が残した着物や調度品、従者も、奪い取られてしまった。好きだった笛の演奏も、漢詩を読んで勉強することもできない。外へのつながりもないから、誰かに歌を詠んだり、文を書いたりすることもない。

唯一奪い取られなかったのは、翁に引き取られた頃から傍にいた幽月（ゆげつ）という名をもつ者だけだった。彼の顔の左側には、醜い火傷の痕があった。それを隠すように髪を結わず、前髪を伸ばしており、後ろ髪もまるで童がやるように、肩の上で切りそろえた風貌を、気味が悪いと感じたのだ。

夫婦は、若君を屋敷の庭の手入れをする下男としてこき使っている。時代遅れの柄に、あせた色の着物も、仕事をしているうちに、どんどん汚くなっていくので、幽月は耐えられなかった。

「口惜しいです。」

と言っても、

「仕方ないだろう。」

と笑って、仕事を続けるので、その屋敷の庭は、いつも綺麗に整

えられていた。若者の室の外は、荒れた土があるばかりで野草すら生えていなかったが、自分で若木や花を植えて自分の庭に仕上げていた。

しかし、どんなに若君がすさんだ生活をしていても、汚い衣をまとつていても、彼自身は花が匂うように美しかったので、時々、夫婦の息子たちや、家の者たちが彼を自分の者にしようと室に忍び込んだり、襲い掛かったりする。幽月は、常に気を配っていないといけない。

そのうち、若君は、何故だが、庭で時々見つかる虫やなどに興味がわいて、それを籠にいれて飼いはじめた。

春は、螭螂、夏は蚩に蝉、秋は鈴虫に飛蝗、冬は冬眠している蛇まで、幽月を使って無理に獲ってこさせる。

拳句の果てに、蜜蜂を飼おうと試みたこともあったが、大変なことになったので、幽月がそれだけはやめさせた。

特に、鳥毛虫が大のお気に入りだった。自分は、夫妻は若君の存在を、世間に怪しまれたくなかったので、外に出ることを禁じたので、様々な種類の虫を採集するのは幽月の仕事だった。

そして、採ってきてもらったそれらを手にとって、眺めて楽しんでいる。

そのおかげで、彼を狙っていたものたちも、気味が悪くて、誰も室には入ることはない。

「君は、一体何を考えているんでしょうねえ。」

今日も、そのうちの一匹を手にはわせながら、しげしげと眺めている。

「俺は、あなたが何を考えているんでしょうね、ですよ。飽きもせず、毎日鳥毛虫と戯れて、どうするんです？」

幽月は、命令されるがまま採ってはくるが、本心は勘弁して欲しい、と思いつけている。

「いいじゃないですか、幽月くん。綺麗なものだけが、すべてじゃないませんかよ。」

「そうはいつでも、やっぱり見た目や印象と言つのは大事だと思います。俺は、口惜しいんですよ。この屋敷のボンクラ息子たちなんかより、若君の方が朝廷に出仕することができれば、出世できるに違いないんですから！」

「このまま、鳥毛虫を眺めている方が、僕は楽しいですけどねえ。」

「

そういつて、指で鳥毛虫の背を笑みをなでてている。その様子を、幽月は、恐ろしそうに視ている。

その視線に気がついて、

「きみも、こういう風に可愛がってもらいたいのですか？」

と、とんちんかんな事を言ってくる。どうして、俺が鳥毛虫に嫉妬せねばならんのだ。

「そういう科白は、女の子に言つてあげてくださいね。」

女たらしよりも、よつぽど始末が悪い。

「虫ではなくて、籠に入れられているのはあなたの方なんですよ。本当ならば、今頃は立派な直衣姿で、花木の下で優雅に笛を演奏されているはずです。そして、綺麗な姫と恋愛したりしているかもしれない身の上なんです。本当は。」

なのに、彼の取り巻く世界には、そんなものは存在していなくて、しかも本人は奇妙な趣味に一日中没頭している。どうしたもんか。

「どこがお好きなんです？」

鳥毛虫の。

「それぞれ大きさも色も異なるでしょう？　どういう風な蛹になって、蝶々になるのか、その過程が気になります。時々、想像もしてなかったような模様と色の組み合わせの蝶々になることもあるので、楽しいですよ。」

そして、籠の中から、蛹をとりだして、

「幽月君が着ている着物も、蚕という虫の繭から作られて、絹になつていますよ。彼らは、成虫になったら、十日程しか生きられません。口を持たずに生まれてくるので、食べ物も食べられません。」

それが、幼虫のうちは、しやりしやり葉を食んでいるかと思うと、愛しく思えるでしょう。」

「でしょう、と言われてもですね……。最近では、すっかりあなたは周りの人から変人扱いされていますよ。」

「言わせておけばいいじゃありませんか。それより、今日は、そんな虫を採ってきてくれたんですか？」

幽月は、ため息をついて、鳥毛虫ばかり数匹の入った籠を差し出した。若君は、嬉しそうに観察し始める。

「この子と、この子は、もう同じ様な子をすでに飼ってるけれど、この子は初めてみる模様をしているね。」

手の甲に、鈍色の毛が生えいて、毒々しい黒と黄色の斑点を持った、珍しい一匹を興味深そうに眺めている。

「桜の下にいた人の型に肩ちてきたようで、その人が振り払って落としたやつを、拾ってきたんです。」

「こんな変わった鳥毛虫は見たことないよ。お手柄だね。名前は何にしようか。」

その毛虫は、鈍丸（にびまる）と名づけられて、若君の元で、育てられた。

最初は、小指程の大きさしかなかったが、籠の中に葉をめいいっぱい入れておいても、翌朝にはすっかり食べつくしてしまう。葉だけではなく、花弁も好きなようで、ために桜の葉だけではなく花も入れてみると、それも翌朝には、すっかりなくなっていく。

「きみは、花も好きみたいですね。」

面白くなって、自分が育ててきた庭からとってきて、鈍丸に食べさせてやる。葦草や桃、鈍丸は、全部はやつただけ全部食んでしまう。

小指ほどの大きさだったのが、日かたつにつれ親指よりも太くなり、さらに大きくなっていく。

様々な色の花弁を体内に取り入れているはずなのに、体はずっと鈍色のままというのが、なんだが不思議だった。

鈍丸が、芋くらいに大きくなったとき、さすがの幽月も恐ろしくなった。

手にはのせられない大きさになったので、若君は猫の仔でも可愛がるかのように、膝の上に乗せてなせている。

「そうして、鳥毛虫が、そんなに大きくなるんです。おかしいでしょう？」

「このこは、春に咲く種類の花を一通り、食べたんですよ。野生にいたらできない贅沢でしょう。大きく育ってくれたんだから、いいじゃないですか。」

そういつて、全く手放すそぶりはなかった。

しかし、十四日目が過ぎた頃、事件が起こる。

幽月は、虫好きというわけではなかったたので、虫を採ってくることはできても、世話の手伝いはしなかった。けれども、蛙や蛇ならまだ大丈夫だったたので、無理やり世話の手伝いをさせられていた。

今日の世話をしなくてはならないと、近づく、その中の一つが壊れて中にいたはずの蛇がいなくなっている。

もう一度中をのぞくと、小さな黒くて丸いような塊があった。それは、蛇の頭部だった。

狐でも入り込んだのか、と庭に出てみると、木の根元と草の間に、血が転々と落ちている。

その陰に、蛇を食べている鈍丸がいた。

さらに、最悪だったのは、その瞬間を、翁の息子に見られていたことである。彼は、若君に詰め寄った。

「その毛の塊が鳥毛虫だと？まるで太った猫のようではないか。ただの虫が蛇を食うものか。とっとと捨てて来い。」

「どうして、鈍丸が蛇を食べる事がいけないんですか？私もあなたも、鮎や鹿肉をたべたりするでしょう。」

「従わないなら、私がこの化け物をころしてやろう。」

そういつて、持っていた扇で、猫を払うように、鈍丸の体をはたいた。

「何をするんです。例え今は虫でも、生まれ変わったら、あなたの恋人や親になるかもしれないですよ。絶対に、私は鈍丸が孵るまで放しませんから。」

息子は、この風変わりな若君をすぐにでも屋敷から追い出したい仕方がなかったが、父親が死ぬ間際にそれだけは許さないときつく約束され、約束を反故にしたら呪ってやるとまで言われたからだ。それに子供の頃、家の者達が陰で、自分と美しい養子を比べて噂していたのを知らなかったわけではない。

その若君を、今はこうして下働きに使ってやるのは、気分が良かった。それに、彼が虫を収集し始めてから、すっかり家の者からも疎まれていたのだ。若君に視線をやっていた若い女房達も、今では話のタネにもしない。

「お前は、一体どんな蝶々になるのでしょうか、鈍丸？」

そうして、さらにすくすく育っていく奇妙な虫に、早咲きの藤の花を与えてながら、体をなでてやっている。

鈍丸は、この世のものではないに違いない。

さすがの幽月も、どうにかしなければと思った。

次の満月の夜、二人は庭でそれを眺めていた。

藤の花弁が、夜風に吹かれて舞い落ちる。

その時、堀をあっさり越えて、目前に何者かが降り立った。

狩衣に烏帽子姿だが、背中に弓、腰には太刀を携えている。

月光がその者の顔の部分を照らすと、それは人間ではなく白い鬼だった。

鬼の面をかぶっている。

「こんばんは。幽月さんが、相談しに行った者の代わりに、私が参りました。」

それほど背も高くなく、声も低くない。ちょうど少年と青年の狭間にいるようだ。

「私は、このように面をつけていますが、あなた達に害を及ぼす

ものではないので、安心してください。」

「これは、月見をしていたら、珍しいお客様が来られましたね。幽月のお知り合いですか？」

ちらりと横目で彼をみると、気まずそうに眼を伏せている。

「あなたが飼っている奇妙な虫の件で、私の知り合いの陰陽師に幽月さんから相談があつたので、様子を伺いにきたのです。見せてはいただけませんか？」

若君が、微笑を浮かべて扇でさした方向をみると、藤木の一本にしがみつくように、大きな蛹が眠っていた。大きさは、もうすでに牛ほどもある。きつと口から吐き出したのであろう白い糸は、月光に照らされて、淡い黄色になっている。まるで光っているかのようだ。

「幽月さんの心配されたとおり、これには呪が封じられています。これが発動すれば、朝廷のくある方へに矛先がいくようにしてあるようですね。」

「そんなものが、どうして私の鳥毛虫なんかについているんですか？」

「あなたは、先々帝の最後の御子様ですね？」

若君は、驚いた風でもなく、優しい笑顔を浮かべたままだつたが、幽月の方は、顔から血の気が引いていくような気がしていた。そうなのだ。

自分が、仕えている人は、先々帝の最後の御子。つまりは、親王様。

しかし、母親側の実家はたいした権力ももっていなかったため、他の女御を娘に持つ貴族に讒言され、失脚したのであった。母は、信頼のおける貴族に自分を託して逝った。それが、この屋敷の前の主人の翁だ。

「親王でありながら、出仕はおろか、この屋敷でこき使われていることを、誰かが気付いていたのでしょう。そして、その人は、朝廷のくある方へをどうにかできないかと邪念を抱いていた。あなた

なら、＜ある方＞に恨みを抱いているに違いないと思い、それを利用しようとしたのです。」

この虫は、主人の恨みを吸って、人を殺める呪いの蝶々となる。音楽をたしなんだり、勉強をすることはおろか、他人と交友を深めたり、外へ出かけることもできない。自由を奪われた中で、親王である自分ができることが、虫を集めることだけだった。

もしかしたら、自分は虫達を通して、自分を囲っている屋敷の外の世界を愛してみたいと感じていたのかもしれない。

それが叶わないことが、哀しいこと？
うらめしいこと？

判断できるのは、他の誰でもなく、自分だけのはず。

「あなたは、私の鈍丸を殺すおつもりですか？」

「この呪いは、成虫になったとき、発動しますから。」

「だったら、代わりに僕を殺してしまえばいいじゃないですか。鈍丸は、葉や花と一緒に、僕の心を食んでいたということでしょう？ 瞬る前に僕が死ねば、呪いは完成されずにおしまいになるのではないですか？」

「確かにそうですが……。」

「僕は、屠殺されるべき生き物のように、鈍丸を育ててきたのではないんです。ただ、この子がどんな蝶々になるのかを見たかっただけなんですよ。」

「しかし、若君！」

「きみは黙っていなさい、幽月。」

思わず声をあげた幽月だが、彼に制されてしまった。

「私は、あなたを殺したくありませんが、このまま違う方が、呪いで殺められてしまうのも、見過ごすわけにはいきません。」

そうして、弓を張って、矢を蛹の方向に定めてかまえる。

「やめてください。」

若君は、その者に覆いかぶさって、それを妨害した。

押し倒されたはずみで、面が取れてしまい、中からまるで少女の

ような姿が月光に照らされた。

艶やかで大きな揚羽蝶ではなく、小さな小灰蝶（シジミチョウ）を捕まえたときのようなだ。

「体をどけてください。」

「どけません。」

両手を地面についた間に、少年の顔が入っている。額や首に、舞い散っている藤の花弁が落ちる。

「若君、蛹が！」

幽月が、蛹に駆け寄ると、小さな裂け目ができていた。

その裂け目が、黄色くて淡い光を放ちながら、大きくなっていく。奥から、何かがゆっくりと頭をもたげた。

人の顔だ。

青い眼をしていて、肌はほとんど白に近いような色。

髪は、銀色の絹のように長くて細い。

その後から、ゆっくりと羽がらしきものができて、完全に蛹からでたところで、夜気を含ませながら、ゆっくりと開いた。

瑠璃色をしていて、銀の線が入っており、金色の斑点もわずかにあった。

数回、羽ばたかせると、きらきらと鱗粉が、青く煌いた。

羽は、月光を受けて、本物の瑠璃のように輝く。

幻想的な光景だった。

「これは……。」

若君は、立ち上がって、蝶々の方に近づいた。

幽月も、これほど美しい光景を生まれて初めて見たと感じた。

女とも男ともつかない中性的な顔をした顔が、三人の方を見る。

「今晚は、こちらにお邪魔しなくても良かったようですね。」

起き上がって、着物についた土を払っている。

蝶々は、ふわりと飛翔して、藤木の上に一度止まってから、再び舞い上がる。

「おさがわせしました。私は帰ります。」

ぺこりと頭を下げってから、ひょいと塀の上に上る。

若君は、微笑んだ。

「……また、あなたとは、お会いしたいものですね。」

蝶々は、光を受けて、青白く光って煌きながら、舞っていた。

後曰。

「親王様、帝の命によりお迎えにあがりました。」

屋敷に、大層な使者が現れ、夫妻は心臓を疲れたように驚いた。

母方の祖父の罪は、讒言であつたことが証明された。

残された血縁である、今上帝に引き取られ、若者は屋敷を後にしたのだった。

櫻木の……

あいつは、やはり「——」になった。

本当は、「——」には「美しい」という言葉を当てていたが、自分の知る「美しい」と今のあいつは違うのだ。

二十年以上も生きてきて、今のあいつを形容できるびつたりの言葉が、頭に浮かばないのが悔しいが、無理なのだ。

「——」になるのあいつは、堅物で誠実な人間だった。おそらく、今も九割九分を占めているのはそれなのだ。

それを形容するなら、「爽やか」とか「清らか」みたいな類が当てはまるのだろう。ちょうど、五月晴れの空や、その下で青々と茂る木々の間を抜けて響る風のような存在である。

しかし、あいつを占めるほんのわずかな部分が、「——」を含み始めた。

あいつの大部分が、おれと同じか煮ていたならば、残りの「——」は、「妖艶」という、先ほどの「美しい」と言う言葉に、魔性を含ませた意味合いになれたかもしれない。

花見の宴で、酒の席に飽きたのか、桜木の下でたたずんで、空を見ていた。朧月の光が妖しくあいつを照らすようになったのは、まさにその「——」が、あいつの一部を食ったからなのだ。

おまえのせいで、その傍にある美しくも妖しい桜木が、いつもとは、違ったものに見えるようだ、と言ってやった。

そしたら、おれが、これまでどういう風に、この桜を見ていたんだと聞きやがる。

そして、これを本当に美しいと思うのは、この木の下には、罪が埋まっているからだと言ったのだ。

なんで、そう思うんだと聞いてやると、そうとしか思えないだろう、と口の端をゆがめたのをおれは見逃さなかった。

おまえが、そんな風に笑うところを、見たことがあっただろうか。そもそも、おまえみたいなのやつが、「罪」が、本当にどんなものなんだかを知っているとはおもえない。

この木の根が貪欲に、緋色の鮮血と黒ずんだ肉の混じったものを取り込んでいると言うのか。

その結果、薄紅の花弁となつて、月光と一緒にお前の頭上に降り注いでいるのだとしたら、それはまさしく奇跡じゃあないか。

根っこのほうで、死してなお、穏やかな吸血鬼にやわやわと殺されていくような思いを、「罪」はしなくちゃいけないだろう。

それとも、ただ土の中で、眠るよりは、残忍に見える行いにも身をゆだねたほうが浮かばれるのだろうか。

どちらにしろ、おれには想像することも難しいようなことだ。

おまえは、やっぱり「――」になつてしまった。

おまえは……？

桜木は、吉野から逃げるように都に着いた時、急に何かに取り付かれたかのようにがたがた震え出した。

そして、一度来た道を、誰にも気が疲れぬよう、もう一度、馬で戻つたのである。

別邸は、すでに、燃え尽きており、あたりは焼け焦げたにおいと煙が充満していたが、彼は、自分の逃げ失せた自室は、昨晚の風の流れの影響で、火の手が鈍いことを知っていた。

だから、兄の死体が、そのままきれいに残っていたとしても、驚きはしなかった。

彼の頭に手を伸ばし、烏帽子を取つて、髪を解いた。

もし、自分の双子の姉が生きていれば、このような姫になつてい

たかもしれない、と、ふと思った。

彼が死んだのは、事故である。

彼を殺したのは、自分である。

桜狩りを断らなかつたら、一緒に屋敷を離れていたはずだったのだから。運命が、同じように屋敷を焼いたとしても、彼は、死ななかつたはずだ。

そこで、掛け間違えた？

どこで？

桜狩りを、断らなかつたら。

桜の木が好きだつたら。

兄が好きだつたら。

病気にならなかつたら。

双子でなかつたら。

自分が生まれていなければ。

彼は？

桜木の下に、兄の骸を置いた。

——だから、桜は変わってしまったんだ。

秋風にたなびく尾花

その日の朝春は、夜明け前に起床して大忙しだった。

「何事なんだ、朝春。」

千代羅が、めんどくさそうに起きて来た。一日の九割をめんどくさそうに過す男だ。大して影響なからう。

「今日は、待ちに待った観月の宴なんだよ。これは、兵部省に飾るの。」

「ふうん。団子を飾るなんて、聞いた事ないけど？」

「嫦娥奔月じやうがほんげつっていう、唐の国の神話を知ってる？昔、嫦娥っていう美しい妻が、不老不死の薬を飲んだ為に、夫と別れて、月でさみしく暮らす事になったっていうお話だよ。」

「で、その伝説と、この大量のお団子は、何か関係があるのかい？」

「その後、その夫が、妻が好きな食べ物を月からみえるように並べたんだって。今日、兵部省で、それを真似しようという事になって、内緒で、高遠さまの好きな団子を用意しようという話になったんだ。」

先日、私の働く、国の軍事ごとを取り仕切る兵部省では、高遠さまという官吏が長官である兵部卿という位に昇進したのだった。正式な祝宴は、もう少し日がたってから行われる予定であり、今日の月見は、私が（一介の下っ端として）主催するのささやかな祝いだ。

「同年代の公達みたいに派手な遊びや、恋愛はしないのに、こういう準備をすることは結構好きだな。」

「君、私が、女子だったこと、すっかり忘れてるだろう。」

私は本当は女子だが、男として暮らしていた。呪縛に近いもので、普通に気をつけていれなければならぬだろうが、やはり気の緩む場所に長居するのは危険だと思う。

「だから、団子を朝から大量生産しているわけか。」

「そういうことですよ。つまみ食いしたら、毛皮を尻尾の先からはいでいくからね。」

「痛っ！想像するだけで、あいたたた。」

震え上がっている。千代羅の正体は、ちよっと化け物じみた獣なのだ。

「ヒマなら茹でるの手伝ってよ。」

「なんなのだ？このシンシンに沸いた地獄の釜みたいな鍋は？」

「だから、団子を今から茹でるって言うてるでしょう？はいはい、とつとと茹でる、茹でる。」

丸め終わった団子を、無理やり渡す。

「今日は、羅泉のところで、まったりしようと思っていたのに。」

「今日は、じゃなくて、いつも陰陽寮でごろごろしてるじゃない。そんな事いうなら、青蓮せいれんと一緒に、秋の草花を採りにいってもらうよ？」

「なんで、草花？」

「団子だけ、どん、と飾ったところで、美しくないですよ。さあ、嫌なら取りに行く！」

「イヤだ！めんどくさい。あの生臭大好き黒狼、見かけないと思つたら、そういう理由だったのか。」

体力労働より、服の袖を料理をしやすいように私に縛られ、ついでに長い髪の毛が落ちてこないように頭巾をつけさせられた千代羅が、あきらめて、団子が鍋のそこにくつつかないようにかき混ぜる仕事に従事した。

「秋の花のついでに、鹿とか捕獲しそудでヤダなー。」

妖怪ではなく、吉兆の瑞獣である千代羅は、肉や魚類が食べられない。しかし、青連は、今が盛り（？）の妖怪である依然に、鹿肉が大好きだ。

前に、どうして、そんなに好物なの？って聞いたら、

「そこに鹿がいるから、俺は食すのです。」

とか、わけ分からない事を、大真面目な顔で述べた。

「もう、それそろそろいいみたい。次の団子をゆでるから、それ鍋から出して。」

「あいあいー。」

「形が崩れないようにしてよね？それ、高遠さまが食べるんだよ？」

「んげっ！」

実は、陰陽寮に近いところに、ひょうりょう兵庫寮という、兵部省所管の兵庫がある。

「前に、まるで、鷹が獣をにらむかのように、恐ろしい眼光を持った男が、こちらのほうを見たことある。羅泉にあれば誰だ、聞いたら、そのような名前のやつだった！」

「なんか、気に障ることもやったわけ？」

いつでも、目つきのするどい人ではあるけど。

「羅泉に気がつくと、彼に、陰陽寮は暇そうだな、とかネチネチと嫌味を言つて去つていったぞ」

「まあ、兵部省は、平和な世の中になったとはいえ、激務な部署だから。」

「あやつも食べるのか？この団子を……！」

「だから、今日は、兵部省でお月見する為に準備してるって言うたじゃん！」

「私は、手伝わーん！」

「こらー！逃げるな！」

千代羅は、途中ですべてを投げ出して、縁側から、庭に出て、どこかへいってしまった。

全く、役に立たない瑞獣だ。

その日の仕事が終わった晩、他の同僚が用意してきた酒杯に、酒

が注がれた。

注がれた酒に、満月が、映る。それを飲む。

高遠さまが、私の横に座った。

「なあ、朝春、どうして、薄なんか飾ったんだ？」

…ぎくり。

「狐の尻尾のようで、愉快に見えませんか？」

まさか、青蓮の美的感覚がずれていたばかりに、普通の草花を用意できなかったとは、恥ずかしくていえない。

「まあ、瓶に入れてみる薄も、悪くはない。」

高遠さまは、酒に映った月を眺めながら、それを一気に飲み干した。

——数百年後、人々は、当たり前のように、月見の晩に団子と薄を飾るようになったというが、誰が、どのような理由で始めたのかは、誰に聞いてもわからなかったという。

鹿の恩返し

すこし時は戻って、綺羅姫入内前のおはなし

私は、高級な和紙の表面を、墨で黒く塗りつぶしてやった。頭の中で、「良心」が、もったいない、やめてーと叫んでいるが、気にするものか。そのまま、くしゃくしゃに丸めてやる。

私の名前は、朝春。兵部省に仕える新米官僚である。でも、誰にも内緒だが、実は、女子^{おなこ}だ。母方の家系が、天皇に仕える影の隠密一族<霞>の後継者だった為に、それを引き継ぐことになった。変わっていることは、汚い仕事を請け負っているにもかかわらず、<不殺>を信念としていることだ。血にまみれた過去とは違い、平安の世では、言ってみればなんでも屋みたいな立場になってきているし、私自身もたいして大きな働きもせずのんびりと過ごしている。

この時代は、良家の姫は、屋敷からでる機会があまりないから、むしろ男として生きるほうが、好奇心旺盛な私には、向いているんじゃないかとも思っている。私の家は、両親がすでに亡くなっていて、異母姉姫がいるのだけれど、すごく貧しいので、家人などを雇う余裕がないので、姉姫が掃除やらなんやらをこなしてくれているけど、この時代にそんなことをやっている姫というのは、多分、都で私の姉上だけだろう。

私の姉様、ちなみに名前は、由羅姫というのだけれど、いい加減、結婚してもらわないと、心配だ。年齢は、二十をとくに過ぎているので、はつきり言っていきおけている。原因は、家が貧乏だからというのもあるだろうけど、当の本人が、大の男嫌いだと言うのも関係しているけどね。

でも、結婚はさておき、このまま家に埋もれていくのは、心配なのと、宮仕えだけでもすすめたら、乗り気みたいなので、良かった。貧乏でなかったら、家格から言っても、宮仕えどころか、帝の後宮に入れてもらっても遜色はない姉上だけれど、まず男嫌いなところ

から直していかないといけないし、そもそも今上帝には「夜輝らす姫君」と呼ばれているほど美しい姫がたくさんおられるので、いまさら、という感じた。しかし、後宮に暮す、その中のどれかの姫に仕えるというのは、姉様の身分では逆に高すぎるのが今の悩みだ。

なので、結局、今のところ、姉様の出仕大作戦は、難航している。外見は美しいけれども、貧乏生活が長いせいか、たくましい性格だから、女ばかりの後宮ではなく、宮中務めもできると思う。ただ、宮中だと、男の人もいるから、どうなのかな、と言う感じた。ああ、悩む。

とりあえず、良い仕事先がありそうかどうか、いろんな人に聞いてみよう。もし、見つかったら、そのときは周りの身支度にお金がかかるだろうから、親戚に少し頼ってもいいか聞いてみよう。うん、そうしよう。

「どうした、朝春。なんか、手元がすごいことになってるぞ。」

気がつくと、書き損じた紙以外も、黒く塗りつぶしていた。

「うわ、私、一体やってたんだろう。」

「墨をひっくり返さないでいるのは、まだ幸いだったな。以後、気をつけたまえ。」

そうだ、これの紹介、まだだった……。

彼の名前は、千代羅。一応、兵部省で働く私の同期の一人ということになっている。表上は。

本当は、天狐。つまり、九尾の狐だが、妖怪ではなく、吉兆の神獣だそう。ちょっと切れ目で、ちょっと生意気そうな少年の姿をしているが、全くもって人間ではない。なので、食事はとらなくても死なないし、生臭ものは食べれない。でも、白酒は好きで、私の屋敷には、気がつくと、酒の瓶が転がっている。

「なんで、君、神様っぽいものなのに、朝廷で働いているの？」

「この時代では、白酒を買う為には、お金が必要だろう。働かざるもの飲むべからず、だろ。」

そうか、酒の為なのか……？

ちなみに、この狐殿は、私の屋敷で居候している。

「何を書いているんだ？」

「日記だよ。」

「何の為に？」

「あとで読みかえす為にね。」

「読み返してどうするんだよ。」

「過去を思い出すんだよ。あー、こんな事もあったなーってね。」
「ふうん。」

千代羅は、細い指で杯を取った。

「興味ないや。」

「どうして？」

「良いことも悪い事も、過ぎたことは戻せないし。」

「そりゃ、まあ、そうだけど。」

「過去を振り返れば、後悔が生まれるだろう？私は、後悔に取り付かれた人間をたくさん知っているけど、その中でも心に残っている人について話してあげよう。」

とある国に、商人の夫婦がいた。

夫は、京へ商いに出かける為、何月も家に帰らないことがあった。妻は、まだ生まれて一年にも満たない息子を抱えて、待った。しかし、一年たつてもとうとう、夫は帰ってこなかった。

—— 自分は捨てられたのではないだろうか。

妻の疑心は、徐々に膨らんでいく。

ある日、耐え難くなった妻は、山に捨ててしまった。妻は、手放してしまった後で、取り返しのつかないことをした、と気がついた。しかし、戻っても、赤子の姿は無かった。

何日語った後、例の夫は、ようやく家に戻れることになった。

そして、帰り道として、家の近くの野山を歩いていると、白い布に包まれた赤子がいた。

しばらくすると、一匹の狼が赤子を狙ってやってきた。しかし、その時、鹿の群れがやってきて、狼を追い払った。そし

て、その中でもひとときわ角の大きい鹿が、赤子の元に戻ってきて、その顔をぺるぺると舐め始めた。

—— 奇妙なこともあるもんだ。

夫は、赤子を拾い上げると、家に連れて変えることにした。家に変えると、妻は、病の床に伏していた。

聞くと、妻は、山に捨てたことを告げ、その後悔から病になってしまったのだという。

夫は、全てを悟った。自分が野山で拾った赤子が、自分の息子だという事を。

夫婦は、自分たちの過ちを反省し、息子の無事を心から喜んだ。

「へえ、良かったね。不思議な事もあるものね。」

「もし、もう少し、夫が帰るのが遅ければ、妻は、亡くなっていたかもしれないからね。」

「でも、どうして、鹿がその赤子を助けたのかしら？」

「驚くべきことに、その夫は、狩人だったんだ。」

「狩人？」

それは、鹿にとって、天敵ではないか。

「でも、その狩人は子鹿はとらなかったし、無駄な殺生は決してしなかったそうだ。それに、自分が猟をする野山を、いつも掃除していたんだって。」

ちゃんと新しい草花が茂るように、余分な小木の伐採をして、山に太陽の光が入るようにしていたそうだ。

「ちゃんと、鹿が子孫を残せるようにしていたのね。」

「まあ、そういうことだよな。」

その鹿たちに助けられた子は、今では立派な成人となって、父の手伝いをしているという。

返魂草

『萱草 吾下紐尔 著有跡 鬼乃志許草 事二思安利家理』

“忘れ草、我が下紐に、付けたれど、鬼の醜草しにくさ、言ことにしありけり”
(大伴家持)

「ご機嫌はいかがでしょうか。」

青年は、病で床に伏せっている若者に声をかけた。手には、紫の花が握られている。

「今日は、結構いいですよ。」

「外で、紫苑が咲いていた。これなら匂いもきつくありません。」

「そういつて、紫の小さな花を伏せる若者のそばに飾ってやる。」

若者は、紫苑の君の衣から、いつもとは少し違う香りがしていることに気がついた。

「また、どこかでおいたをしていたんですか。懲りない人ですねえ……。」

若者は、あきらめたようにため息をつく。

「私が早く起きられるように、その元気を少しは分けて欲しいものですよ。」

「できるものならそうしてあげたいですけどね。」

紫苑の君は、扇の奥で笑った。

「かわいい子を見つけましてね。」

「都中に、まだあなたが荒らしていない花があったのですか。」

「みたこともない子だったよ。少なくとも、去年はいませんでした。」

「かわいそうに。」

「いや、残念なことに、その子は女の子だったんですよ。」

紫苑の君は、穏やかな顔立ちをしていながら、女人には、興味がないのである。

「亡くなったご両親が、草の陰できつと嘆かれていますよ。もうちょっと、まともにおなりなさい。」

君は聞かなかったふりをして、飾った紫苑の一本を、もう一度手にとった。

「この別名、知っていますか？」

鬼の醜草、というそうですよと、君は言った。

「むかし、母を亡くした兄弟がいて、兄は悲しみに耐え切れずに、想いを忘れたいと忘れ草を供えて、
弟のほうは、心に思う気持ちを忘れたくないと、紫苑を供えたそうです。」

そうして、次第に兄は母を忘れ、弟はいつそう熱心に墓参りを続けたという。

「すると、親を想う心に感心した墓守の鬼が、夢のお告げで、弟に明日の事を予知できる能力を与えたそうですよ。」

そうして、弟は幸せに暮らすことができたという。

「あなたなら、思い人が儂くなったら、どちらの花を供えますか。」

「そうだね。どっちを供えることにしようか。」

伏せる若者は、悩み始めた。しかし、答えはすぐには見つからなかった。

「供えてもらうなら、忘れ草がいいけれどね。私のせいで残された人が苦しむのはつらい。」

「縁起でもないこといわずに、とつととその病を克服してください。」

「君なら、どっちを供えるつもりだい？」

「どちらも供えません。」

手に持った一輪を元の場所に戻した。

「私は、紫苑を供えそうだと思ったけどね。」

「想う人が死ぬ前に、僕の手で殺して自分も死にます。この花は、海を越えたところでは、返魂草とも呼ばれているそうですよ。死んだ人の魂を呼び返す意味です。」

本当に、戻ってきてその姿を見てしまったら、狂おしさに壊れてしまいそうだ。

「そうなるまえに、僕なら死んでしまおうでしょう。本当に想う人の死ならば、ですけど。」

「……君に本気で愛された人は、きっと大変だな。」

「失礼な、僕はいつでも本気ですよ。」

そういう科白をしゃあしゃあとはらまくんだから君は……と、若者は、寝返りをうつて、もういちどため息をついた。

——秋の季節も中ごろにさしかかろうとしていた。

夢の橋

匂えよ華 千古に咲け ちふる

廻れよ命 人の世尽きるまで

も地上は栄えるだろう

たとえ千の血が流れても それで

むかし、むかしのお話です。

一面に花が咲きほこる世界がありました。そこで、男女の赤子が、生まれました。

男君は、東の国で育ち、女君は、西の国で育ちました。

大人になった二人は、出会い、知らずに恋に落ちてしまいました。しかし、東の国と西の国の男女は、決して一緒になっではいけない約束事がありました。

その罪から悪鬼が生まれました。

周りの者によって、二人は、引き離されてしまいます。泣き続ける女君に、男君は一輪の花を贈りました。それでも、女君の悲しみは尽きません。女君は、自分の世界を憎むようになり、その心から悪鬼が次々生まれました。

男君から贈られた花は、精となり、その鬼を封じ込めました。花の精は、そのまま女君に宿り、善の心を取り戻させました。

精が宿った証として、女君の体には、小さな花のような痣が浮かび上がりました。

「愛せない代わりに、この世の果てまで、男君を守ろう。」

花の精の加護を受けた女君は、それから男君をあらゆる災難から守る存在となったということです。生まれ変わっても、女君は男君

を愛して、守り続けます。

しかし、最初の罪を犯した罰は、許されることはありませんでした。

——生まれ変わっても、二人は決して結ばれる事はなかったということです。

「先生、これっていつの時代の物語？」

外は、しとしとと長雨が降っていた。

九尾の狐の千代羅は、陰陽寮の羅泉のところで、巻物や草紙を読みながら暇を潰していた。動きやすいからか、男用の着物なら、狩衣を着るのが一番好きだが、烏帽子はかぶらずに、流れる長髪は読むのが邪魔にならないように無造作に結っただけの姿だ。他の貴族に見られたら、叱責されそうである。

「千代羅、人の机を勝手に見るではありません。それは私の草紙つきですよ。」

物語を書くことに挑戦しているんです、と奥で棚の書物を整理しながら言った。

「先生も、物語を書いているのかい？」

「ええ、紫式部までとはいかなくても、後世まで語り継がれる物語を書くのは、私の夢です。」

ちよつと休憩しましょうか、といったものに、朗らかな笑みを絶やさない顔で、千代羅の横に座った。

「先生なら、もつと童が喜びそうな物語を書くのだと思うけれど、これは、なんだか哀しい話だね。」

「祖母が語ってくれたものを、思い出しながら書いてみたのですよ。」

「じゃあ、これは、おばあさまが作った話なの？」

「そうかもしれないし、祖母も、誰かに語ってもらったお話なのかもしれない。」

雨の音は、消えることなく、しかし、強く地上を打つこともない。

「どうして、西の国と、東の国に住んでただけで罪になったの？」

「彼は太陽の子供で、彼女は月の子供だったからですよ。太陽と月が一緒になれば、この世はめっちゃめっちゃになるでしょう？」

「ふうん、なるほど。禁断の仲ってわけだね。」

「気に入ったのなら、あげましょうか。」

いや、と千代羅が首を振った。

「一度、読んだ物語は、私は心に留めておけるから。」

葉を重ねるように、奥底に、積もっていく。

そして、いつかは、夢になるのだ。

その場所では、散った花弁が風に巻かれて、幻想的に舞い落ちる。

——花びら、降る国。

この世の雨は、天の流す涙のよう。

されども、そこに、哀しみはないのに。

「哀しい物語の主人公は、幸せな物語の世界に渡れたらいいのに、って時々思うんだ。」

「だったら、君の夢の中だけでも、幸せな世界へ渡してあげれば、きつと喜ぶでしょう。」

——私の夢の中だけでも、君が安らかであればいい。

Season 1の登場人物たち

あさはる
朝春

隠密や軍師などとして働き、人を殺さずに世を安定させる宿命を持つ、霞夜叉かすみやしやの名を引き継いだ少女、沙羅姫の仮の姿。男性として、兵部省で高遠兵部卿たかとおひょうぶのの部下として、お仕事中。

ちよら
千代羅

朝春に鎮守の森で拾われた、九尾の狐。妖怪ではなく、吉兆の瑞獣。千年生きたので、天狐と呼ばれる存在。人間の姿の時は、ぬけるような肌に長髪。やせた長身。まつげは長いが、性別不明。
好きなものは、白酒と雪柳

きとめ
由羅姫

朝春の異母姉。美人だが、男嫌い。箏の名手。

あおむすめ
青蓮

右大臣家（朝春たちの親元）の元・家人。黒狼の妖怪が憑いており、手首の守りはずすと彼自身も妖怪になってしまう。羅泉の命で、千代羅と組んで、京の都を妖怪・悪鬼から守っている。
好きなものは、新鮮な鹿肉。

らせん
羅泉

陰陽寮の頭として、穏やかに過ごしているが、実は当代一の陰陽師。先代のく霞夜叉の協力者で、朝春が女子だと知る者の一人。

うきはのちゅう
桜木の中將

都で人気のある公達の一人。左近の中將。龍笛の名手。珠貴たまきという白猫を飼っている。

好きなものは、桜。嫌いなものも桜。

香梅の君かうばいのみ

桜木の中将の悪友。右近の中将。

屋敷に、自分の好きな梅の木をたくさん植えていることから、梅、香る君と呼ばれている。

百戦錬磨の貴公子だが、芸事が苦手。それが上手いことを自慢する人は、もっと嫌いで、目のかたきになっている。

女東宮（蘇芳）

彼の母の夢のお告げのせいで、女人として育てられたが実は男。

しかし、見た目としぐさはそこの姫より姫らしいが、中身はそこらの男より男らしい。

女房に囲まれてそだったせいで、女房言葉が染み付いてしまっている。

弾正院の宮

弾正台の長官。（弾正台の主な職務は中央行政の監察、京内の風俗の取り締まり）

親王だったが、父が讒言で罪に問われた為、今主上に見つけ出されるまで軟禁状態の生活を送らされており、世の中から忘れられていた。外見は主上に瓜二つで、病気がちな主上のために、時々身代わりをしている。

幽月ゆうげつ

紫苑に昔から仕える少年。顔の左側の火傷の痕がある事情で、前髪も後ろ髪も肩まで伸ばして切りそろえている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5389m/>

風の声が聞こえる

2011年12月7日03時07分発行